

# 東京国際大学論叢

## 人文・社会学研究

### 第5号

---

#### 論 文

- 荘子の對話の説話について  
——荘子と恵子・荘子と弟子を中心に—— …………… 水野 厚志…… 1
- 日本人学習者を対象とした中国語の唇歯摩擦音の  
発音指導法について …………… 緒方 哲也…… 25
- ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか  
——『有閑階級の理論』における進化論と文化論—— …………… 吉田 量彦…… 43

---

#### 研究ノート

- 18-19世紀のポーランド・ユダヤ人における  
アイデンティティの分裂 (1) …………… 川名 隆史…… 59

---

#### 調査研究

- History of Sweet Potato Ice Cream in the United States:  
A Brief Survey …………… DUELL, Barry…… 71
-



# 東京国際大学論叢

人文・社会学研究

第5号



莊子の對話の説話について  
——莊子と恵子・莊子と弟子を中心に——

水 野 厚 志

**The Dialogue Narratives in the *Zhuangzi*: An Examination and Comparison of Zhuangzi and Huizi and Zhuangzi and Zhuangzi's Disciples**

MIZUNO, Atsushi

Abstract

The dialogue-type narratives of Zhuangzi and Huizi are often added to the end of a specific chapter, which add a certain gravitas to the *Zhuangzi*. The analects contain the oldest parts of the *Zhuangzi*, and while many of them are in the “Inner Chapters” and the “Outer Chapters,” there are none in the “Mixed Chapters.” Because of this, it is evident that the editor placed these analects with a specific intention; some chapters are without analects but with important themes. Therefore, it is necessary to examine all the analects carefully and compare them in order to discern the path of the development of their schools.

*Keywords*: 莊子 (Zhuangzi), 恵子 (Huizi), 語録, 對話, 説話

目 次

- はじめに  
一. 對話形式の説話  
二. 莊子と弟子・莊子と恵子の對話による説話  
三. 語録としての莊子と對話を主とした説話の展開  
まとめ

## はじめに

### 「先行研究のまとめ」

現行本『莊子』は、郭象の刪定した三十三篇本であるが、その三十三篇の中で、内篇は莊子の自著であり、外篇・雜篇は莊子の弟子や後學の作であり、内篇は成立が最も早い価値も高く、外篇は成立がやや新しく価値も低くなり、雜篇は成立が最も新しく価値も最も低いと、今日まで一般に考えられてきた。

池田知久の論考によれば、こうした考えは、明代の朱得之『莊子通義』、焦竑『莊子翼』、李贄『續焚書』讀南華あたりから本格的に始まるが、そのきっかけを作ったのは、唐の韓愈・宋の蘇軾である。韓愈は歴史上初めて雜篇の「盜跖」・「説劍」・「漁父」を疑い、蘇軾はこれを受け継ぎ「讓王」・「盜跖」・「説劍」・「漁父」を疑った。蘇軾の「莊子祠堂記」は「寓言篇」と「列御寇篇」の間の「讓王」・「盜跖」・「説劍」・「漁父」の四篇を削り、「列御寇篇」と合わせて一つにした。それ以来、羅勉道・焦竑・王夫之・方潛など多くの學者がこれに従い、現代に至っても、張恆壽のようにこの方向で「寓言篇」と「列御寇篇」兩篇を關係づける者がいる。

日本でも福永光司『莊子内篇』（朝日新聞社、1966）の解説に見られるようにその傾向は續いている。また、金谷治『『莊子』内篇について』（『日本中國學會報』第五集、1953）では、内篇の三分の二が『莊子』の原初の思想であると述べていることから學術界の内篇偏重の流れを知ることが出来る。池田が指摘するように、先秦・前漢期では、『荀子』・『呂氏春秋』・『韓非子』が『莊子』から引用した諸篇は全て三十三篇本の外・雜篇にあり、『史記』「莊周列傳」中でも「漁父」・「盜跖」・「胠篋」・「畏累虛」・「亢桑子（庚桑楚）」の外篇・雜篇五篇を擧げている。當時すでに内・外・雜篇の區別があれば、内篇の文章や篇名を擧げずに、韓愈や蘇軾が疑った外・雜篇の文章や篇名だけを擧げることはなかったはずである。<sup>1)</sup>

そして、池田は、『莊子』を初めて現行本の前身である五十二篇本に整理したのは、前漢末期の劉向であったと考えている。劉向は、祕府の内に藏されていた十餘萬言を中心に、外から集めてきた材料を加えて整理し、五十二篇本に編纂したが、その時初めて内篇・外篇・雜篇などの區別を設け、内篇七篇の篇名を着想し、それらの篇名の下に、雜然たる堆積の中から適当な文章を選んで案配した。劉向が内篇を外・雜篇よりも重要と考えていたことは確實だが、それは前漢末の劉向の考えであって、内篇が莊周の自著であることを保證するものではなく、前漢末の思想界や劉向の、莊子像を示す思想史の資料としての意味を持つだけでしかない。従って、内篇・外篇・雜篇に捕らわれることなく、學派の淵源・發生・系統・類別・展開などを體系的總合的に論ずべきであるとする。<sup>2)</sup>

確かに内篇七篇の篇名は、三字から構成される非常に凝ったものであり、編輯者の内篇に對する並々ならぬ思いを見ることができ、後世編纂者の手を経て現行本『莊子』が成立したことを物語っている。篇名の作者が劉向であったであろう事は、佐藤明が内篇の篇名、「逍遙遊」・「齊物論」・「養生主」・「人間世」・「徳充符」・「大宗師」・「應帝王」は、篇の内容を要約した三字からなり、二字の熟語の末尾に一字を加えた形をとって一貫性があり、しかも、「徳充符」・「大宗師」等と緯書を思わせるような命名の仕方である。これは緯書が流行したころ、前漢末より後漢にかけての時代と關係があるのではないかと考えられるといっていることから裏付けられる。<sup>3)</sup>

また、『莊子』本文の内容について、文章の構成・文體の面から、原初の形態は語録であるとする學者も存在する。その主張は管見の限りにおいて、津田左右吉と佐藤明の二名だけである。佐

藤の引用する語録に関する先行研究は次の通りである。<sup>4)</sup>

津田左右吉は、『道家の思想とその開展』の中で、現在の『莊子』のもとになった原本『莊子』が荀子の時代に存在し、それは『老子』と同じ語録であったと想像したが、松本雅明は、『中國古代における自然思想の展開（松本雅明博士還暦記念出版會 東京 中央公論事業出版、1973）』の中で批判を加え、津田博士は、原本『莊子』を『老子』と同じ語録であると想像するが、それについての決定的な論據は存在しない。『莊子』が荀子の時代に語録として存在し、それがわづかの間に亡失してしまったといふより、語録なるものがはじめから存在せず、ために語録的引用がほとんどみられない、とした方が穩當であろう。すなはち最初から語録的性格をもたず、空想的説話によって組立てられてゐた、としても支障はないであろうとし、語録としての原本『莊子』の存在を否定した。一方、武内義雄博士は、「齊物論」・「逍遙遊」・「養生主」・「大宗師」の各篇に莊周の眼目が著されているとし、さらに金谷治博士は、武内博士の考えを發展させ、『莊子』内篇各篇の主要部（内篇全體のほぼ三分の二に當る部分）を『莊子』の原初の思想であると考えている。松本・武内・金谷三人の説に共通するのは、現在の『莊子』内篇には成立の層が見られ、その最も古い部分に莊周の自著（原本『莊子』に當たる）が説話の形で含まれているという點であり、齊物論篇前半部分は、三人が原本『莊子』として共通に認める唯一の部分である。

以上のように、『莊子』が内篇・外篇・雜篇に分けられている以上、そこには編者の思惑があるはずである。また、本文の構成についても、津田左右吉の指摘をないがしろにせず、もう一度原點にたち戻って精査する必要があると思われる。

#### 「問題の所在」

以上に挙げた先行研究に對して、『莊子』の内篇が從來指摘されてきたような、莊子の自著などではなく、尙且つ殘存する外・雜篇が編纂途中で放置されたものであったのならば、果たして莊子學派の淵源について知る手立てはあるのだろうか、という問題を提起したい。

周知のように『莊子』「寓言篇」の中には「寓言十九」とあり、『莊子』書中の九割は寓言を旨とする説話で出來ていることを「寓言」篇が成立した後の莊子學派では認識していたことは明らかである。實際に、『莊子』書中の論說部分を除いた大部分は説話、特に對話を中心とする説話でなり立っている。

また、雜多な説話に對して作者を莊子と見なす考えは、時代を隔てた後世、唐代の陸德明の外・雜篇に對する扱い方からも推測できる。外・雜篇はほとんどの篇が雜多な説話の寄せ集めから構成されていて、實際には書き出しの二語或いは三語を篇名として代用してるだけなのに對し、陸德明は「舉事以名篇（事物によって名付けた篇）」・「以義名篇（内容によって名付けた篇）」・「借物名篇（事物に假託して名付けた篇）」・「舉事以名篇（事物を列擧して名付けた篇）」・「以人名篇（人名によって名付けた篇）」・「以事名篇（事柄によって名付けた篇）」というように注記している。このことから、陸德明は各篇が莊子によって規則正しく排列されていると錯覺していたことが窺える。<sup>5)</sup>

外・雜篇の中で、内容や事柄によって名付けられている篇は、「庚桑楚」・「讓王」・「盜跖」・「説劍」・「漁父」だけである。そしてこの中でも、「讓王」・「盜跖」・「説劍」・「漁父」の四篇については、「先行研究のまとめ」の中でも触れたように、蘇軾によって削られ、「列御寇篇」と合わせて一つにされた篇である。また、司馬遷の『史記』に、『莊子』の篇名として擧げられているのは、「漁父」・「盜跖」・「胠篋」・「亢桑子（庚桑楚）」であるが、上記のように「胠篋」をのぞく「庚桑楚」・「漁父」・「盜

跖」は、内容や事柄によって名付けられている篇に相当する。以上は、残存する外・雑篇の篇名が、現行本『莊子』の編輯時にまだ編纂途中であったことを示す證左であることは想像に難くないが、なぜ『史記』でわざわざ上記の篇を取り上げているのか等の問題は、紙幅の関係で本論文では扱えないので、このことは稿を改めて述べていくことにしたい。

『莊子』の思想史的な展開を探ることも重要ではあるが、各篇の中で複雑に入り組んだ展開を見せる説話の中で、どの部分が原初の形態を持っているのかを、分析することも同様に重要である。テクニカルタームによる分析では、その語句によって年代や思想的背景がある程度特定される。しかし、その語句が含まれている一節しか分析の対象にならない。そして、説話の一部として、後から巧みに語句を織り交ぜて作爲した文章であるとも言い切れない。それに對して、内容や構成による分析では、文章全體を対象とすることができるからである。

また、津田左右吉が指摘するように老子同様、莊子が烏有先生である可能性も否定できず、莊子が主人公の篇を、原初の形態であるとするのは極めて危険である。<sup>6)</sup> それでは、全く手がかりがないかと言うと、弟子等身近な人物との對話を探る手立てが残されている。莊子と弟子或いは莊子の論敵との関係であれば、プラトンによる『ソクラテスの辯明』ではないが、弟子による師匠や論敵の描寫はその関係が近いほど偽ることが出来ないからである。莊子學派を形成し、假にも莊子を師に頂くグループが存在したことは、戦國末期の諸子の『莊子』の引用、および荀子などの莊子批判によって明らかであるので、少なくとも他學派にとって無視できない規模の思想家集團を形成していたことは確かである。また、莊子の論敵・好敵手といえば、『莊子』の中にもしばしば登場し、「天下篇」にも多くの紙面を割いている名家の惠施（恵子）を擧げることが出来る。弟子として、直接莊子本人ではなくても、莊子學派の一人として師に従事し、テキストの一部を傳えてきた者にとって、思想家集團を代表する莊子の姿は理想であり、特に弟子や惠施との對話の中で、その淵源となる思想は吐露され傳承されていったのではないか。現行の莊子の説話が、たとえ劉向の莊子像を示す思想史の資料としての意味を持つだけであったとしても、『莊子』の編纂過程や學派の淵源や展開などの一端を知る手立てを示すことは出来るのではないか。以上のように考え、莊子が登場する説話を中心にみていくことにするが、紙幅の関係上、今回は『莊子』書中で最も古い原初の思想を描いていると推測される「莊子と弟子」、「莊子と恵子」の對話を中心に分析していくことにする。

## 一. 對話形式の説話

『莊子』の中に含まれている莊子を主にした説話は全體で三十一箇所に及んでいるが、その中には、「莊子曰」で始まる説話形式でないものは三箇所ある。また、他に「齊物論篇」の「胡蝶の夢」等の數點を除くと、他はすべて莊子と他者との對話の説話であり、以下に示すように二十三箇所に及んでいる。

佐藤明は、『莊子』中の莊子の登場する説話について、一覽したものとして、木村英一『中國哲學の探求』（創文社、1982）所收「莊周説話を通じて見た莊周の死生觀」があるが、『莊子』の記事を一箇條（小論の五の「天道篇」の記述）缺いており、三十箇條になっていると指摘している。<sup>7)</sup> また、『莊子』中の莊周・莊子を扱った記述の中で、「莊子曰」で始まるものが三箇條（「天道篇」・「外物篇」・「列禦寇篇」）があるが、三者に共通する傾向として、記述も平易であり洗練されているものとは思われない。考察の餘地があるが、單に一人の人物がある時代に現れ、後の人がそれを繼承していったという單純なものではなく、文獻の成立の上で幾つもの層があり、最初は意外に素朴



なものが様々の過程を経て次第に洗練されていき、発展していった可能性も考えられると述べている。<sup>8)</sup>そして、池田知久は「莊子曰」の表現形式は、問答でなくて現れる例としては、「列禦寇篇」のものを除けば他に「天道篇」に一例があるだけだとする。<sup>9)</sup>しかし、こうした「莊子曰」で始まる事例は、記述も平易であり洗練されているものとは思われず、成立年代はいずれも遅く、原初の形態を示しているのかどうかも疑わしい。むしろ『莊子』の中に含まれている莊子を主にした説話は、対象が設定されているだけに、莊子の權威付けには缺くことが出来ず、それだけに編纂者の目に留まりやすかったのではないかと思われる。

以下、二十三例について挙げるが、収録されている篇名の後に、各説話ごとに通し番號・簡潔に記した内容・説話が作られた時代（池田知久による）の順に記してある。また、（ ）内の算用數字であるが、對話の相手が同一の場合に限り、通し番號を付している。

#### 【内篇】

##### 「逍遙遊篇」

- ① 莊子と恵子 (1) / 魏王の大瓢→無用の用 / 戦国後期～末期の作
  - ② 莊子と恵子 (2) ①②は一續きの文章 / 役立たずの樗→無用の用 / 戦国後期～末期の作
- ##### 「徳充符篇」
- ③ 莊子と恵子 (3) / 「人の好悪を以て内に其の身を傷つけず、常に自然に因りて生を益さざるを言ふなり」。 / 戦国最末期～前漢初期の作

#### 【外篇】

##### 「天運篇」

- ④ 莊子と商太宰蕩 / 「虎狼は、仁なり」。 / 前漢、文帝～武帝期
- ##### 「秋水篇」
- ⑤ 莊子と楚王 / 「吾聞く楚に神龜有り…寧ろ其れ生きて尾を塗中に曳かんか」。 / 戦国末期の文章
  - ⑥ 莊子と恵子 (4) / 「恵子 梁に相たり。莊子往きて之を見る。或るひと恵子に謂ひて曰く、莊子來たりて、子に代りて相たらんと欲す」。 / 戦国後期～末期の作
  - ⑦ 莊子と恵子 (5) ⑤から⑦は一續きの文章 / 「莊子恵子と濠梁の上に遊ぶ…」。一いわゆる豪梁説話 / 戦国後期～末期の作

##### 「至樂篇」

- ⑧ 莊子と恵子 (6) / 「莊子の妻死す。恵子 之を弔う。莊子則ち方に箕踞して盆を鼓ちて歌う」。 / 戦国末期～前漢初期の作
- ⑨ 莊子と髑髏 ⑧⑨は一續きの文章 / 轉化による死生の問題を取り扱う。 / 戦国末期～前漢初期の作

##### 「山木篇」

- ⑩ 莊子と弟子 (1) / 「周は將に夫の材と不材との間に處らんとす」。 / 戦国末期～前漢初期
- ⑪ 莊子と魏王 / 「貧なり、憊れたるに非ざるなり」。 / 前漢初期
- ⑫ 莊子と弟子 = 藺且 (2) / 「莊周 雕陵の樊に遊ぶ。一異鵲南方自り來る者を睹る。…莊周曰く、吾形を守りて身を忘れ、濁水に觀て清淵に迷へり」。 / 戦国末期～前漢初期

##### 「田子方篇」

- ⑬ 莊子と魯の哀公 / 「魯には儒少なし」。儒學の素養もないのに儒服を着ている者が多くいるのは、輕薄な社會現象である。 / 前漢時代

##### 「知北遊篇」

- ⑭ 莊子と東郭子 / 道の在る所を問う。屎尿にも道はある。 / 前漢初期

【雑篇】

「徐無鬼篇」

⑮ 莊子と恵子 (7) / 「儒・墨・揚・秉・恵」のいずれとも異なる莊子 (道家) の思想が、それらに君臨しうるものであることを主張し、その立場から恵子を批判する。／前漢初期に著された司馬談「六家要旨」や『淮南子』要略篇の考えに通じる。

⑯ 莊子と恵子 (8) ⑮⑯は一続きの文章／莊子が恵子の没後、言論の好敵手を失ったと嘆く。／前漢初期

「外物篇」

⑰ 莊子と恵子 (9) / 「無用を知りて、始めて與に用をいうべし」。「逍遙遊篇」①②とほぼ同じ趣向→無用の用／戦國末期の作

「寓言篇」

⑱ 莊子と恵子 (10) / 孔子を外化して内化しない人物として高く評價する。／戦國末期～前漢初期の作

「説劍篇」

⑲ 莊子と趙の文王／趙の恵文王に天子・諸侯・庶人の劍の極意によって政治の在り方を説く。／前漢時代

「列禦寇篇」

⑳ 莊子と曹商 / 「宋の曹商、秦王に百臺の車を賜る。治むる所 愈下りて、車を得ること愈多し」。宋王は、偃王とすれば、在位は前三二八年～前二八六年。本章は、本書の作者莊子の活動年代を推測する資料となっている。／秦帝國崩壊後の成立

㉑ 莊子と (或) 人 / 「今、宋國の深きは、直に九重の淵に非ざるなり。宋王の猛は、直に驪龍のみに非ざるなり→黒龍領下」。政治權力の恐ろしきを強調する。／戦國時代

㉒ 莊子と或 (人) / 莊子と犢牛は、「衣するに文繡を以てし、食うに芻叔を以てするも、其の牽きて太廟に入るに及びては、孤犢たらんと欲すと雖も其れ得べけんや」。→本章は、「秋水篇」の文と同工異曲。政治的な地位と養生とを對立させて、養生を取る。／戦國時代

㉓ 莊子と弟子 (3) ㉑から㉓は一続きの文章 / 「莊子、將に死せんとす。吾れ天地を以て棺槨と爲し、日月を以て連璧と爲し、星辰を珠璣と爲し萬物を齋送と爲す」。／戦國末期

以上、二十三例の莊子と他者との對話の説話は、内・外・雑篇に渡りバランス良く配置されているものの、「逍遙遊篇」・「秋水篇」・「至樂篇」・「徐無鬼篇」・「列禦寇篇」の中には數話連続して収められている箇所がある。特に「逍遙遊篇」・「秋水篇」・「列禦寇篇」では、篇末に莊子と他者との對話の説話がまとめて収録されている。なお、莊子と他者との對話の説話については、池田のいうように、類似の説話が内・外・雑篇に散見する。例えば⑱莊子と恵子 (10) の「孔子行年六十而六十化、…」については、「則陽篇」に蘧伯玉のこととして既出。孔子を外化して内化せざる人物として高く評價している。<sup>10)</sup> また、⑨莊子と犢牛は、主人公は莊子だが、篇末には列子を主人公とした列子と犢牛との對話の説話が置かれ、「至樂篇」の他の對話の説話同様、死生觀を中心に論を展開する對話の説話で締めくくられている。更に⑰莊子と恵子 (9) は、「逍遙遊篇」①②とほぼ同じ趣向で「無用の用を説いたものであり、⑲莊子と或 (人) は、政治的な地位を得ることと養生とを對立させて、養生を取る説話であり、「秋水篇」の文章と同工異曲である。<sup>11)</sup>

佐藤のいうように、『莊子』中の説話については幾つかの説話群に分類することも可能であるが、それぞれの説話群の間には、傾向の違いが見られ、同一の作者によるものとは考えにくい。さら

に付け加えれば、同一の説話群であってもそれが内篇と外・雑篇とにかかわらず見られ、内篇と外・雑篇との間には説話の質の違いがあっても傾向の違いは見られず、例えば内篇のみを莊周の手になるというように同一人物の手になるということは考えにくい。このように見れば、原本『莊子』が莊周の手になるとして、『莊子』中の説話の一部、あるいは莊周が説話の形で、思想を表現する示唆を何らかの形で示したということは考えられるが、説話の多くの部分を莊周が記したとは考えられない。<sup>12)</sup>

しかし、弟子として直接莊子本人ではなくても、莊子學派の一人として師に従事し、テキストの一部を伝えてきた者にとって、思想家集團を代表する莊子の姿は理想である。特に弟子や恵施との對話の中で、その淵源となる思想は吐露され傳承されていったのではないか。現行の莊子の説話が、たとえ劉向の莊子像を示す思想史の資料としての意味を持つだけの存在であったとしても、『莊子』の編纂過程や學派の淵源や展開などの一端を知る手立てを示すことは出来るのではないか。

また、佐藤は莊子の原本は『老子』と同じ語録であったと想像したのは津田左右吉であったが、松本雅明に批判されてより黙殺されてきた。諸學者が莊子の要諦として認める齊物論の冒頭の説話は、當時の思想界の情況から考察すれば、恐らく當時は筆記の形態も限定され發展段階にあったであろうことから、従来とは全く異なった論理的思考様式が突然出現したと考えることは、思想史・文化史の發展から見てもありえない。哲學的であり論理的思辯を盡くしたものが作製されることは不可能であり、原本『莊子』と比較して考えるべきは『論語』と『老子』といった広い意味での語録であるという。<sup>13)</sup>

さらに佐藤は、「齊物論」の冒頭の説話の前半を説話部、後半を論説部（いわゆる語録を含む部分）と假定し、本來は別々の説話が合わさって一つの説話を形成しており、しかもそれは松本雅明が原本『莊子』に當るとされた説話の一部に認められるとする。また「齊物論」の後半は、冒頭の説話の「論説部」と同様に語録的性格を持つ文獻であると考えている。前半の長梧子の発言については、その表現が感覺的であり、文學的傾向を持っているのに對し、後半の部分はいわば理知的であり思辯的傾向を持つものである。また、前半の長梧子は、理論的に説き伏せようとはせず、巧みな例などを用い感覺に訴えて作者の思想を傳達しようとしている。そして、作者の主張を論理的に展開させて論理に説き伏せようとする意圖が見られ、前半と後半とでは表現の仕方において違いがあるので、前半部分と後半部分は本來別の文獻であったと考えている。<sup>14)</sup>

以下實際に、第二章では莊子と弟子或いは論敵の恵子との對話、「二十三例の莊子と他者との對話の説話」の中でも、莊子との結びつきが容易に考えられ、全體のほぼ三分の二を占めている「莊子と弟子」・「莊子と恵子」の十三例を見ていく。

## 二. 莊子と弟子・莊子と恵子の對話による説話

本論文では、莊子と關係の深い相手との説話によって、『莊子』書を探ることが目的であるので、最初に煩を厭わず本文及び譯文と説話全體の構成を擧げることにする。なお、各説話に付されている通し番號は、前章と同じものを引き續き利用している。また、文中のA-Bの區分であるが、Aは對話からなる説話を表し、語録の要素を含むものが多い箇所を示している。Bは一つのまとまった説話からなり、Aの補足的役割を果たすことが多い箇所を示している。また語録の定義は、一句内の語句が整っている（とりあえず、本論文では四字句、ないし五字句を中心としたものとする）・對句を形成している・押韻している・聯綿字（漢字2字よりなる雙聲や疊韻による擬態語

や人や物の形容)の使用・反語の使用・論理的文章による警句や格言になっている等のレトリックを使用していることを基本とする。また、原文の底本は新編諸子集成『莊子集釋』を利用して、句讀點等變更してある部分がある。<sup>15)</sup>

### 【内篇】

#### 「逍遙遊篇」

##### ①惠子と莊子 (1)

惠子謂莊子曰、「魏王貽我大瓠之種，我樹之成而實五石。以盛水漿，其堅不能自舉也。剖之以為瓢，則瓠落無所容。非不喭然大也，吾爲其無用而捨之」。莊子曰、「夫子固拙於用大矣。宋人有善爲不龜手之藥者，世世以泝泝統爲事。客聞之，請買其方百金。聚族而謀曰、『我世世爲泝泝統，不過數金，今一朝而鬻技百金。請與之』。客得之，以說吳王。越有難，吳王使之將。冬，與越人水戰，大敗越人。裂地而封之。能不龜手一也，或以封，或不免於泝泝統，則所用之異也。今子有五石之瓠，何不慮以爲大樽而浮乎江湖，而憂其瓠落無所容。則夫子猶有蓬之心也夫」。

惠子は莊子に向かって、「魏王は私に大ひょうたんの種を下さった。それを蒔いたら、五石(約95リットル)はあろうかという實がなった。飲み物を入れれば、重くて持ち上がらない。二つに裂いてひしゃくにしても、浅くて何も容れることができない。大きくてばかでかいが、役に立たないので、打ち碎いてしまったよ」といった。莊子はこたえていった。「あなたは大きな物を用いるのが下手ですね。宋國の人であかぎれの薬を上手に作る人がいて、日々眞綿を水にさらすことを生業としていた。旅人はそれを聞きつけると、製法を百金(約25キログラム)で買いたいと頼んだ。一族を集めて相談し、『私たちは日々眞綿を水にさらして来たが、儲けは数金だけだった。今一朝にして製法が百金で賣れる。賣ってしまおう』といった。旅人はあかぎれの薬を手に入れると、吳王に(薬效を)説きに行った。越國との間に戦難が起こると、吳王は將軍に任命した。冬 越軍と水上で戦い、大敗させた。(その功績によって)吳王は封地を割いて與えた。あかぎれの薬效は同じでも、かたや領主に取り立てられ、方や眞綿を水にさらす生業から抜け出せないのは、用い方が異なるからだ。今、あなたは五石の大ひょうたんを持っているのなら、どうして大きな樽を作って、江湖に浮かべようとは考えずに、浅くて何も容れることができない、などと愚癡をこぼすのだ。まだまだあなたには物欲があるのではないかな」と。

全文がたとえ話を利用して論理的に「無用の用」について論を展開する、對話の説話で構成されている。全體が長短句から成り、語調が整っていないものの、レトリックの面から語録としての性質を備えていることが分かる。論理的でこなれた文章になっているのは、語録としての論説部を説話の中に取り込んで、文章を再構成した事による。佐藤によれば、①惠子と莊子(1)は、修辭による語録としての要素は少ないが、齊物論篇と同様、巧みに手を加えられており、論理的な展開を中心とする語録と見ることができる。<sup>16)</sup> 泝泝は綿を水でさらす雙聲の擬態語。<sup>17)</sup>

##### ②惠子と莊子 (2)

惠子謂莊子曰、「吾有大樹，人謂之樗。其大本擁腫而不中繩墨，其小枝卷曲而不中規矩。立之塗，匠者不顧。今子之言，大而無用，眾所同去也」。莊子曰、「子獨不見狸狌乎。卑身而伏，以候敖者，東西跳梁，不避高下，中於機辟，死於罔罟。今夫斄牛，其大若垂天之雲。此能爲大矣，而不能執鼠。今子有大樹，患其無用，何不樹之於無何有之鄉，廣莫之野，彷徨乎無爲其側，逍遙乎寢臥其下。不夭斤斧，物無害者，無所可用，安所困苦哉」。

惠子は莊子に向かって、「私のところに大木があり、人はこれを樗と呼んでいる。その幹は節

くれ立って墨繩も當てられず、小枝はぐねぐね曲がってコンパスや定規も當てられない。道端に立っていても、大工は一顧だにしない。ところで、あなたの言説も、大きいだけで役に立たず、大眾が顧みないのも同じだね」といった。莊子はこたえていった。「あなたも山猫やイタチを見たことがあるだろう。身を低くして伏し、獲物を待ち構え、あちらこちらに跳ね回り、高いところも低いところも物ともしないが、罌にはまったり、網にかかって死んでしまう。ところがあの大牛は、空に垂れこめた雲のように大きい。その能力というと大きいだけで、鼠一匹も取れない。今、あなたは大木を持ちながら、役に立たないと心を痛めている。どうしてそれを「無何有の郷」や、「廣莫の野」に植えて、ゆったりとその傍らで無爲に過ごし、ゆうゆうとその下で寝そべらないのか。まさかや斧で切られず、何者にも危害を加えられないのだから、役に立たないといって、心を痛めることはないのだ」と。

①と同様、對話形式の説話であるが、全體が語調の調った四字句、ないし五字句を中心に構成されている。また、「何不樹之於无何有之郷」、「彷徨乎无爲其側、逍遙乎寢臥其下」といった比較的長い文を除いても、全體の構成に支障をきたさない。擁腫は、木が節くれ立ち、こぶだらけのさまを表す疊韻の語。巻曲は、まがりくねったさまを形容する雙聲の語。彷徨・逍遙は、ともに自由気ままで、何物にも拘束されない状態をいう疊韻の語。<sup>18)</sup> いずれもその前後の文は對句を形成している。この章は、語録が後に對話形式の説話として再構成され、文意がよく通るよう作り替えられたと考えられる。また、編者によって篇の一番最後に意圖的に配置されている。

「徳充符篇」

### ③惠子と莊子 (3)

惠子謂莊子曰、「人故无情乎」。莊子曰、「然」。惠子曰、「人而无情、何以謂之人」。莊子曰、「道與之貌、天與之形、惡得不謂之人」。惠子曰、「既謂之人、惡得无情」。莊子曰、「是非吾所謂情也。吾所謂无情者、言人之不以好惡内傷其身、常因自然而不益生也」。惠子曰、「不益生、何以有其身」。莊子曰、「道與之貌、天與之形、无以好惡内傷其身。今子外乎子之神、勞乎子之精、倚樹而吟、據槁梧而瞑。天選子之形、子以堅白鳴」。

惠子は莊子に向かって、「人間にはもともと感情がないのか」といった。莊子は、「そうだ」とこたえた。惠子は、「人間なのに感情がなければ、どうやって人間と言えるのか」といった。莊子は、「道が人間の顔かたちを與え、天が人間の身體を與えているのだから、これを人間と言わないわけにはいかない」とこたえた。惠子は、「それを人間というのであれば、感情がないわけがない」といった。莊子は、「それは私のいう感情ではない。私が、感情が具わらないというのは、人間が、好悪の感情によって自分自身を傷つけず、いつも自然に任せて、人爲的に生命の働きを延ばさないことをいうのだ」とこたえた。惠子は、「人爲的に生命の働きを延ばさなければ、どうやって身體を維持していけるのだ」といった。莊子は、「道が人間の顔かたちを與え、天が人間の身體を與えているのだから、好悪の感情によって自分自身を傷つけないようにするべきだ。ところが、あなたは自分の精神を磨り減らし、精力を盡くし、木に寄りかかってぶつぶつと語り、机にもたれて瞑想している。天があなたに身體を與えてくれたというのに、あなたは「堅白論」の詭辯をがなり立てて（精神を磨り減らし自分自身を傷つけて）いるのだ」といった。

對話形式の説話であるが、全體が語調の調った四字句、ないし五字句を中心に構成され、「言人之不以好惡内傷其身、常因自然而不益生也」といった比較的長い一文を除いても全體の構成に支障をきたさない。興膳宏によると、精・瞑・形・鳴は押韻している。<sup>19)</sup> 語録が中心の説話である。この章についても、前出「逍遙遊」②と同様、語録が後に對話形式の説話として再構成され、文

意がよく通るよう作り替えられた文であると考えられる。また、編者によって篇の一番最後に意圖的に配置されている。

佐藤は、前章の「逍遙遊篇」①恵子と莊子(1)・②恵子と莊子(2)、「徳充符篇」③恵子と莊子(3)、「外物篇」④恵子と莊子(9)に關連する内容について次のように述べている。

「徳充符篇」の説話は、恵子が莊子を相手に論理的問題について議論の形で話が進められている。直接名家の命題が掲げられているわけではないが、「徳充符篇」の莊子の發言の最後に、「子以堅白鳴」とあり、名家としての恵子像が認められる。しかし、「外物篇」では、批判を莊子個人あるいは個人の學説に與えていて、恵子が自己の論理を展開させているわけではない。しかも、「外物篇」の方が、「子言無用」とあるのに對し、「逍遙遊篇」の方は、「今子之言、大而無用」とあるように、莊子の學説が役に立たないといっている點に共通性がある。「子言無用」は、むしろ莊子の議論を展開させる導入として効果的であり、莊子のたとえ話に答える形での恵子の『無用』という言葉は、莊子の言葉にはずみをつけ、莊子の理論を浮き立たせており、恵子は莊子の學説を引き出す「御膳立て」の意味しかない。「徳充符篇」・「秋水篇」の問答においても恵子が莊子をひきたたせる役割を擔っているが、そこには名家の恵子像が現れているのに對し、「外物篇」あるいは「逍遙遊篇」の問答の方は、莊子の論敵が恵子である必要性もなく、名家の思想家である必要性もない。莊子の發言を浮き立たせるために論敵としての恵子を登場させたともとれる。「徳充符篇」・「秋水篇」は、會話のテンポも速く、特に「秋水篇」の方は具體的にその場面が想像できるほどなのに對し、「外物篇」・「逍遙遊篇」は、たとえ話が引用され間も長くなっている。特に「逍遙遊篇」の問答は、恵子の發言を含め四つの會話にすべてたとえ話が引用され、「外物篇」の説話より、より巧みに手が増えられた感がある。「逍遙遊篇」の問答は、實際の會話ではなく創作され巧みに修飾が施されているようである。修飾というよりも、ここで引用されているたとえ話の材料が手許にあり、それをもとに巧みに組み立てられ創作されたものでないかと思われるといっている。<sup>20)</sup>

さらに、内篇の莊子の記述は、「逍遙遊篇」の他に、「齊物論篇」の「昔者莊周夢爲胡蝶。……」と、「徳充符篇」の恵子・莊子問答のみであり、『莊子』内篇が莊周の自著である、もしくは莊周と關係があるとされているのは、この部分があるからに他ならず、どちらも作爲的に篇の末尾に置かれている。それは、一篇全體の効果を考え、その中で配置せられたものであるといえる。『莊子』内篇あるいは内篇の各篇を莊周と結びつけようとする意圖のもとに、莊周の登場する説話を末尾に置いたのではないかと考えられる。そして、『莊子』中の説話に莊周または莊子に關する記述は三十一箇條あるが、これに類似した形式のものはこの他にはない。この部分を見る限り、莊周という人物がいて、彼自らがこの部分を記したかどうかは斷定する材料に缺けるが、「逍遙遊篇」も「齊物論篇」も最後に莊周に關する説話を載せていることから、これらの文獻を莊周という人物に關係づけようという意圖のもと、このような編輯になったと見ることもできる。「齊物論篇」の最後に付せられた莊周が夢に胡蝶となった話は、それぞれの前半とは異なる資料であり、論理的主張を主體にしたという點において語録である可能性もある。「齊物論篇」の場合は、それぞれの説話をつなげれば、一つのテーマに結びつけることはできるが、「逍遙遊篇」のように説話と論説文を巧みに織り込んでいないともいっている。<sup>21)</sup>

佐藤も述べているように、内篇-特に「養生主」までの文章について、『莊子』全書を莊子の作とするために編者の手が大きく加わっている。そして莊子を説話の題材、主人公にしようという目的のために、たとえ話としての語録を説話に織りこんでいっているものは、内篇に限らず、外・雜篇についても存在するのである。不完全で練られていないものの、語録と説話との構成によって構成されている説話を多く見ることができるからである。

以下、引き続き、外・雑篇の對話の説話についても見ていくことにする。

【外篇】

「秋水篇」

⑥ 恵子と莊子 (4)

恵子相梁、莊子往見之。或謂恵子曰、「莊子來、欲代子相」。於是恵子恐、搜於國中三日三夜。莊子往見之、曰、「南方有鳥、其名爲鷦鷯、子知之乎。夫鷦鷯發於南海而飛於北海、非梧桐不止、非練實不食、非醴泉不飲。於是鴟得腐鼠、鷦鷯過之。仰而視之曰、『嚇』。今子欲以子之梁國而嚇我邪」。

恵子は梁の宰相であった。ある時、莊子は恵子に会いに出かけた。ある者が恵子に、「莊子がやって来て、あなたに代わって宰相の位に就こうとしている」といった。そこで恵子は恐くなり、國中を三日三晩にわたって捜させた。莊子は出向いて行って恵子に会い、次のようにいった。「南方に鳥がいて、その名は鷦鷯というのだが、あなたは知っているか。そもそもこの鷦鷯は、南海を飛び立って、北海を目指して飛んでいく途中、梧桐でなければ止まらず、竹の實でなければ食わず、甘露の泉の水でなければ飲まないのだ。そこである時、一羽のフクロウが腐った鼠を手に入れたところに、鷦鷯がたまたま通りかかった。すると、(獲物を奪われまいとフクロウは、) 仰ぎみて凝視し、一聲『クワッ』と叫んだというのだ。今あなたは梁國 (の宰相の位) のことで、私を『クワッ』と叫ぶつもりなのかな」と。

對話形式の説話であるが、全體が語調の調った四字句、ないし五字句を中心に構成されている。また、文意を補足している「夫鷦鷯發於南海而飛於北海」、「於是鴟得腐鼠」、「今子欲以子之梁國而嚇我邪」といった比較的長い語句を除いたとしても、全體の構成に支障をきたさない。もともと四字句、ないし五字句を中心に構成された語録であったが、後に對話形式の説話として再構成され、文意がよく通るよう作り替えられたと考えられる。

⑦ 恵子と莊子 (5)

莊子與恵子遊於濠梁之上。莊子曰、「儻魚出遊從容、是魚之樂也」。恵子曰、「子非魚、安知魚之樂」。莊子曰、「子非我、安知我不知魚之樂」。恵子曰、「我非子、固不知子矣。子固非魚也、子之不知魚之樂全矣」。莊子曰、「請循其本。子曰『汝安知魚樂』云者、既已知吾知之而問我。我知之濠上也」。

莊子は恵子と一緒に濠水の橋のたもとでぶらぶらしていた。莊子は、「ハヤがゆったりと泳ぎ回っている。これこそ魚の楽しみだ」といった。これを聞いて恵子は、「あなたは魚でもないのに、どうして魚の楽しみが分かるのか」といった。莊子は、「あなたは私でもないのに、どうして私に魚の楽しみが分からないということが分かるのだ」と應えた。恵子は、「私はあなたでないから、確かにあなたのことは分からない。しかし當然あなたは魚でないのだから、あなたに魚の楽しみが分からないのは、間違いない」と應えた。莊子は、「根本に立ち返って考えてみよう。あなたは、『どうして魚の楽しみが分かるのか』といったのは、あなたは私が魚の楽しみを分かっていることを知っていて問いかけたのだ。私にはさっき濠水のほとりで、魚の楽しみが分かったのだよ」と應えた。

全文が對話の説話で構成されている。語調が整っている問答體で書かれている。また、「齊物論篇」の篇末の説話と同様、論理的に論を進めていることから、語録と見なすことが出来る。

「至樂篇」

⑧ 恵子と莊子 (6)

莊子妻死。恵子弔之、莊子則方箕踞鼓盆而歌。恵子曰、「與人居長子、老身死。不哭亦足矣、

又鼓盆而歌，不亦甚乎」。莊子曰，「不然。是其始死也，我獨何能无慨然。察其始而本无生。非徒无生也，而本无形。非徒无形也，而本无氣。雜乎芒芴之間，變而有氣，氣變而有形，形變而有生。今又變而之死。是相與爲春夏秋冬四時行也。人且偃然寢於巨室，而我嗷嗷然隨而哭之，自以爲不通乎命，故止也」。

莊子の妻が死んだ。恵子が弔問に行くと、莊子はちょうど足を投げ出して坐り、鉢を叩いて歌っているところだった。恵子は、「連れ合いになって子供を育て、年を重ねた仲じゃないか。哭さないというだけでも充分非禮なのに、その上 鉢を叩いて歌うとは、ひどすぎやしないか」といった。莊子は應えていった。「そうではない。これが死んだ当初は、私も胸に堪えた。しかし、これの始まりをじっくりと考えてみると、もともと生命はなかった。いや、生命がなかっただけではなく、もともと形さえなかった。いや、形がなかっただけではなく、もともと氣すらなかったのだ。暗く混沌とした物の中で、雜然と混じりあっていたものの中から氣が生まれ、氣が變化して形が生まれ、形が變化して生命が生まれた。そして、今また變化が起こって死に向かった。これらは春夏秋冬の四季を相互に繰り返すことと同じだ。人が（天地という）巨大な寢室でゆったりと眠りにつこうとしているときに、私が側を離れず ウオーウオーと哭していたのでは、自分自身それこそ生命の道理に通じないと思い、それで止めてしまったのだ」と。

對話形式の説話であるが、全體が語調の調った四字句、ないし五字句を中心に構成されている。「莊子則方箕踞鼓盆而歌」、「我獨何能无慨然。察其始而本无生。非徒无生也」、「雜乎芒芴之間…以下の文」といった文意を補足している比較的長い語句を除いたとしても、文意は通り、全體の構成に支障をきたさない。もともと四字句、ないし五字句を中心に構成された語録であったが、後に對話形式の説話として再構成された段階で修辭が加えられ、文意がよく通るよう作り替えられたと考えられる。「察其始而本无生…而本无形」は、興膳宏によると、生と形で押韻している。「氣變而有形，形變而有生」は、形と生で押韻している。レトリックの面でも語録としての性質を備えている。<sup>22)</sup>

「山木篇」

⑩ 莊子と弟子 (1)

A 莊子行於山中，見大木，枝葉盛茂，伐木者止其旁而不取也。問其故，曰，「无所可用」。莊子曰，「此木以不材得終其天年」。夫子出於山，舍於故人家。故人喜，命豎子殺鴈而烹之。豎子請曰，「其一能鳴，其一不能鳴，請奚殺」。主人曰，「殺不能鳴者」。明日，弟子問於莊子曰，「昨日山中木，以不材得終其天年。今主人之鴈，以不材死。先生將何處」。

B 莊子笑曰，「周將處夫材與不材之間。材與不材之間，似之而非也。故未免乎累。若夫乘道德而浮游則不然。无譽无訾，一龍一蛇，與時俱化，而无肯專爲。一上一下，以和爲量，浮游乎萬物之祖，物物而不物於物。則胡可得而累邪。此黃帝・神農之法則也。若夫萬物之情・人倫之傳，則不然。合則離，成則毀，廉則挫，尊則議，有爲則虧，賢則謀，不肖則欺。胡可得而必乎哉。悲夫，弟子志之。其唯道德之鄉乎」。

A 莊子は、山中を歩いていて、枝葉のよく茂った一本の大木を目にした。木こりたちは、その傍に立ち止まったが伐ろうとしない。わけをたずねると、「使い道がない」という返答だった。莊子は、「この木は役に立たないから、天壽を全うできたのだ」といった。莊周先生は山から出ると、舊知の家に泊まった。舊友は喜び、召使いに鶯鳥をつぶして料理するよう言いつけた。召使いが「一羽はよく鳴きますが、一羽は鳴きません。どちらをつぶしましょう」とたずねると、主人は、「鳴かない方をつぶしなさい」と答えた。明るる日、弟子が莊子に、



「昨日の山中の大木は、役に立たないために天壽を全うできました。ところがご主人の鷲鳥は、役に立たないため殺されました。先生は一體どちらのお立場ですか」と尋ねた。

B 莊子は笑って答えた。「私 周は、役に立つのと役に立たないものの中間に身を置こう。しかし、役に立つのと役に立たないものの中間というのは、正しいように見えるが実はそうでない。だから、まだ面倒なことから逃がれられないのだ。ところが、あの道とその働きに乗って、自由に浮遊する生き方は大違いだ。譽れにも貶りにも超然として、天翔る龍になったり地に潜む蛇になったりし、時の流れとともに變化して、決められた生き方に固執しない。天高く飛翔したかと思えば、地の深みに下り、調和を内に保つことを基準としながら、萬物の根源に浮遊して、あらゆる物を物として存在させながら、自己は他の物によって左右されることはない。そうであるなら、面倒なことから逃がれられないことはないのだ。これが、神農・黄帝といった古の聖王が模範とした生き方なのだ。しかし、萬物の實情や、人の道として伝えられてきたものとなると、そうはいかない。合えば分裂し、完成したかと思えば崩壊し、清廉であれば挫かれ、高貴であれば没落し、有能であれば損なわれ、賢明であれば謀略に陥れられ、不肖であれば欺される。何一つ確實なものはないのだ。悲しいことだね、君も覚えておきなさい。據り所となるのはただ道とその働きが宿す世界だけなのだ」と。

A では對話の中で「材と不材との間」について提示し、B では「道とその働き」を據り所として生きるべきことを主張する。全體が對話形式の説話で構成されているが、A の對話に對して、B では冒頭で「材と不材との間に身を置こう」と回答しながら、實際は「道とその働き」についての解説・説明となっている。A の對話を中心とする説話に、B の語録を中心とする説話が加わることによって成立したものと思われる。興膳宏によると、「无譽无訾，一龍一蛇，與時俱化，而无肯專爲。一上一下，以和爲量，浮游乎萬物之祖」は、訾・蛇・化・爲・下・祖が押韻している。「合則離，成則毀，廉則挫，尊則議，有爲則虧，賢則謀，不肖則欺」は、離・毀・挫・議・虧・謀・欺が押韻している。<sup>23)</sup> A の對話を中心とする説話に對し、B の説話はレトリックが用いられている。また、語調も比較的整っていることから、B の説話は語録としての性格を備えているといえる。なお、池田は「無用の用の思想を一歩進めた文章である。編纂の時點で『呂氏春秋』必己篇から取った。『呂氏春秋』の原文は戰國末期の作である」とする。<sup>24)</sup>

## ⑫ 莊子と弟子 = 蘭且 (2)

B 莊周遊乎雕陵之樊，觀一異鵲自南方來者，翼廣七尺，目大運寸，感周之穎而集於栗林。莊周曰、「此何鳥哉。翼殷不逝，目大不覩」。蹇裳躩步，執彈而留之。觀一蟬方得美蔭而忘其身。螳螂執翳而搏之，見得而忘其形。異鵲從而利之，見利而忘其眞。莊周恍然曰、「噫，物固相累，二類相召也」。捐彈而反走。虞人逐而諍之。

A 莊周反入，三月不庭。蘭且從而問之，「夫子何爲頃間甚不庭乎」。莊周曰，「吾守形而忘身。觀於濁水而迷於清淵。且吾聞諸夫子曰，『入其俗，從其俗』，今吾遊於雕陵而忘吾身，異鵲感吾穎，遊於栗林而忘眞，栗林虞人以吾爲戮。吾所以不庭也」。

B 莊周が、雕陵の園林を心地よくぶらぶらとしていると、一羽の奇妙な鵲が南方から近づいて來るのが目にとまった。翼の大きさは幅七尺（約1.5メートル）、目玉の大きさは直径一寸（約2.3センチメートル）、莊周の額をかすめて栗林に舞い降りた。莊周は、「これは何という鳥かな。翼はでかいのに遠くに飛べず、目玉は大きいのにこちらが見えないようだ」とつぶやいた。着物の裾をからげて早足で忍び寄り、弾き弓を手に執って射ようとした。ふと見ると、一匹の蟬が今まさに心地よさ氣な木蔭を手に入れて、我が身のことなどすっかり忘れていている。（その蟬を）螳螂が鎌を振り上げて打とうと狙い、獲物に目が向いて我が身のことを

すっかり忘れている。(その螳螂を) 奇妙な鵲が付け狙っているが、欲に目がくらんで本當の自分をすっかり忘れている。莊周はぞうっと怖くなり、「ああ、萬物はもともと互いに傷つけあい、類が類をよぶ関係なんだ」とつぶやいた。そのまま弾き弓を投げ捨てると、身をひるがえして走り出した。すると、園林の番人が追いかけて来て、「栗泥棒」ととがめた。

A 莊周は家に歸ると、何ヶ月もの間じっとふさぎこんでいた。(弟子の) 藺且がその様子を見て、「先生はどうしてこの頃ひどくふさぎこんでおられるのですか」と尋ねた。莊周は應えていった。「私は、上面を整えることに氣を取られて、我が身のことを忘れていた。(世間の) 泥水に目を奪われて、(眞理の) 清らかな淵を見失ってしまったようだ。それに、私は先生から『その俗に入りては、その俗に従え』と教えられたが、この度、雕陵をぶらぶらとして我が身を忘れていたら、奇妙な鵲に額をかすめて飛ばれ、栗林の中をぶらぶらしているうちに本當の自分をすっかり忘れていたら、栗林の番人に辱めを受けて追いかけられる、という始末だ。私はそんなわけでふさぎこんでいるのだよ」と。

Bは雕陵の園林で奇妙な鵲を見つけた莊子であったが、實は鵲は螳螂を狙い、螳螂は蟬を狙っていた。そして、莊子自身栗泥棒に間違われる始末であったことをまとめた説話である。Aでは冒頭で「材と不材との間に身を置こう」と回答しながら、實際は「道とその働き」についての解説・説明となっている。Bの説話はレトリックが用いられ、地の文を除いた部分では語調が整っていることから、語録としての性格を備えている。そして本章は、その語録を中心とする説話に、Aの對話の説話が加わることによって成立したものと思われる。長文の説話の後に對話の説話が置かれている。興膳宏によると、「睹一蟬方得美蔭而忘其身。螳螂執翳而搏之，見得而忘其形。異鵲從而利之，見利而忘其眞」は、身・形・眞が押韻している。「吾守形而忘身。觀於濁水而迷於清淵」は、身・淵が押韻している。<sup>25)</sup> 前者は平聲十一眞で、後者は平聲一先の韻のグループで押韻を識別しているものと思われる。なお、池田は「事物の連鎖の中に生きる人間が、いかにして吾が身の眞を取り戻すかというテーマを探求する。古い道家哲學の忘身というカテゴリーを見捨てている點が注目される。戰國末期～前漢初期の作であろうか」とする。<sup>26)</sup>

#### 【雜篇】

#### 「徐無鬼篇」

#### ⑮惠子と莊子 (7)

A 莊子曰、「射者非前期而中，謂之善射，天下皆羿也，可乎」。惠子曰、「可」。莊子曰、「天下非有公是也，而各是其所是，天下皆堯也，可乎」。惠子曰、「可」。

B 莊子曰、「然則，儒，墨，楊，乘四，與夫子爲五。果孰是邪。或者若魯遽者邪。其弟子曰、『我得夫子之道矣，吾能冬爨鼎而夏造冰矣』。魯遽曰、『是直以陽召陽，以陰召陰，非吾所謂道也。吾示子乎吾道』。於是爲之調瑟，廢一於堂，廢一於室。鼓宮宮動，鼓角角動。音律同矣。夫或改調一弦，於五音无當也，鼓之二十五弦皆動。未始異於聲，而音之君已。且若是者邪」。

A 惠子曰、「今夫儒・墨・楊・乘，且方與我以辯，相拂以辭，相鎮以聲，而未始吾非也。則奚若矣」。

B 莊子曰、「齊人竊子於宋者，其命闔也不以完，其求鉞鍾也以束縛，其求唐子也而未始出域。有遺類矣。夫楚人寄而躡閭者，夜半於無人之時而與舟人鬪，未始離於岑，而足以造於怨也」。

A 莊子は、「弓を射る者が適當に射て当たったとし、これを弓の上手というなら、世の中の人々は、全て羿(のような弓の達人)になるが、それでよいのだろうか」といった。惠子がそれに「よいとも」と答えた。莊子は、「世の中には(普遍的な)正しい眞理は存在しないが、それぞれが自説を正しい眞理だと主張するならば、天下中の人々は全て堯(のような聖人)

ということになるが、それでよいのだろうか」といった。恵子がそれに「よいとも」と答えた。  
 B 莊子はいった。「そうだとすると、儒家・墨家・楊朱派・公孫龍派の四學派に、（すべてを認める）あなたを加えて合計五學派となる。一體、どれが正しい眞理なのだろうか。或いはあの魯遽のようなものではないのか。魯遽の弟子は、『私は先生の道を會得しました。私は冬に（燥いた古い灰を燃やして）鼎で煮炊きすることができ、夏に（生ぬるい水から）氷を作ることができるようになりました』といった。魯遽は、『それはただ陽で陽を招き寄せ、陰で陰を招き寄せたにすぎず、わたしのいつている道ではない。お前にわたしの道を見せよう』といった。そこで弟子のために（二面の）瑟を調律し、一面を表座敷に置き、もう一面を奥座敷に置いた。（一方の瑟で）宮の音階をかき鳴らすと（もう一方でも）宮の音が鳴り出し、（一方の瑟で）角の音階をかき鳴らすと（もう一方でも）角の音が鳴り出した。音律が同じだから（共鳴したの）である。それから表座敷の一本の弦の調律し直して、（宮・商・角・徴・羽の）五音のどれにも合わないように（して、これをかき鳴ら）したところ、奥座敷の二十五本の弦が一齊に鳴り出した。どの音階とも決して合わない音が、あらゆる音の中心だったのだ。まあ、（眞理とは）こういったものではないのか」と。

A 恵子は、「あの儒家・墨家・楊朱派・公孫龍派（の各派）は、今まさに私と辯論をしていて、言葉で攻撃しあい、互いに聲を張り上げて壓倒しようとしているが、まだ誰も私を論破できた者はいない。どういうことかな」といった。

B 莊子は、「齊の人は子どもを宋に賣り飛ばしたが、門番の仕事は五體満足ではなれないのでわざと障害者にしてしまった。酒壺を手に入れたときは繩がけをして大切に運ぶのに、行方知れずの子どもを探しに、（住んでいる）町から一步も出ようとはしなかったということだ。人倫を無視し常識に反することだな。（また）楚の人で片足を失って賣り飛ばされて門衛をしていた者がいたが、眞夜中で人もいない時間に船頭といさかいをし、まだ船が岸を離れもしない内に、怨みを買うことになってしまった。（君の主張もその程度のものではないのかね）」。

Aでは恵子の羿や諸子に対する見方を通じて問題を提起し、Bでは一方では魯遽の説話を用いて道の眞理とは普遍的なものではないことを示し、もう一方では恵子の主張を常識に反する主張に過ぎないと批判している。いずれも恵子と莊子の會話の中で説話が完結しているのだが、Bでの説話はそれぞれ別種のものなので、本来二つの章だったものが、一つの章として再編成されたと考えることも出来る。多重構造になっている章である。なお、池田は恵子と莊子の問答・逸話を並べる「儒・墨・揚・秉・恵」のいずれとも異なる莊子（道家）の思想が、それらに君臨しているものであることを主張し、その立場から恵子を批判する。前漢初期に著された司馬談「六家要旨」や『淮南子』要略篇の考えと通ずるものがあるとする。<sup>27)</sup>

#### ⑩恵子と莊子 (8)

莊子送葬、過恵子之墓、顧謂從者曰、「郢人墜慢其鼻端若蠅翼、使匠石斲之。匠石運斤成風、聽而斲之、盡墜而鼻不傷、郢人立不失容。宋元君聞之、召匠石曰、『嘗試爲寡人爲之』。匠石曰、『臣則嘗能斲之。雖然、臣之質死久矣』。自夫子之死也、吾無以爲質矣、吾無與言之矣」。莊子は（ある人の）送葬から（歸る途中）、恵子の墓に立ち寄った。そこで振り返って、弟子たちに向かって莊子はいった。「郢の左官は、漆喰を自分の鼻先に蠅の羽ほどつけて、大工の棟梁（匠人）の石に削り取らせた。棟梁の石はまさかりを振るうと風が舞ったが、びゅーんという音に任せて削り落とした。しっくい綺麗に落ちて、鼻はまったく傷つかず、郢の左官は立ったまま顔色一つ變えなかった。宋の元君はこの話を耳にすると、棟梁の石を召し寄

せて、『一つ余のためにしっくいを削る技をやってくれないか』といった。棟梁の石は、『私めは、以前はしっくいを削ることができました。しかしながら、相方の左官はもうとつくに死んでしまっている（から技を披露することができません）』と答えたそうだ。（わたしも恵先生に先立たれてから、ともに議論する相方を失ってしまったよ）と。

好敵手恵子を亡くした莊子の心境を「匠石の説話」を用いて弟子たちに語っている。全文が對話の説話で構成されている。話の筋が論理的に展開している點は、語録としての性質を備えている。しかし、修辭に乏しく、レトリックの面からは、語録としての性格を見出すことは出来ない。先に③にて、佐藤の説を挙げたが、この文章も短い説話ではあるが、語録と説話とを巧みに併せ再構成させた文章であるかもしれない。なお、池田は莊子が恵子の没後、言論の好敵手を失ったと嘆く。いずれも前漢初期の作と考えなければならないとする。<sup>28)</sup>

「外物篇」

#### ⑰恵子と莊子 (9)

恵子謂莊子曰、「子言无用」。莊子曰、「知无用而始可與言用矣。天地非不廣且大也、人之所用容足耳。然則廁足而墊之、致黃泉、人尚有用乎」。恵子曰、「无用」。莊子曰、「然則无用之爲用也亦明矣」。

恵子が、莊子に向かって、「あなたのいうことは何の役にも立ちませんね」といった。莊子は答えていった。「何の役にも立たないことについて理解できて始めて役に立つことについて一緒に語りあうことができるのだ。一體、天地は果てしなく廣大ではあるが、人が利用しているのは足を置く場所だけだ。しかしながら、足の寸法を測り（そのスペースを残して）深く掘り下げて、あの世まで達したとしたら、それでもなお（その場所は）有用だろうか」と。恵子は、「役に立たない」といった。莊子は、「それならば、役に立たないものこそ役に立つものであることは、明らかではないか」といった。

「無用の用」についての論が、莊子と好敵手恵子との對話の説話によって展開している。⑱と同様、全體が論理的に展開している點は、語録としての性質を備えているが、修辭に乏しく、レトリックの面からは、語録としての性格を見出すことは出来ない。この文章も極めて短い説話ではあるが、語録と説話とを巧みに併せ再構成させた文章であるかもしれない。

「寓言篇」

#### ⑱恵子と莊子 (10)

莊子謂恵子曰、「孔子行年六十而六十化。始時所是、卒而非之。未知今之所謂是之非五十九非也」。恵子曰、「孔子勤志服知也」。莊子曰、「孔子謝之矣。而其未之嘗言。孔子云、『夫受才乎大本、復靈以生』。鳴而當律、言而當法。利義陳乎前、而好惡是非直服人之口而已矣。使人乃以心服而不敢蘆立、定天下之定。已乎已乎。吾且不得及彼乎」。

莊子は、恵子に向かって、「孔子は六十年生きてきて六十回生き方を變えた。始めは正しいと思っていたことも、終わりには否定した。今は正しいと思っている生き方も、五十九回の否定と同じように否定してしまうかもしれないよ」といった。恵子は、「孔子は自分の意志を強くし知識を深めようとしたからでしょう」と應えた。莊子はいった。「孔子は（意志と知識を重んじる境地を）とつくに捨て去っているよ。しかも、まだそれらについて一度も口に出していったことはない。孔子は、『人間は道の根源から才知を授けられているのだから、（道に基づく）靈妙な本性を内面に抱いて生きていくのだ』といった。孔子が聲を發して（歌えば）音律に適い、言葉を發して（議論すれば）法規に當る。利益正義を（諸侯の）前で陳べたてるが、好惡是非はただ人々のいうままに任せているだけだ。人々を心服させて逆らわず、世の中

の眞實を定める。止めよう止めよう。私なんかとても孔子には及ばないな」と。

莊子と恵子との對話によって孔子が六十年間に六十回もその生活を變えてきた、そのなすがままの本性に従って生きる生き方について述べている。⑩・⑪と同様、全體が論理的に展開している點は、語録としての性質を備えているが、修辭に乏しく、レトリックの面からは、語録としての性格を見出すことは出来ない。この文章も短い説話ではあるが、語録と説話とを巧みに併せ再構成させた文章であるかもしれない。

〔列禦寇篇〕

②莊子と弟子 (3)

A 莊子將死、弟子欲厚葬之。莊子曰、「吾以天地爲棺槨、以日月爲連璧、星辰爲珠璣、萬物爲齋送。吾葬具豈不備邪。何以加此」。弟子曰、「吾恐烏鳶之食夫子也」。莊子曰、「在上爲烏鳶食、在下爲螻蟻食。奪彼與此、何其偏也」。

B 以不平平、其平也不平。以不徵徵、其徵也不徵。明者唯爲之使、神者徵之。夫明之不勝神也久矣。而愚者恃其所見入於人。其功外也。不亦悲乎。

A 莊子が亡くなろうとする時、弟子たちは手厚く埋葬しようとした。莊子はいった。「私は天地を棺桶とし、日月を(葬禮を飾る)一對の璧玉とし、星辰を(亡骸に添える)珠玉とし、萬物を死出の土産とする。私の葬禮の道具は十分ではないか。これ以上何も要らないよ」と。弟子たちは、「私たちは先生のご遺體が烏や鳶の餌とならないか心配なのです」と應えた。莊子は、「地上では烏や鳶の餌となり、地下では螻や蟻の餌となる。あちらのを奪ってこちらにやるのでは、何とも不公平だね」といった。

B 不公平なものを公平と見なすならば、その公平さは本當の公平さではない。證明できないものを證明できるとするならば、その證明は本當の證明ではない。明晰な者はただ知識に振り回されているだけであって、精神の自然のままの働きを主宰する者だけが證明できる。一體(知識による)明晰さが精神の自然のままの働きに及ばないのは昔からのことだ。それなのに愚者は目に留まったものに頼りきって、人爲の世界に加わってしまう。その(成し遂げた)お手柄は外れている。何とも悲しいことではないか。

Aでは莊子の臨終に際し、弟子との對話を通して葬儀の不要を説く。Bでは一轉して、愚者は人爲的な知識による明晰さが、精神の自然のままの働きに及ばないことを分かっているかといっている。本來全く異なる説話が組み合わされた説話である。Bでは四字句、ないし五字句を中心とした構成で語調が調っている。また、論理的な思考によって論を展開していることから、語録としての性格を備えている説話ということが出来る。死は道家の重要なテーマの一つであり、養生思想や神仙思想と関係づけられて、語られることが多かった。莊子の臨終のモチーフについても、古くからあったものと思われる。また、莊子を主人公とする對話の説話の中で、死について取り上げると言うことは、自ずと身近な人物との對話と言うことになる。師である莊子の死に対する見解や弟子たちとの對話について、後學の者達が手を加えたり改作したりすることは、客觀的に見て有り得ない事と思われる。

以上のように、莊子と弟子、莊子と恵子の對話による説話は分類されるが、一見するとAの對話形式の説話とBの説話とが組み合わされ多重構造を爲している説話は、池田知久の分類に照らし合わせれば、比較的後に制作されているように見える。そして、先に設けた語録としての基準に合う説話は、内・外篇に集中して現れ、修辭と無関係な章は雜篇中心に現れていることに注目させられる。さらに、編者によって意圖的に篇の一番最後に置かれている説話も多く見られる。

また、本来弟子や論敵である恵子は、極めて近い関係であるので、それなりに重視されたり假託されたりし、偽作されることもなく、莊子を權威付けするのに使われると思われる。しかし、恵子や弟子との問答の作品の作成年代の中には、池田知久によって漢代まで押し下げられてしまっているものもある。現行本『莊子』は、語録と説話とが合わさって構成されているが、他の思想家のテクニカルタームが含まれていることによって、その一文の成立年代を特定することは正しいのかもしれない。しかし、『莊子』の雑多な文章が、説話と語録との複雑な組み合わせによって成り立っているのだと考えると、章全体の成立年代を押し下げってしまう方法をとることは抵抗がある。

次章では對話の説話の成立過程と成立年代にスポットを当て、『莊子』編纂の特徴と残されている疑問点を見ていくことにする。

### 三. 語録としての莊子と對話を主とした説話の展開

通し番號③⑧⑩⑫⑮⑯⑰の七點の説話は、池田知久によっていずれも成立年代が、漢代にまで掛かる可能性が高いとして挙げられているものである。作品の構成はそれぞれ、語録を含む説話から構成されるもの・語録を含まない説話から構成されるもの・A-B型から構成される説話である。語録が説話の最も古い部分を占めており、後に一般的な説話が作られたり、補足されたりして現行本が形成されたと仮定すると、A-B型から構成される説話の内、A・Bのどちらか、或いは文章の一部分に語録が含まれていることも十分に考えられるので、更に精査する必要がある。

そして、Aの對話を中心とする説話に、Bの説話が加わることによって成立したものと考えられるA-B型から構成される「山木篇」の⑩莊子と弟子(1)・⑫莊子と弟子＝蘭且(2)、「田子方篇」の⑮莊子と恵子(7)であるが、⑩に關して下P176池田知久は、無用の用の思想を一步進めた文章であり、編纂の時點で『呂氏春秋』必己篇から取った。『呂氏春秋』の原文は戰國末期の作であるとする。また、⑫に關しては、事物の連鎖の中に生きる人間が、いかにして吾が身の「眞」を取り戻すかというテーマを探求する古い道家哲學の「忘身」というカテゴリーを見捨てている點が注目されるとしている。<sup>29)</sup> 前者に關しては、A-B型の説話を形成するときに題材を『呂氏春秋』に求めた可能性もぬぐえない。また、後者に關しては、「忘身」自體が『莊子』書中の坐忘や心齋の概念とは異なるので、池田の批判は当たらないのではないと思われる。先秦諸子の思想から抽出されたテクニカルタームを含んでいてもその文章がそのまま全て外的な影響を受けて成立しているとはいえない。なぜなら多くの章が元々あった多くの語録が組み合わせられ、その上で説話と一緒に成立しているからである。

以下、池田知久によって漢代にまでその作成年代が押し下げられてしまっている説話について、具體的に見ていくことにする。

「徳充符篇」③莊子と恵子(3)の説話は、池田知久によって戰國最末期～前漢初期の作とされているが、②同様、もともと四字句、ないし五字句を中心に構成された語録である。池田は、篇の後半に行くほど後世に作られたと考えられ、前章が生まれた後に生まれた、それを補うための補足であろうとしているが、『莊子』中の説話はそれぞれ獨立したものと考えべきであり、その篇の中のそれ以前の部分との結びつきを前提にして考えるべきではない。<sup>30)</sup>

また、「至樂篇」⑧莊子と恵子(6)の説話は、池田は戰國末期～前漢初期の作とするが、對話形式の説話で、もともと四字句、ないし五字句を中心に構成された語録である。<sup>31)</sup> 先に述べたように、莊子を主人公とする對話の説話の中で、死について取り上げると言うことは、自ずと身近

な人物との對話と言うことになる。師である莊子の死に対する見解や弟子たちとの對話について、後學者の者達が手を加えたり改作したりすることは、客觀的に見て有り得ないのである。學派が形成されれば、『論語』のように弟子との對話が生まれ、一人称の表現から對話の文章も盛り込まれていくはずである。そして前述したように、弟子や身近な者との對話は、學派を繼承していく者達にとって、改編したり偽ったりすることは困難である。

佐藤明も何らかの形で死について扱ったものを取り挙げてみるとし、漫然と思いついたまま「莊子の妻死に、恵子甲う（至樂）」・「莊子楚に行き、髑髏を見る（至樂）」・「莊子、恵子の墓を過る（徐無鬼）」・「莊子將に死せんとす（列禦冠）」といった四點の説話を挙げているが、結果として對話の説話を漠然と挙げて「莊子－恵子」の説話が中心となっている。<sup>32)</sup> 死は養生思想を扱う道家にとって重要なテーマの一つであるが、對話の説話の中心に、莊子とより関係の深い弟子なり恵子なりが想定されるのは必然の結果だからである。

次に、田子方篇⑮莊子と恵子(7)の説話について、池田は前漢初期の作とし、「儒・墨・揚・秉・恵」のいずれとも異なる莊子(道家)の思想が、それらに君臨しうるものであることを主張し、その立場から恵子を批判する。そして前漢初期に著された司馬談「六家要旨」や『淮南子』要略篇の考えと通ずるものがあると述べている。<sup>33)</sup> また、「徐無鬼篇」⑯莊子と恵子(8)について、池田は莊子が恵子の没後、言論の好敵手を失ったと嘆く。前漢初期の作と考えなければならない、としている。<sup>34)</sup> この章は、「至樂篇」⑧莊子と恵子(6)と同様、死について扱っている。それから「寓言篇」⑱莊子と恵子(10)について、池田は戦國末期～前漢初期の作とし、則陽篇に蘧伯玉のこととして既出。それに基づく文章である。ただし、兩者の意味づけは異なる。本章は、孔子を外化して内化せざる人物として高く評價しているとしている。<sup>35)</sup>

以上、内・外篇の二章については、池田は後發の作品と見なしている。しかし、實は語録が『莊子』の原初の形態を表していると考え、後世の思想を含んだテクニカルタームを除いた語録の部分は、かなり古い莊子の原初の形態を含んでいるものと思われる。

一方、⑮⑯⑱の説話であるが、前章で見たように語録の要件を含まない説話(⑮⑯⑰⑱⑳)と重複している。⑮に関しては、六家要旨や要略篇の考えと通じるものがあるにせよ、兩者ほどには細かく思想家集團は分類されておらず、當時の思想界の状況が周知のごとく「楊・墨(楊朱と墨翟)」であり「儒・墨(儒家と墨家)」を中心とするものであったことを想定すれば、⑮の分類はさほど無理なく分類可能であり、その成立を前漢初期にまで引き下げる必要もないと思われる。また、⑯に関しては、論敵を亡くした悲しみを描いている作品を、特に後發の作品であると決めつける必要もないのである。⑱は、内・外・雜篇を通じて『莊子』は類似の説話を多く載せるが、その一例である。修辭上の語録の要素は含まれていないようであるが、莊子の重要な概念の一つである「化」の原型は古くから有り、説話を加え形を整えて雜篇に置いた可能性もぬぐえない。そして⑯⑰⑱の説話に関しては、修辭に乏しく語録としての性質を見出せない。しかし、何れも話のストーリーが非常に論理的に展開している。『莊子』全體の説話を分析しなければ、軽々に結論は出せないが、「齊物論篇」が巧みに再構成されていることを考慮すれば、これら三章も或いは、語録を説話の中に巧みに織り込んだ文章だといえるのかもしれない。

いずれにしても、語録としての性格を備えていない説話は雜篇に集中している。たとえ意識下になかったにしても、編輯者の考えの中に、莊子の自著としては異質に映ったか、まとまりのない篇として捉えられたためなのか、内・外篇に屬さない雜篇中に置くべき章であるとの何らかの判断が働いたものと推察される。なお、戦國末期の説話は比較的長い説話の後に思想家集團の意圖する主張を織り込んでいるのは、人口に膾炙している『韓非子』の「守株」や「矛盾」等の説

話で知られているが、物語の後に自説を展開するのは語録(いわゆる「論説部」といえる)。そして、『韓非子』が儒家の「徳治政治」にとらわれて融通がきかない人々の時代錯誤を笑っているように、『莊子』のA-B型の説話も對話型であるとは言え、恐らく物語に假託して莊子學派の主張をしようとする意圖が見え隠れしているのであり、戦国末期の説話の傾向を有しているものと思われる。

佐藤明は『莊子』の内篇について、内篇全體を通して見た場合(特に「人間世」以下の篇)、相互に似たテーマの説話が續いているが、少なくともそれぞれの説話は獨立しているとはいえ、「齊物論篇」冒頭の説話は、巧みに論説と説話をつなぎ合わせているという。これは、説話としての材料があり、それらを巧みに組み合わせる『莊子』内篇を作りあげた可能性のあることを示している。さらに内篇を通讀した場合、「養生主篇」を境にして著作の態度に違いがみられる。それ以前の部分は精密だが、それ以後は單に説話を並べただけの印象を受け、これから使用する材料をそのまま放置したようにも見えるのは、「養生主篇」を境にして編輯の態度あるいは編者が変わったと考えられるとする。<sup>36)</sup> また、「逍遙遊篇」と「齊物論篇」は、どちらも構成の仕方においては異なっているが、選擇された説話の質の高さ、編輯の巧みさにおいては共通しており、同一の状況のもとに編輯されたと考えられる。また「養生主篇」についても、巧みに手が施されており、同一の状況のもとで編輯されたと考える。「逍遙遊」と「齊物論」の二篇、あるいは「養生主」までを含めた部分を莊周の自著とする考えがあるのも、これらの二篇なり三篇が優れた内容のものであり、また類似性もそれらの中に見られることによると述べている。<sup>37)</sup>

佐藤の説は正鵠を射ていると思われる。もともと『莊子』の原初的形態として語録があり、その語録に説話をつなぎ合わせて内篇を構成していると考えられるからである。更に、外・雜篇には語録の性質を持つ篇は極端に少なくなり、編輯のための材料、或いはどこにも分類できないまま放置されたように見える説話が置かれている。今回は紙幅の関係上、細かい分析は出来なかったが、もちろん説話の中にも語録と同じくらい古いものも含まれているはずである。今後は、テクニカルタームを主體とする思想史的研究に留まらず、文體や全體の構成から語録の要素を取り除いた上で、全體の説話の構造を再認識することが重要であると認識している。

また、現行本に至るまでの過程であるが、雜然と積み上がった語録と説話の山を、前漢末の劉向が極めて短時間に(「養生主篇」までであるが)、『莊子』の作品と思しきものを、内篇に集めて編纂したと想定すれば、先に擧げた津田左右吉の「老子に類する語録が荀子の頃にあった」とする假説は、間違いではなかったといえる。「徳充符篇」は、莊周が著述したと假託する『莊子』の中的一篇としては莊周との關連が希薄であるので、佐藤のいうように、兀者や姿の醜い者を登場させ道を語らせただけであるなら、篇全體としては、主張が明確ではなくまとまりに缺ける。そこで最後に莊周の登場する説話を掲げ篇としての落ちつきを付けたものであると考えられる。それは、「逍遙遊」・「齊物論」の各篇において篇末に莊周の登場する説話を意圖的に置いていることから伺われる。

以上のことから「徳充符篇」も、もともになる文獻に一群の説話があり、ほぼそのままの形で編輯したと思われる。そして、その際全體のバランスを考慮に入れ、感覺の優れたものの手によって、比較的短い時間で編輯がなされたものと推測できる。なお「徳充符」という篇名も篇全體のイメージを示していると見ることはできても、「徳充符」そのものについて論理的に敘述しているわけではない。<sup>38)</sup> 恐らく劉向は何らかの事情により編輯を途中で投げ出してしまったのであろう。特定の篇末に莊子説話(特に莊子の權威付けが有效な恵子を中心に据えられている)が置かれていたり、數話續けて登場しているのは、爾後の編輯に向けての材料に使おうと目論んでいたためであろう。そして、結果として何らかの事情で計畫を斷念するに到ったのであろうと思われる。



## ま と め

本論文では、「莊子と恵子」・「莊子と弟子」といった説話を中心に見てきたが、語録を中心とする説話が雑篇中には全く含まれないことに注視しなければならない。前章で挙げたようにその中には莊子自身や妻の死について扱ったものも含まれることから、軽々に結論を出すわけにはいかないが、編者によってさほど重要でないと思われたのか、雑篇に分類すべき特異な傾向を見出したためか分からないが、意圖的に雑篇に振り当てられたのだと考えられる。

一～三章で述べた内容に従って「莊子と恵子」・「莊子と弟子」の説話の作成を順を追って行くのと次の通りである。

1 内篇の各篇名が恐らく劉向の手によって決定される（「徳充符」・「大宗師」等と緯書を思わせるような命名の仕方は緯書が流行した前漢末より後漢にかけての時代と関係があると思われる）。外・雑篇には手を付けられず假稱のまま放置される。

2 内篇の「逍遙游篇」と「齊物論篇」の二篇の編纂が行われる。

3 「養生主篇」の編纂を途中で断念する。

4 莊子—弟子・莊子—恵子といった對話形式の説話は、莊子書を權威づけるために各篇を彩る豫定で分散したが、何らかの理由で編纂を断念し、特定の篇に束ねるような形で特定の篇に残る。

莊子書中には、換骨奪胎した説話が諸篇に見られることから、「莊子—弟子」「莊子—恵子」といった對話形式の説話も、先に挙げたA—B型の説話として編纂し直し、「寓言篇」までの各篇の篇末に分散して置く豫定があったのかもしれない。そして、「寓言篇」より後に説話をまとめる必要のない比較的長文の劇場型の説話をまとめて置き、全體の序文のような働きをしている「列禦寇篇」を最後に付けて、そのまま何らかの事情で編集者は手を止めてしまったのではないだろうか。また、「寓言篇」や「列禦寇篇」は全體の序文や後序の役割を果たしていたとする學者もいるが、單純に説話が未整理のまま放置されている状況を見れば、そう見えてしまうことにも一理ある。

本論文を通して、「莊子と恵子」の對話型の説話は、編輯者によって意圖的に特定の篇末に置かれ、莊子の權威付けなどに供され、重要な役割を果たしていることを発見できた。また、「莊子と弟子」の説話についても原初の『莊子』の要素を持つ語録は含まれないものの、『莊子』の重要なテーマの一つである「死」と関係する場面で登場する等、大きな役割を果たしている。語録を含んでいないからといって安易に新しい部分であると決めつけてはならない。

しかしながら、全體的に語録を含まない説話が雑篇に集中して現れ、比較的長い説話（『史記』書中に莊子の篇名として見られ、篇名も内容に沿って付けられているもの）は、まとめて雑篇に入っていることから、編輯者は重要性を意識して内・外・雑篇をそれぞれ編輯していったものと思われる。いずれにしても、原初の形態を探るには、各説話から語録を取り出してその文章を比較し、學派の發展の軌跡を探るほかない。今回は紙幅の関係上、「莊子と恵子」・「莊子と弟子」以外の對話の説話は扱えなかったが、残りの説話を検討し、同様の傾向が見られるのか、引き続き考察していく必要がある。機会を俟って論じたい。

## 注

- 1) 池田知久『莊子上全譯注』「始めに」(講談社學術文庫, 2014)
- 2) 前掲『莊子上全譯注』「始めに」
- 3) 佐藤明 司馬遷の見た『莊子』(九州大學中國哲學研究會中國哲學論集10, 1984) PP. 90-91
- 4) 佐藤明 語録としての原本『莊子』(九州中國學會報24, 1983) PP. 12-13
- 5) 陸徳明の『經典釋文』と外・雜篇との關係を列擧すると以下の通りである。

### 外篇十五篇

「駢拇」八→『經典釋文』には「擧事以名篇(事物によって名付けた篇)」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

「馬蹄」九→同上

「胠篋」十→同上

「在宥」十一→『經典釋文』には「以義名篇(内容によって名付けた篇)」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

「天地」十二→『經典釋文』には「擧事以名篇(事物によって名付けた篇)」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

「天道」十三→『經典釋文』には「以義名篇(内容によって名付けた篇)」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

「天運」十四→同上

「刻意」十五→同上

「繕性」十六→同上

「秋水」十七→『經典釋文』には「借物名篇(事物に假託して名付けた篇)」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

「至樂」十八→『經典釋文』には「以義名篇(内容によって名付けた篇)」とあるが、篇首の近くにある二字を篇名としている(前掲『莊子上全譯注』P. 1145)

「達生」十九→『經典釋文』には「以義名篇(内容によって名付けた篇)」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

「山木」二十→『經典釋文』には「擧事以名篇(事物を列擧して名付けた篇)」とあるが、篇首の「莊子行於山中, 見大木枝葉盛茂。」から二字を取って篇名としている(池田知久『莊子下全譯注』講談社學術文庫2014, P. 175)。

「田子方」二十一→『經典釋文』には「以人名篇(人名によって名付けた篇)」とあるが、篇首の三字を篇名としている。

「知北遊」二十二→同上

### 雜篇十一篇

○「庚桑楚」二十三→『經典釋文』には「以人名篇(人名によって名付けた篇)」とある。

「徐无鬼」二十四→『經典釋文』には「以人名篇(人名によって名付けた篇)」とあるが、篇首の三字を篇名としている。

「則陽」二十五

「則陽」→『經典釋文』には「以人名篇(人名によって名付けた篇)」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

「外物」二十六→『經典釋文』には「以義名篇(内容によって名付けた篇)」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

「寓言」二十七→『經典釋文』には「以義名篇(内容によって名付けた篇)」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

○「讓王」二十八→『經典釋文』には「以事名篇(事柄によって名付けた篇)」とある。

○「盜跖」二十九→『經典釋文』には「以人名篇(人名によって名付けた篇)」とある。

○「說劍」三十→『經典釋文』には「以事名篇(事柄によって名付けた篇)」とある。

○「漁父」三十一→『經典釋文』には「以人名篇(人名によって名付けた篇)」とある。

「列御寇」三十二→『經典釋文』には「以人名篇（人名によって名付けた篇）」とあるが、篇首の三字を篇名としている。

「天下」三十三→『經典釋文』には「以義名篇（内容によって名付けた篇）」とあるが、篇首の二字を篇名としている。

以上のように○を付していない殆どの篇は單純に篇首の二語ないし三語を當てられているに過ぎない。

陸德明撰『經典釋文』下（上海古籍出版社1985）PP. 1407-1592

- 6) 津田左右吉 津田左右吉全集第13卷, 道家の思想とその展開（岩波書店, 1964）
- 7) 佐藤明『莊子』における非政治性の問題（大分縣立藝術文化短期大學研究紀要31, 1993）P11
- 8) 前掲『莊子』における非政治性の問題, P11
- 9) 前掲『莊子 下 全譯注』P954
- 10) 前掲『莊子 下 全譯注』PP. 666-667
- 11) 前掲『莊子 下 全譯注』P663・987
- 12) 佐藤明『莊子』齊物論篇の構造:後半の説話を中心にして（大分縣立藝術文化短期大學研究紀要30, 1992）P. 141
- 13) 佐藤明 語録としての原本『莊子』（九州中國學會報24, 1983）PP. 10-11
- 14) 前掲 語録としての原本『莊子』PP. 12-13, 『莊子』齊物論篇の構造:後半の説話を中心にして（大分縣立藝術文化短期大學研究紀要30, 1992）P143
- 15) 郭慶藩撰 新編諸子集成『莊子集釋』（中華書局, 1961）
- 16) 佐藤明『莊子』の説話の一側面—逍遙遊篇の恵子・莊子問答を中心にして（九州中國學會報27, 1989）
- 17) 福永光司・興膳宏『莊子』内篇（ちくま學藝文庫 筑摩書房, 2013）P32
- 18) 前掲『莊子』内篇 PP. 35-36
- 19) 前掲『莊子』内篇 P194
- 20) 前掲『莊子』の説話の一側面—逍遙遊篇の恵子・莊子問答を中心にして, P9
- 21) 前掲『莊子』外篇 PP. 442-443
- 22) 福永光司・興膳宏『莊子』外篇（ちくま學藝文庫 筑摩書房, 2013）P366
- 23) 前掲『莊子』外篇 PP. 442-443
- 24) 前掲『莊子 下 全譯注』P176
- 25) 前掲『莊子』外篇 P483
- 26) 前掲『莊子 下 全譯注』P177
- 27) 前掲『莊子 下 全譯注』P482
- 28) 前掲『莊子 下 全譯注』P482
- 29) 前掲『莊子 下 全譯注』P176
- 30) 前掲『莊子 上 全譯注』P383
- 31) 前掲『莊子 下 全譯注』P149
- 32) 佐藤明 莊周説話に見える戯曲的性格（九州大學中國哲學研究會 中國哲學論集22, 1996）PP. 4-5
- 33) 前掲『莊子 下 全譯注』下P482
- 34) 前掲『莊子 下 全譯注』下P482
- 35) 前掲『莊子 下 全譯注』下PP. 666-667
- 36) 「司馬遷の見た『莊子』」, P90
- 37) 前掲『莊子』齊物論篇の構造—後半の説話を中心にして, P143
- 38) 佐藤明『莊子』人間世篇以下四篇の構成について,（大分縣立藝術文化短期大學研究紀要32, 1994）P27

## 参考文献

- 赤塚忠（1974）『全釋漢文大系16 莊子上』集英社  
 赤塚忠（1980）『全釋漢文大系17 莊子下』集英社  
 池田知久（1983）『莊子上』學習研究社  
 池田知久（1986）『莊子下』學習研究社

- 王先謙（1974）『莊子集解』臺灣・三民書局印行  
郭慶藩 撰（1961）『新編諸子集成 莊子集釋』中國北京・中華書局  
周啓成 校注（1997）『莊子虞齋口義校注』中國北京・中華書局  
服部宇之吉 校訂（1911）『莊子翼』富山房  
福永光司（1966）『中國古典選7 莊子 內篇』朝日新聞社  
福永光司（1966）『中國古典選8 莊子 外篇』朝日新聞社  
福永光司（1967）『中國古典選9 莊子外篇 雜篇』朝日新聞社  
方勇 撰（2012）『莊子纂要』中國北京・學苑出版社  
牧野謙次郎（1914）『漢籍國字解全書 莊子上』早稻田大學出版部  
牧野謙次郎（1914）『漢籍國字解全書 莊子下』早稻田大學出版部

# 日本人学習者を対象とした中国語の唇歯摩擦音の 発音指導法について

緒 方 哲 也

## A Study on Teaching the Labiodental [f] to Japanese Learners of Chinese

OGATA, Tetsuya

### Abstract

This paper studies how to teach the labiodental [f] to Japanese learners of Chinese. There is no labiodental in the Japanese phonological system. Therefore, it is difficult to acquire the labiodental [f] for Japanese learners. The researcher conducted two experiments which will be outlined in this paper. One of the experiments had four subjects listen to a few combined sounds. The following inferences were derived from the experiment's results: the most important part of the sound for the perception of [f] is the consonant on-glide, and the next is the consonant off-glide. The other experiment employed the McGurk effect. The result of this experiment showed that visual information is also important for the perception of [f]. Based on these results, this study presents an effective teaching method for the labiodental [f].

*Keywords:* labiodental ; second-language acquisition ; McGurk effect

### 目 次

はじめに

1. 日本人の外国語学習と「f」について
2. 唇歯摩擦音及び両唇摩擦音に関する音声学分野における先行研究について
  - 2.1 唇歯摩擦音の一般音声学的先行研究について
  - 2.2 両唇摩擦音 [p] の一般音声学における先行研究について
  - 2.3 一般音声学における先行研究のまとめ
  - 2.4 中国語の唇歯摩擦音に関する先行研究について
  - 2.5 英語音声学における先行研究について

3. 発音習得に関わる理論的研究について
  - 3.1 母語と学習対象言語との関係について
  - 3.2 本稿で研究対象としている唇歯摩擦音について
4. 本稿が行った音声実験とその意義について
  - 4.1 [ɸ]及び[ɸ]両音のスペクトログラムについて
  - 4.2 本稿で行った音声実験の内容
  - 4.3 本稿で行った音声実験の結果について
5. [fa]と[ɸa]の弁別に視覚情報が聴覚に与える影響について
  - 5.1 音声の知覚と視覚との関わりについて
  - 5.2 マガーク効果を唇歯摩擦音の聞き取りに応用し、視覚効果が音声聴取に与える影響を調べる
  - 5.3 マガーク効果を使った唇歯摩擦音の聴取実験結果
  - 5.4 実験結果の考察
6. 本稿の実験結果の視点からの先行研究考察
7. 教室活動への応用の検討  
おわりに

## はじめに

外国語を学習する際に、学習者の母語の調音特徴からの影響によって、対象となる外国語の発音習得に影響を与えるであろうことは容易に想定できることである。外国語習得の過程で、母語の影響が外国語学習に有利に働く現象は、第二言語習得理論において「正の転移」と称される。これに対し、母語の影響が外国語学習にマイナスに働く現象は「負の転移」と称される。<sup>1)</sup> 日本語を母語とする外国語学習者にも、当然のことながら、学習時にこの「正の転移」及び「負の転移」は生じる。

外国語学習時に、主に問題となるのは、正及び負の転移二者のうちの「負の転移」であろう。「負の転移」から生じる現象は、いくつかあると考えられる。その代表的な例として「代用」があげられよう。白井2008では日本人が英語を学ぶ際の「負の転移」の例として、この「代用」の例を挙げており、本稿で論じる問題とも関わるので、ここで紹介しておきたい。<sup>2)</sup>

たとえば、日本語にはvの音はありませんから、日本人は英語のvの音を発音する時には、それに近い、bで代用してしまいます。overをオーバーと言い換えてしまうのです。(白井2008:7)

日本語を母語とする中国語学習者が中国語を習得する際にも、同様の事象が見られる。<sup>3)</sup> たとえば、漢語拼音で「cha」と綴る音は、本来中国語のそり舌音で発せられるべき音である。その音を日本語式に「チャー」と発音してしまうのも、代用の例に類するといえよう。<sup>4)</sup>

「代用」の例が生じる原因は、調音を正確に実現させることを怠ったり、日本語の音韻体系中の近似音で間に合わせてしまうというところにある、と考えられる。<sup>5)</sup> 筆者は、本稿で取り上げる唇歯摩擦音の「f」も、<sup>6)</sup> この例に相当するものであろう、と考える。<sup>7)</sup> この例については、Flege等によって新たな視点からの研究<sup>8)</sup> もあることから、第3章で触れたい、と思う。

本稿は、中国語の唇歯摩擦音である[ɸ]を取り上げ、その発音指導法を検討するものである。[ɸ]については、中学・高校と学習してきた英語音韻体系中にも存在する発音であるため、習得にはさほどの困難を伴わないのでは、と思われよう。<sup>9)</sup> しかし、周知のように、日本語の音韻体系中に

において、[f]は存在しない反面、近似音である両唇摩擦音である「ファ」系の音（IPA表記によると[ɸa]）が存在する。<sup>10)</sup> その事によって、日本語の音韻体系中の近似音「ファ」によって代用する事例が頻見される。これは、日本語を母語とする英語学習者においても同様のことがいえる。<sup>11)</sup>

筆者は、ここ数年中国語の発音教育に関する研究を行っているが、この[f]を習得するという問題について、教室活動の場で試行錯誤を重ね、またいくつかの実験を通して一定の成果を得ることができた。本稿では、それらを元に、唇歯摩擦音[f]の教授法を新たに提案し、大方の批判を乞うものである。

## 1. 日本人の外国語学習と「f」について

前章で触れたように、多くの日本人が初めて唇歯摩擦音[f]を学ぶのは、学校教育の英語学習においてであろう。本稿を執筆している2019年現在、日本において小学校の英語教育は始まっているものの、現在の大多数の大学生が英語学習を始めたのは、中学校からであろうと考えられる。<sup>12)</sup> 中学校において、英語をどのように、またどの程度教えられるかは、中学校1～3年時の英語教師の教え方如何によっている、と考えられる。というのは、筆者のこれまでの教学経験から、大学生に唇歯摩擦音の発音の仕方を尋ねても、「教えられていない」と答えるものが多いように思われるからである。<sup>13)</sup>

さらに、間違った発音指導も行われている。いわゆる「上の前歯で下唇を噛んで発音する」という指導法である。筆者も、そのように指導されたものの一人である。しかし、このように発音すると、時として破裂音のように聞こえる場合もあることに注意しなければならない。<sup>14)</sup>

次章では、唇歯摩擦音及びそれに関連する両唇摩擦音についての音声学上の先行研究を概観しておきたい。

## 2. 唇歯摩擦音及び両唇摩擦音に関する音声学分野における先行研究について

唇歯摩擦音に関する先行研究については、次の二つに分けて述べておきたい。一つは、一般音声学の研究成果中に見られる唇歯摩擦音についての研究である。もう一つは、中国語及び英語に関しての音声学的研究及び発音教育学的研究についてである。なお、唇歯摩擦音と併せて、関連する両唇摩擦音についても見ておくこととしたい。

### 2.1 唇歯摩擦音の一般音声学的先行研究について

唇歯摩擦音の一般音声学的な研究については、まず音声学の専著中の記述を確認しておく。

#### (1) D. Jones 1918

D. Jones 1918: 179では、次のように説明する：

The sound **f** is formed by pressing the lower lip against the upper teeth and allowing the air to force its way between them and through the interstices of the teeth;  
(fの音は、下唇をそれに対する上歯で抑えることによって調音され、空気はそれらの間と歯の隙間を無理矢理押し破って進むことができる)

#### (2) 服部四郎 1951

服部四郎 1951: 90では、次のように記述する。

下唇が上の前歯の尖に軽く觸れているときに、聲を伴わない呼気（「いき」即ち e3ʒ +）が

口むろのみを通して送られてきて、歯と唇の間の隙間（及び歯の間の隙間）を通ると、鋭い摩擦的の音を生じる。英語・ドイツ語・フランス語・シナ語（北京）などの[f]がそれぞれある。

また、服部1951を改訂した服部1984には、カセットテープとカセットテープ用テキストが付属している。そのテキストの「練習37[θa]と[fa]の聴き分け」の説明には、次のような記述がある。本稿と直接関係はないものの、本稿が行った実験の有用なヒントとなるためここに挙げておくこととした。

（この練習（筆者注：[f]と[θ]を聴き分けるテストのこと）はアメリカ人の学生が却ってよく落第する。native speakerが、と驚かれようが、それには理由がある。実際の英語の発音では、[f]と[θ]とは、それ自身の音色の差異ばかりでなく、出わたりや続く母音の音色に明暗があるのでnative speakerはそれらすべてをてがかりとしてこの両者を聞きわけているのである。）

ここから分かるのは、[f]の聞き取りには、子音の音声的な特徴だけではなく、子音と母音の境界に生じる出わたりの音の差異も関わるという点にある。このことについては、後で示す実験で明らかにしたい。

### (3) 齋藤純夫1997（2010改訂版）

齋藤1997：41では、図を用いて、唇歯摩擦音の調音方法を説明する。（ここでは図は割愛する）なお、齋藤1997は子音の説明に当たって、次に示す①～⑤の項目を立てて説明している：

- ①は声門の状態（主に声帯の振動があるかないか）
- ②は調音の位置（筆者注：齋藤2010では「場所」と表記する）（どの部分で空気の流れを妨害するか）
- ③気流の通り道（気流は口腔内の真ん中を通る（筆者注：後に中線的と表現）か脇を通る（筆者注：後に側面と表現）か）
- ④接近の度合いなど（気流に対してどのように妨害を作るか）
- ⑤口蓋帆の位置（気流は鼻に抜けるか抜けないか）

これらの各項目について、唇歯摩擦音[f]では、次のように説明される。

- ①声帯振動なし→無声音
- ②下唇と上歯→唇歯音
- ③（筆者注：この調音の位置で側面的調音は生理的に不可能で、中線的と側面的の区別はない）
- ④せばめを作り、空気を通りにくくする→摩擦音
- ⑤上がって鼻腔への通路を閉鎖→口音とする。

### (4) 小泉保1996

小泉：48-49 1996では摩擦音を説明する節に、次のように説明される。唇歯（下唇を上歯に近づける）

さらに、唇歯摩擦音[f]～[v]の項目には、「下唇（内唇）を上歯に近づけて、その隙間から呼吸を流す」と記される。

その他、Catford1988、羅常培・王均1981などについても、同様に調音点のみ示す。

## 2.2 両唇摩擦音[ɸ]の一般音声学における先行研究について

次に、本稿が取り上げるもう一方の子音である[ɸa]についても、2.1で挙げた(1)～(4)の著書



中の記述を見ておきたい。

(1) D. Jones 1918:180 には次のように記される：

The Japanese generally replace **f** by a breathed *bilabial* fricative  $\phi$  (One form of  $\phi$  is the sound made in blowing out a candle;)

(日本語では、概してfの代わりとして両唇音の $\phi$ をfの代替とする。( $\phi$ の一つの調音として、ろうそくを吹き消すときのようなそれである))

(2) 服部 1951 : 85 では次のように記述されている：

火を消すときのように両唇が上下から狭まりその間に僅かのすきまを残しているとき、強い呼気がここを通ると、摩擦的噪音が生ずる。両唇摩擦音 [ $\phi$ ] (無聲), [ $\beta$ ] (有聲) における唇の構えは大體このようである。

(3) 斎藤 1997 : 39-40 では次のように記述されている：

日本語のフ・ファなどを丁寧に発音したときの最初の部分。熱い食べ物を吹いてさますときにこれに似た音を出すことがある。

① 声帯振動なし→無声音

② 上下の唇→両唇音

③ (筆者注：この調音の位置で側面的調音は生理的に不可能で中線的と側面的の区別はない)

④ せばめを作り、空気を通りにくくする→摩擦音

⑤ 口蓋帆 上がって鼻腔への通路を閉鎖→口音

(4) 小泉 1998 : 41 では、次のように記述されている。

[無聲]日本語の「フ」 [ $\phi$ ]の子音 [ $\phi$ ]は、上下の唇が接近して、そのすき間から息がもれる無声両唇摩擦音である。

### 2.3 一般音声学における先行研究のまとめ

以上を総合して、子音 [f] 及び [ $\phi$ ] についての音声学的な特徴としては、先に挙げた小泉 1996 の記述に集約されると考える。すなわち、[f] の調音方法は、「下唇 (内唇) を上歯に近づけて、そのすき間から呼気を流す」というものである。<sup>15)</sup>

一方、 $\phi$ ] については、調音点が両唇であり、唇歯摩擦音 [f] とは調音点が異なる。調音方法は、「上下の唇が接近して、そのすき間から息がもれる音」であるといえる。なお、この音についても無声両唇摩擦音である [ $\phi$ ] に対し、有聲両唇摩擦音 [ $\beta$ ] が存在するが、本稿では触れない。

ここから、[f] と [ $\phi$ ] 両音声の差は、調音点の相違及びそこを通して生じる音質の違いが両者を分けているといえよう。

### 2.4 中国語の唇歯摩擦音に関する先行研究について

次に、本稿が取り上げる中国語の「f」について、「学習者」が発音学習上生じる問題について論じた唯一の先行研究ともいえる葉軍・朱川 1997 を挙げる。

(5) 葉軍・朱川 1997 : 23-25

該論文は、日本人が中国語の発音を学ぶ際に陥る過ちを分析し、さらにはその対処法を研究しており、唇歯摩擦音とそれに関わる音 (「h(x)」及び「 $\phi$ 」) との問題についても取り上げ考察している。<sup>16)</sup> 本稿の研究対象に関わる部分について、以下引用することとしたい：(なお、該論文中には、中国の歴史音韻学で用いられる音韻学用語が用いられており、引用訳文には適宜筆者が注釈を入れてある)。

[Φ]と[f]同是唇音，一个是双唇，一个是唇齿，对有的人来说很难辨别，而事实上，在一些语言和方言里，[Φ]与[f]是不分的，属于同一音位。但是，以北京话为母语的人更容易将[Φ]听辨成[x]而不是[f]，也就是说，按中国人的听感，[f]与[Φ]音色的差异很大的，……(中略)……

因此，虽然[Φ]与[f]一样都是唇擦音，但由于它们产生摩擦音的发音体不同，使得二者得能量集中区域产生不同的分布。强频集中区是人们感知辅音的重要线索之一，而在擦音这样的久音就显得更为重要，高频集中尖锐的[f]跟低频集中低沉的[Φ]对说汉语的人来说是不能相混的；不然，“理发”就会变成“理化”，而那个“化”的声母[Φ]，既不像[f]，也不像[x]，难怪听起来别扭。

(上記中国文に対する拙訳)

[Φ]と[f]は同じく唇音(筆者注：ここでいう「唇音」は、一般的な音声学用語で「両唇摩擦音」と呼ばれるものを指す)であるものの、一方は両唇音、もう一方は唇歯音(筆者注：ここでいう「歯唇音」は、一般的な音声学用語で「唇歯摩擦音」と呼ばれる)である。人によっては、これを区別するのが難しく、実際にいくつかの(筆者注：中国語の)方言では、[f]と[Φ]を分けずに、同じ音素としている。しかし、北京方言を母語とする人には容易に[Φ]を[x](漢語拼音の「h」：筆者注)と聞き、[f]とは聞かない。つまり、中国人の聴感覚からすると、[f]と[Φ]の音色の差違はとても大きい。(以下略)

ここ(筆者注：スペクトログラムの分析<sup>17)</sup>)から、[Φ]と[f]は同様に唇の摩擦音であるけれども、その生じる発音体(共鳴体)の違いから、両者の強さが集中している区域から違った分布を生じさせる。強い周波数の集中している箇所は人間が子音を感知する重要なヒントの一つである。そして、摩擦音のこのような長い音は十分注意しなければならない。高周波数が集中する[f]と低周波数の集中する[Φ]は、中国語を話す人たちにすれば、混同することがない。そうでなければ、「理髮」が「理化」に変わってしまったら、その「化」の声母が[Φ]なら、もう[f]でもなければ、[x]のようでもなく、違和感があると感じてしまう。

とし、最後に両子音を使った単語や両子音が使われた練習のための単語を提示する。

例 丰富 fēngfù 火花 huǒhuā 愤恨 fènhèn 恢复 huīfù

それに加えて、ミニマルペアを使った会話(huìhuà)一废话(fēihuà)のような発音練習をすることも提案している。

(6) 陶振孝・徐一平主篇／朱春躍編著2008：68-70

該書は、日本語を学習する中国人のために書かれた書であり、[f]と[Φ]についても触れる。該書が日本語の発音についての書であることから、[Φ]の発音方法を詳しく説明する。<sup>18)</sup>近年、若者の間で日本人の若者の間でも「ファ」などの音を[f]で発音する場面があることを指摘しつつも、現段階では依然として[Φ]で発音するのが一般的であることが記される。

(7) 平井2012：22-23

平井2012では、摩擦音[f]と[h]を比較しつつ日本語の発音にも触れて次のように言う：

/f/と/h/の最大の相違点は、口腔の一番前で調音するか、一番奥で調音するかであり、たとえば、/f/は上歯を下唇に当てることなく、両唇を軽く合わせてその隙間から呼気を放出する日本語の「ふ」の子音[Φ]で代用しても聞き手に誤解を与えることはまずない。

それは、中国語の現実の発話行為においては/h/のほとんどが[Φ]であるからである。

筆者は、こうした平井2012の考えとは、意見を異にするものである。その理由の詳細は後述する。

## 2.5 英語音声学における先行研究について

英語の唇歯摩擦音の指導法として、代表的専著一種 (8) 竹林・斎藤1982:93及び論文を一篇 (9) 横山1998挙げておきたい。

(8) は、一般音声学の著作の理解を超えるものではないため、詳細は省略に従う。(9) については、結論のみ述べる。唇歯摩擦音を発音するに当たって最も重要な点は、横山1998が行った実験において、「下の唇の方を上歯にそえる (下線部原文のママ) ようにして下さい」と指示し、「摩擦音の特質を強調する指導をする」ことによって、[ŋ]の子音をより明確に発音できるようになるという点にある。この点については、筆者も考えるところがあるため、第6章で言及したいと思う。<sup>19)</sup>

## 3. 発音習得に関わる理論的研究について

前章までに、唇歯摩擦音に関する音声学上の先行研究を示しておいた。本章では、「学習者」が学習の過程において、そうした音声学的性質を持った唇歯摩擦音の習得に際して、どのような障碍を受けるかについて言語習得理論的な面から見ていきたいと思う。

### 3.1 母語と学習対象言語との関係について

言語習得(教育)理論については、柴田・松崎2012:198-199がその理論の変遷について、簡明且つ分かりやすくまとまっているので、以下幾分長文であるけれども、引用して紹介したいと思う：

50年代60年代には、母語と目標言語を比べ、その習得困難点を予測する「対照分析仮説(Contrastive Analysis Hypothesis)」や、学習者の誤りから習得問題の理解を試みた「誤用分析(Error Analysis)」が盛んに行われた。<sup>20)</sup>

しかし、対照分析から予測できない誤用があることが明らかになったため、ただ単に言語間の違いだけを見るのではなく、母語と目標言語間に存在する「有標性」(markedness)「有標性差異仮説(Markedness Differential Hypothesis: MDH)」が出された。この仮説では有標性の高いものは習得困難だとされる(筆者注:Eckman1987が示される)。

その後、Flegeにより「音声習得モデル(Speech Learning Model: SLM)」が提唱され、言語間に違いがあればあるほど、習得がしやすいという仮説が出された(Flege, 1995, p. 233)。—中略—

この仮説と、前述の有標性差異仮説を受けて提唱された「類似性仮説(Similarity Different Rate Hypothesis: SDRH)」は、ある言語項目が他の項目よりも先に習得されるという現象について、習得の速度の面から説明を試みている。言語間で類似している項目は、母語の正の転移のため初級レベルからある程度目標言語に近い発話が出来ることが、新たな学習が起りにくく、かえって目標言語最終レベルへの到達の速度が遅くなる。しかし言語間で異なっている項目は、学習が起るため目標言語の最終レベルへの到達が急速に進む。さらに、対象項目の有標性はその習得速度に影響する。つまり、有標性が高いものは習得の速度が遅くなる。(以下略)

次に、本稿が研究対象としている唇歯摩擦音及び両唇音に関して、上記言語(語音)習得理論がどのように関わるかについて見ていきたい。

### 3.2 本稿で研究対象としている唇歯摩擦音について

唇歯摩擦音は、日本語音韻体系中に存在しない音である。そのため、Lado1957の説に従えば、習得が難しい学習項目である、といえるかもしれない。「はじめに」の章でも示したように、一般的な日本人なら、唇歯摩擦音の[f]を発音する時には、日本語音韻体系中に存在する[ɸ]を用いて「負の転移」である「代用」を引き起こしてしまう。このことは、Flegeの説で解釈すると、日本語母語話者にとって、知覚的に[f]に近い音である[ɸ]によって「代用」で済ませてしまう。それによって、正しい[f]の音が習得できない、という事態に陥っていると解釈できるだろう。<sup>21)</sup> また、SDRHの説によれば、[f]は日本語音韻体系中に既にある[ɸ]に近い音であるため、新たな学習が起りにくく習得が遅れるとも解釈できる。

それでは、「学習者」がどのような訓練をすれば唇歯摩擦音の[f]を習得できるようになるか。その検討に移る前に、実験音響学的見地から、いくつかの実験を行ったうえで、[f]と[ɸ]との間にいかなる弁別的な特徴があるかについて見ておきたいと思う。

## 4. 本稿で行った音声実験とその意義について

前章までで、一般音声学における先行研究を概括し、その上第二言語習得理論による[f]及び[ɸ]両子音についての習得難度について理論的な面からの説明を試みた。

本章では、[f]及び[ɸ]両子音について、子音のいかなる音声的特徴が両者を区別する特徴となっているかという点について、音響音声学の立場からさらに詳細な分析を行いたいと思う。そのために、第2章で見た[f]と[ɸ]両音の音声的差異について、まずスペクトログラムで確認しておきたい。<sup>22)</sup> その上で、数種の実験を行い、その結果の考察を行いたい。

### 4.1 [f]及び[ɸ]両音のスペクトログラムについて

第2章2.3においてまとめたように、唇歯摩擦音[f]と両唇摩擦音[ɸ]は、調音点及びそこから生じる音質の違いが両者を分けている。以下に、両者のスペクトログラムを示したい。

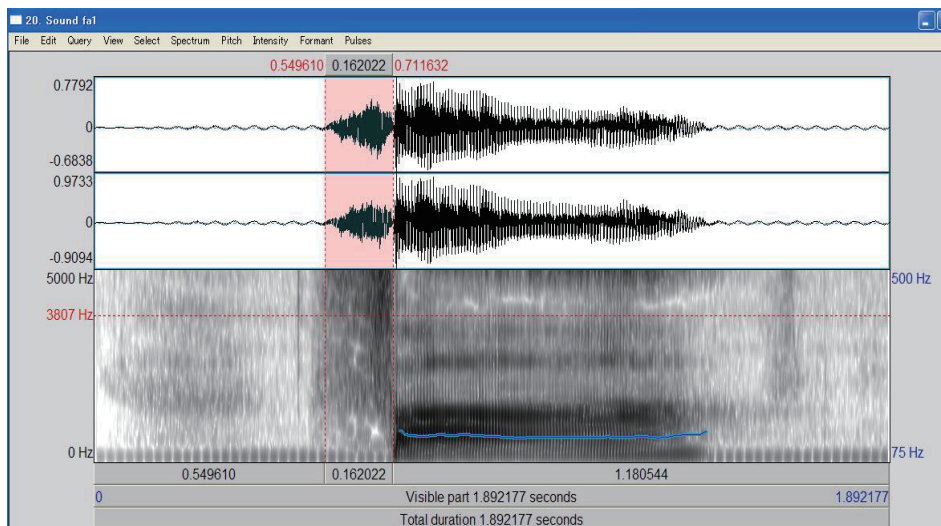
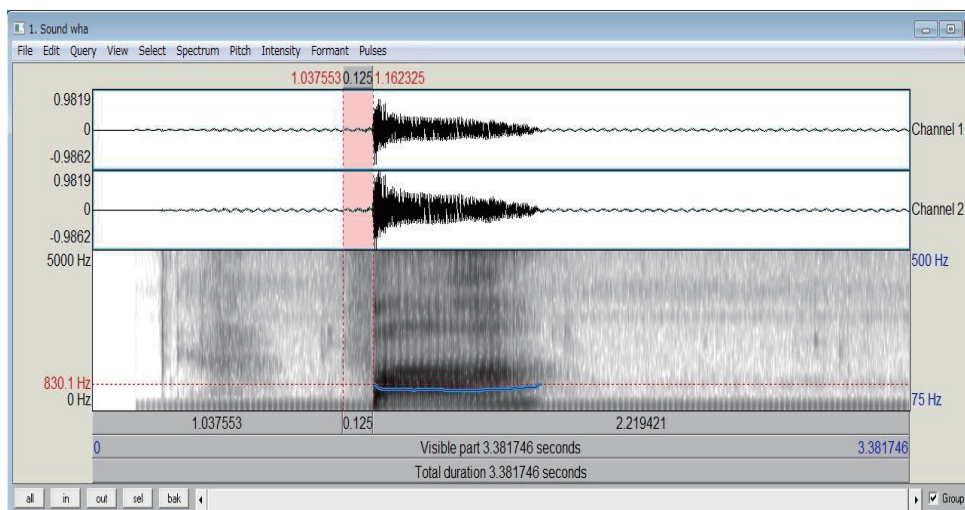


図1 [f]のスペクトログラム

図2 [ɸa]のスペクトログラム<sup>23)</sup>

いずれのスペクトログラム作成のために使用した音源の発話者は、筆者本人である。

両者を比べると、発音の始まり部分に大きな違いがあることが分かる。この部分がすなわち子音部分である。<sup>24)</sup>

上掲の [fa] 及び [ɸa] 両音節の音声波形・スペクトログラムを比較すると、[fa] が子音部と母音部とが画然と分かれているのに対し、[ɸa] は子音の出気部の波形にごく僅かな出気しか見られず、そこから母音部へとつながっていくという違いがあることが分かる。[fa] についていえば、[f] という子音部分の出気部と [a] という母音部分とに分かれ、出気部と母音部との間に僅かながら、音声波形のふれがなくなる部分があることである。これに対して、[ɸa] はそういった部分が見られない。この両者の差異は、音声波形を見れば明らかになるであろう。当然のことながら、[f] と [a] の間には、先に2章2.1において挙げた服部1984が指摘した子音の出わたり音が存在する。よって、波形のふれがなくなるこの部分は [fa] と [ɸa] を弁別する重要な要素の1つである可能性が高い。<sup>25)</sup> また、このスペクトログラム及び音声波形を見ると、子音部の [f-] の持続部分の持続時間が0.16 msほどで、その後先ほど述べた波形のふれがなくなる部分があり、その後母音部へと続く。<sup>26)</sup>

#### 4.2 本稿で行った音声実験の内容

本稿では、[fa] と [ɸa] という二つの発音を取り上げて次のような実験を行った。本稿が行った実験は、以下の通りである。

以下 (1) ~ (4) は、本稿で実験に使った音声（合成音）の説明である。

- (1) [p<sup>h</sup>a] という音声から、気音部 ([<sup>h</sup>-]) のみを切り出し、[ɸa] の前に接合し、[p<sup>h</sup>ɸa] という合成音を作成し、被験者に聞かせ、[ɸa] と聞こえるのか [fa] と聞こえるのか、或いは他の別の音に聞こえるのかについて調べる。

ここで、気音部 ([<sup>h</sup>-]) をなぜ [p<sup>h</sup>a] という音声から抽出したかについて付言しておきたい。この音声で確認したいのは、[ɸa] という音声の前に [f] の入わり部に見られるような摩擦音に似た性質を持った気音を付加した場合、その音声 [fa] に聞こえるかどうかを確かめる為のものである。よって、両唇摩擦音でもなく唇歯摩擦音のものでもない気音を用いて音声



を合成した。

- (2) [fa]の[f-]と[-a]の間のいわゆる「子音の出わたり」部を切除した上で、[ɸa]の子音の出わたり部分を挿入し、被験者に聞かせ、[ɸa]と聞こえるのか[fa]と聞こえるのか、或いは他の別の音に聞こえるのかについて調べる。
- (3) [ɸa]の[ɸ-]と[-a]の間のいわゆる「子音の出わたり」部を切除した上で、[fa]の子音の出わたり部分を挿入し、被験者に聞かせ、[ɸa]と聞こえるのか[fa]と聞こえるのか、或いは他の別の音に聞こえるのかについて調べる。
- (4) [fa]の[f-]と[-a]の間の「子音の出わたり」部を切除した音声を被験者に聞かせ、[ɸa]と聞こえるのか[fa]と聞こえるのか、或いは他の別の音に聞こえるのかについて調べる。<sup>27)</sup>

上記(1)～(4)のように合成した音声を作成した意図は、次の通りである。音声(1)は、[fa]という音声の判別に子音の発音開始直前から子音の発音開始までのいわゆる「入りわたり音」の気音が関わるかどうかを見るためのものである。そのため、子音の入りわたり部分に[fa]と[ɸa]に関わらない気音を付加するによって、[fa]に聞こえるのかどうかを調べる。(2)と(3)は、子音と母音との間に存在するいわゆる「出わたり音」がどの程度両者の判別に関わるかを見たものである。これは、2章の2.1において挙げた服部1984が[f]と[θ]の音の区別を聞き分けるのに際して、子音の出わたり音が深く関わっているのではないか、という指摘から示唆を受けたことによって、出わたり音の重要性を見るために作成した音声である。そのため、(2)の音声を被験者が聞いて[ɸ]の出わたり音の影響で[ɸa]と聞き、一方(3)の音声を被験者が聞いて[f]の出わたり音の影響で[fa]と聞いたのなら、子音の出わたり音が子音の聞き取りに与える影響が強いと言える。(4)[fa]の出わたり音がない場合、[fa]と判別されるかどうか、これも子音の出わたり音の重要性を見るために作成した音声である。

なお、本実験の被験者は、次の4名である。

中国人A：吉林省出身、女性。(母語は中国語で、朝鮮語も話せる)

中国人B：山西省出身、女性。

英語話者：カナダ人、男性。

台湾人：桃園県出身、男性(母語は中国語で、台湾語も話せる)。<sup>28)</sup>

### 4.3 本稿で行った音声実験の結果について

今回の実験の結果を以下表1にまとめて示す。

表1

	中国人 A	中国人 B	英語話者 (カナダ人)	台湾人
(1)	fa	fa	fa	fa
(2)	fa?	fa	fa	fa
(3)	fa	fa	fa	fa
(4)	sa?或いは fa	a	fa	fa

上記実験結果から看取できるのは、(1)の $[^h\phi a]$ という音を全ての被験者が $[fa]$ と聞いている事から、入りわたりの気音が唇歯摩擦音特有の唇と歯の間で発せられる摩擦音の代替と聞こえたことにより、被験者が唇歯摩擦音であると判断した、と考えられる。これは、子音の入りわたりの気音部が唇歯摩擦音であるか否かの判別を行う重要な要素であることが分かる。

次に問題となるのは、子音の出わり部分の重要度の優先順位である。実験の(2)～(4)は、出わり部分の重要度を測る実験である。<sup>29)</sup>(4)のように、完全に出わり音を消すと判別に支障が出るということは、出わり音も子音の判別に重要な要素であることが分かる。(3)の $[\phi a]$ の出わり部に $[fa]$ の出わり音を挿入した音声の聞き取りでは、全被験者が $[\phi a]$ ではなく $[fa]$ と聞き取っている実験結果から、子音の出わり部分も $[\phi a]$ 及び $[fa]$ の聞き取りに際し、重要な要素であるといえる。最後に、(2)の $[fa]$ の出わり部に $[\phi a]$ の出わり部を挿入した音声については、もし子音の出わり音の優先順位が高ければ $[fa]$ に聞こえず、 $[\phi a]$ と聞こえるはずである。実際には、3人の被験者が $[fa]$ と聞いており、1名だけ「 $[fa]?$ 」とした被験者がいた。この例から、(2)に関しては、子音の入りわり音を優先して子音の判別を行っている可能性が高いと考えられる。

以上の実験結果から子音の入りわたりが優先される可能性が高いといえるけれども、子音の判別に子音の出わり部もかなり影響があることを示唆している、と言えよう。よって優先順位として、子音の出わり音部分は、子音の入りわり音に若干劣ると推測しておく。

下に暫定的に、次のような優先順位を示しておく。<sup>30)</sup>

子音の入りわり（の気音） > 子音の出わり

次章では、全く異なる視点から唇歯摩擦音の聞き取りに関する問題について検討してみたいと思う。

## 5. $[fa]$ と $[\phi a]$ の弁別に視覚情報が聴覚に与える影響について

本章では、視覚的情報が音声聴取に与える影響を調べるために、主に映像（視覚情報）を使って、両子音の聴取問題をとらえてみようとするものである。前章までで、両子音の聴覚上の差異の所在については、暫定的に明らかにしておいた。次に見ておきたいのは、視覚情報が音声の聴取に対して影響を与えるか否かについてである。ここで、なぜ視覚情報と音声の聴取結果について言及するのかについて述べておきたい。

### 5.1 音声の知覚と視覚との関わりについて

一般的に、会話は母語であるか外国語であるかに関わらず、通常は面と向かって行われるものである。相手の顔や表情、口の形で得られる情報も少なくないと考えられる。こうした考えの下に、「マガーク」効果と呼ばれる McGurk & MacDonald 1976の研究がある。この研究は、ごく簡単に言えば、映像によって得られる視覚情報と音声情報の不一致が音声聞き取りにもたらす影響を見た研究である、といえよう。筆者は、マガーク効果が自身の研究に応用できないかと考え、今回の唇歯摩擦音の研究に応用することを考え、実験を行った。

なお、付言しておく、マガーク効果については、現在認知心理学の立場から研究が進められており、その効果の全貌の究明が待たれるところであるが、本稿はその詳細には立ち入らず、本稿が扱う $[f]$ と $[\phi]$ という子音の知覚問題に応用してみたいと考える。<sup>31)</sup>

実験の結果は、教学に応用できるものであったので、以下に示したいと思う。

## 5.2 マガーク効果を唇歯摩擦音の聞き取りに応用し、視覚効果が音声聴取に与える影響を調べる

ここでは、本稿で取り上げる [f] と [ɸ] の区別について、映像（視覚情報）が聞き取りにもたらす影響を考察する。

実験の内容は、次の通りである。[ɸa] を発音している映像に [fa] の音声をはめ込んだものと、[fa] を発音している映像に [ɸa] の音声をはめ込んだ二つの音を中国語母語話者及び英語母語話者に聞かせ、どのように聞こえるかを考察するというものである。この実験のねらいは、両者の区別に視覚的効果が影響を与えるかどうかという点にある。なお、管見の限りでは、本稿で扱う [f] と [ɸ] についてマガーク効果の影響に言及している論考は確認できなかった。ただし、[ba] と [va] を扱った研究としては、Rosenblum 2010がある。

Rosenblum 2010: 245は、「友人に協力してもらおう」という形でマガーク効果を簡単に試すことができるとする。その方法とは、二人の人間が前後に並び、後ろの人は「ba」を発音し、前の人は声を出さずに「va」の発音をする構えをする。すると、それを見ている人たちは、前にいる人が「va」を発音しているように感じられるという。Rosenblum 2010は、最後に、“This phenomenon is known as the McGurk effect, named the lead scientist who first discovered it. The effect can be quite strong. In our own laboratory, we find that a visible *va* overrides an audible *ba* 98 percent of time.”（この現象は〈マガーク効果〉として知られ、最初に発見した人の姓に由来している。この効果はかなり強力だ。見えている *va* が聞こえている *ba* を98パーセントの確率で妨害することを私の研究室で確認している<sup>32)</sup>）としている。

Rosenblum 2010は、脳科学に関する著書であり、一方本稿は音声の研究を主眼とするものであるという点で、両者の執筆主旨は異なる。よって、Rosenblum 2010では、両唇音を調音している映像に唇歯音の音声をはめ込んだ映像の実験は行っていない。これは、調音方法とそこから発せられる音声には関心が向けられていないことによる。本稿では、その目的とする唇歯音と両唇音の違いを明らかにするという点から、以下の二つの実験を行った。

- (1) [fa] を発音している映像に [ɸa] の音声をはめ込んだものを被験者に聴かせ判定してもらう。
- (2) [ɸa] を発音している映像に [fa] の音声をはめ込んだものを被験者に聴かせどう聞こえたか判定してもらう。

被験者は、音声の聞き取り実験時と同じで、中国語を母語とするもの3名、と英語を母語とするもの1名である。<sup>33)</sup>

## 5.3 マガーク効果を使った唇歯摩擦音の聴取実験結果

前節に示した内容を元に作成した実験映像をネイティブスピーカーの被験者に再度見てもらい、その結果を記したのが次の表2である。

- (1)・(2) とともに映像に別の音声をはめ込んだので、自然言語では起こりえない映像である。

いずれも、英語を母語とする被験者以外は、すべて [fa] と判定している。英語を母語とする被験者（カナダ出身）は、視覚情報にかなり大きく影響を受けているといえる点においては、Rosenblum 2010と同様と考えてよいであろう。<sup>34)</sup> カナダ人被験者のみが (2) の例について、「hwa」と回答している。



表 2

	中国人 A	中国人 B	英語話者 (カナダ人)	台湾人
(1)	fa	fa	fa	fa
(2)	fa	fa	hwa	fa(?)

(1) は、[fa] を発音している映像に [ɸa] の音声をはめ込んだものである。

(2) は、[ɸa] を発音している映像に [fa] の音声をはめ込んだものである。

#### 5.4 実験結果の考察

Rosenblum 2010 及び本稿の実験結果を考察してみると、唇歯音の聴取において視覚的情報（上歯を下唇に触れさせるという映像（視覚情報））が優先されるといえることが分かる。このことは、唇歯音を発音する上での調音としては当然のことである。この調音を行わなければ唇歯音は発音できないからである。それに加えて、本稿で行ったマガーク効果を用いた実験により、上歯で下唇に触れるという視覚的情報が対話相手に [ɸ] という子音の弁別情報をより強く与えているということも分かった。この実験結果は、4章で行った実験結果において子音の入りわたり部分が重要であると推測したことを補完するのではないかと思われる。すなわち、この唇歯摩擦音の調音を行うおうとする所作は、子音の入わり音を発音するための構えであり、この構えを対話相手に見せるということは、発話者が [ɸ] 特有の摩擦音を発することを対話相手に予期させるものであることを意味する。

### 6. 本稿の実験結果の視点からの先行研究考察

これまで本稿が行った実験結果の考察を踏まえて、先行研究について考えてみたい。

まずは、平井2012の説について見ていきたい。平井2012は、先に2章2.4で挙げたように、中国語の唇歯摩擦音について、「中国語の現実の発話行為においては /f/ のほとんどが [ɸ] である」としている。ここで言う「現実の発話行為」の指すものが、談話中に現れるものを指すのか、もしそうだとすればどのような状況下で現れるのか、どういった実例に基づくものであるのか、この説の根拠となる先行研究やデータがあるのか否か等について、平井2012は明らかにしていない。よって、本稿はこれ以上平井2012の説を論究することはできない。<sup>34)</sup> 本稿で検討した単音レベルでの実験と検討結果に基づくならば、[f] の発音と [ɸ] の発音が厳然と分かれていることは言を俟たない。

上記に加えて、横山1998の結論である「摩擦音の特質を強調する指導をする」という説について考えてみたい。横山が行った指導とは、先にも挙げた「下の唇の方を上歯の歯にそえるようにして下さい」と指示するというものである。この指示自体は、学習者の調音への注意を促すものであるため、筆者としても首肯できる。問題となるのは、その注意喚起をどのタイミングで行うのがよいのか、という点も考慮が必要であろうと考える。

朱川1997が主張する「[f] と [h](x) 或いは [ɸ] の音色の違いを学習者に認識させる」について、筆者もその主張の利点については賛成するものの、「学習者」にとっては、むしろ他の母音との違い

よりも、日本語音韻体系中にある発音及び正しい調音方法を習得することの方が重要であると考えられる。そのため、朱川が推奨するf-hのミニマルペアを用いた練習も[t]の発音法を習得した後の練習方法としては、適切な練習方法であろう。

## 7. 教室活動への応用の検討

これまでに、検討してきた結果を実際の教室活動において、どのように応用できるかについて2つの例を示しておきたいと思う。

### 【応用例1】

まず[t]の調音の方法を説明し、その調音方法が「ファ ([ɸa])」と異なることを説明する。また、その調音方法の差異によって発せられる音も異なることを説明する。更に、「学習者」にRosenblumの実験或いは本稿で行った実験の結果を説明し（或いはRosenblumが公開している映像を見せるのもよいであろう）、前上歯で下唇に触れるという視覚的情報が対話者に与える影響の重要性を説明する。それ以降は、「[t]は対話相手に発音の仕方を見せて」というだけでよい。

### 【応用例2】

まず「学習者」に[t]の調音の方法を教える。その上で、[t]を発音する際の入りわたりの「摩擦音」をはっきりと出そうとするRosenblumの映像を見せ、視覚情報の重要性を教える。<sup>36)</sup> その上で、[t]音の発音練習を行う。練習方法は、朱川1997が推奨するミニマルペアを使った練習もよいであろう。また、ミニマルペアの練習を行う際には、例えば、発生（発生する）(fāshēng)と発音したつもりが、相手には花生（落花生）(huāshēng)と認識されてしまうような間違いが起こることを説明するのもよいであろう。

以上のような応用例は、筆者がここ数年教室で行った経験の中から出てきたものである。当然のことながら、更により教え方があるであろうことは想像に難くない。是非とも多くの中国語教師による意見や批判などを仰ぎたいと思う。

## おわりに

今回、音声の聞き取り実験と映像を用いた実験を行うことによって、[fa]及び[ɸa]の音声的特徴の一端を明らかにすることができたと同時に、そこから教室活動への応用例を導き出すことができた。

ただし、私見では、かなり学習が進んでも本稿で最初に挙げた「負の転移」現象である日本語の「ファ」音で[fa]を代替する学習者が一定数存在する。こうした学習者への発音訂正を指摘するタイミングの研究については、今後の課題として行っていく必要があると思われる。

上記に加えて、平井2012に指摘されている「中国語の現実の発話行為においては/f/のほとんどが[ɸ]であるからである」とする説については、今回の実験では検討できなかったため、この点については改めて実験を行った上で検証をしたいと思う。

## 注

- 1) Rod Ellis1997, *Second Language Acquisition*. Oxford University Press. P51. 日本語版牧野高吉訳2003年版: 99-100.
- 2) 発音の習得には、母語と学習対象とする言語の関係についても見る必要があるといえる。本稿では、学

習対象言語を中国語とし、学習者の母語を日本語に限って述べたいと思う。ただし、必要に応じて学習者が長年学校教育で学んだ英語の発音にも触れることがある。

- 3) 本稿で議論の対象とするのは、主に日本語を母語とする学習者が中国語を学習する上での場合についてのみを述べる。そのため、以降は日本語を母語とする中国語学習者を「学習者」と呼ぶこととする。また、ここでいう中国語とは、現代中国語のうちでも「普通話」（或いは台湾で「国語」・東南アジアで「華語」）と呼ばれる共通語を指す。ただし、台湾で話される「国語」及び東南アジアでの「華語」は、中国で制定されたものとは様々な面で異なる特徴を持つ。発音面においては、北京方言および北方方言に見られる「そり舌音」が脱落するなどがそれである。以降、本稿において中国語とは、この中国で制定された「普通話」を指す。
- 4) この段階でのミスは多く、単にここで挙げたものにはとどまらない。これに類する例として、中国語の漢語拼音の誤読も挙げられる。たとえば、「ze」を「ゼ」とローマ字風に読んでしまうような間違いや「ツァー」のように母音の調音が不完全な状態で読んでしまう間違いなどがある。
- 5) 他の例を挙げると、外国語の発音を初めて学習する際に、母語である日本語の音韻中に存在しない音をうまく発音できないというものである。日本人にとって、英語の歯茎摩擦音「r」([ɹ])や先に挙げた中国語の「そり舌音」等もこれに当たるといえる。こうした事例が生じる要因は、日本語の音韻体系中にはない音を習得することの困難さに起因するものであると考えられる。ただし、この例に関しては、対象となる音声を繰り返し練習することにより改善されていく可能性が高い。習得に関わる事例については、第3章で触れる。
- 6) 以降、音声の表記については、一般的に用いられている[]に入れて[f]のように表記することとする。ただし、後に引用する先行研究中の文章は原文の表記法のままとする。
- 7) 中国語の音韻体系は、日本語のそれよりも複雑であり、子音の発音・母音の発音・声調、更には漢語拼音の読み方に気を取られるあまり、[f]の発音まで考慮しきれなかった可能性が考えられる。
- 8) Flege1987の説によれば、母語に取得対象言語の音韻体系中に母語に近い音がある場合は、習得が困難である、とする説を指す。
- 9) 2019年現在、小学校において英語教育が始まっているものの、ここでは大学生を考察対象としているため、こうした状況は考慮に入れない。
- 10) ここで言う「ファ」系の音とは「ファ・フィ・フェ・フォ」で、主に外来語を表記する際に用いられる。また、第2章で挙げる朱2008には、現代の日本語には「f」を発する場面がある、との指摘がある。
- 11) 第2章で触れる横山1998に詳しい。
- 12) 個人的に、英語教室などで学んだものは除く。
- 13) 結果として、唇歯摩擦音を両唇摩擦音で代用してしまう学習者が増加することとなる。このことは、コミュニケーション・アプローチによる教授法（相手に通じる発音を習得することを主眼とし、正しい発音を追求しないという意味で）からすると一概に非難されるべき事ではないものの、発音指導という面では不適切であると考ええる。
- 14) 上歯で強く下唇を噛んだ場合を指す。この事例は、横山1998でも報告されている。
- 15) なお、唇歯摩擦音とよばれるものには、他に有声子音の[v-]がある。両者は、[f]が無声唇歯摩擦音であるのに対し、[v]が有声唇歯摩擦音であるという、無声と有声という点を異にする。現代標準中国語においては、[v]は存在しないものの、現代中国標準語の基礎方言である北京語には[v]を子音とする音が存在するとされる（平山1959）。本稿では、現代中国北京語中の[v]問題については触れない事とする。
- 16) 葉軍・朱川1997が用いている両唇摩擦音の音声記号は、[Φ]である。これは他の研究者が用いている[φ]と字体が異なっているけれども、表わしているのはいずれも両唇摩擦音の[φ]である。
- 17) サウンドエクストログラムという機械によって音声を周波数成分に分析し、それを紙の上に示したものをスペクトログラムという（David Crystal 1987（本稿では、風間・長谷川1992『言語学事典』の「スペクトログラム」の項目を要約した）。
- 18) 説明の方法がD.ジョーンズのそれと似るため省略する。
- 19) 横山1998では[v]も実験の対象とする。
- 20) 代表的な研究者としてRobert Ladoがおり、著作としてはLado 1957が挙げられる。
- 21) these result suggest that the phonetic space of adult is restructured during L2 learning, and support the

hypothesis that equivalence classification prevents experienced L2 learners from producing similar L2 phones, but not new L2 phones. これらの結果（筆者注：十分に経験を積んだ英語母語話者のフランス語の子音は、フランス人が話すそれと同じようなVOTの値を示し、そうでないものは、自分の母語の子音を代用して発音をするという実験結果を指す）は、大人の音声空白はL2を学習する間に再構成され、そして等価分類（筆者注：母語と類似する音を母語と同じものとして扱うこと）は、経験を積んだL2学習者にとって類似音の産出から阻害されるが、新しい発音からは阻害されないと主張する（Flege 1987）。

- 22) 本稿では、PRAATというパーソナルコンピュータソフトウェアを用いて作成した。
- 23) スペクトログラム中ではIPAが表出できないため[ɸa]を「wha」と記している。
- 24) 子音部分は、スペクトログラム上網掛け処理を施してある。
- 25) 前述したように、服部1984においては、[ɸ]と[θ]の音を聞き分ける時に音声のどの部分が音の判別に関わるかについて言及したものである。対して、本稿は対象となる音声が違うけれども、服部1984において指摘された子音の出わたり部に着目し、後の実験も行った。
- 26) 実際には渡り音も含まれるので、完全な母音だけではないといえる。その証拠に、母音部の始まり部分のフォルマントが少し下がり、その後はほぼ変化がないことから分かるであろう。
- 27) [ɸa]の出わたり部を切除した音声を実験に使わなかったのは、[ɸa]の子音の出わたり部を切除すると、母音のみの音にしか聞こえなくなるからである。これは、[ɸa]の子音の出わたり部が非常に短いことも関係すると考えられる。
- 28) ここで、中国語を母語とする話者と英語を母語とする話者計4名を選んだ理由について付言しておきたい。これらの被験者4名はいずれも母語の音韻体系中に唇歯摩擦音を持つものである。なかでも、中国人被験者を二人、台湾人被験者を一人選んでいるのは、注3にも書いたように、中国で話される中国語と台湾で話されている中国語は、基本的に同じものであるものの、両者は若干の差異がある。ここではそうした差異が音声認識面で現れるかどうか見る意図がある。
- 29) 実際の[fa]の発音において、気音部のみあって、出わたり部がない或いはその逆の音声はあり得ないものの、重要度の順位を見るための実験であることを了解されたい。
- 30) 優先順序についての記述の仕方は、A>Bと記した場合、Aは、Bより優先されるという意味である。
- 31) 「マガーク効果」とは、「音声産出に関わる視覚的な情報と聴覚の情報を、聴取者が統合する現象のことである」とされる（ジャック・ライアルズ2003：55）。
- 32) この現象は、インターネットの動画投稿サイト（Youtube）でも確認することができる。参考：Try The McGurk Effect! - Horizon: Is Seeing Believing? - BBC Two
- 33) 被験者は、第4章の聞き取り実験時と同じである。
- 34) なお、実験後に映像を見ずに音だけ聞いて判断するように依頼した場合は、すべての被験者が正しく聴き分けていることを付言しておく。
- 35) 平井2012が指す「現実の発話行為」が何を指すかは定かではないものの、個々の発音を抜き出した単音レベルでの研究では、呉宗済1986をはじめとする多くの研究があることから、そういった研究を指さないもの、と推測される。また、平井2012が談話中の発音を指すものであった場合、本稿は論究するための材料を持ち合わせていないため、時期を見て検討していきたいと考える。
- 36) とはいえ、その視覚情報とはすなわち、[f-]の正しい調音によって発音する、ということである。

## 参考文献

- Catford, J.C. 1988. *A Practical Introduction to Phonetics* Second Edition. Oxford University Press.
- Crystal, David 1987. *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge University Press. (今、風間喜代三 長谷川欣佑監訳『言語学百科事典』1992年、東京：大修館書店による。)
- Ellis, Rod 1997, “Second Language Acquisition”, Oxford University Press, (ロッド・エリス1997. 今、日本語版 牧野高吉訳 2003年による。)
- Flege, James Emil 1987. The production of “new” and “similar” phones in a foreign language: evidence for the effect of equivalence classification. *Journal of Phonetics*15. 47-65.

- H.McGurk&J.MacDonald 1976. Hearing lips and seeing voices. *Nature* vol. 264.
- Jones, Daniel 1918. *An Outliner of English Phonetics*. (今Ninth Editionによる.) Cambridge University Press: LONDON
- Lado, Robert 1957. *Linguistics Across culture Applied Linguistics Language Teachers*. The University of Michigan Press.
- Ryalls, Jack 1996. *A Basic Introduction to Speech Perception*. California: Singular Publishing Group. (今, ジャック・ライアルズ『音声知覚の基礎』海文堂2003による.)
- Rosenblum, L.D. *See what I'm saying: The extraordinary powers of our five senses*. 2010 New York: W.W. Norton & Company Inc. 邦訳, 2011年 齋藤楨子訳『最新脳科学でわかった五感の驚異』. 講談社: 東京.
- 小泉 保1996『音声学入門』. 東京: 大学書林 (今, 2003年『改訂 音声学入門』による.)
- 呉宗濟主編1986『漢語普通話単音節語図冊』. 北京: 中国社会科学院.
- 齋藤純男1997『日本語音声学入門』. 東京: 三省堂 (今2010年改訂版第7刷による.)
- 柴田智子・松崎 寛2012.「第4部 音韻と習得」, 畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文編『第二言語習得研究と言語研究』. 東京: くろしお出版.
- 白井恭弘2008.『外国語学習の科学——第二言語習得理論とは何か』. 東京: 岩波書店.
- 竹林 滋, 斎藤弘子1982『英語音声学入門』. 東京: 大修館書店.
- 陶振孝・徐一平主篇/朱春躍編著2008『学日語必読叢書 語音詳解』. 北京: 外語教学与研究出版社.
- 服部四郎1951『音聲學』. 東京: 岩波書店 (また, 1984年『音声学 カセットテープ 同テキスト付』).
- 平井勝利2012『教師のための中国語音声学』. 東京: 白帝社.
- 平山久雄1959.「北京語の音韻論に関する二三の問題特に主母音とr化について」, 『言語研究』35, 31-51頁.
- 葉軍・朱川1997「1. 声母篇」朱川主篇, 『外国学生漢語語音学習対策』. 北京: 語文出版社.
- 横山安紀子1998「英語摩擦音/f, v/の調音と特質」, 『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』33号, 117-132頁. 東京: 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会.
- 羅常培, 王均 (編著) 1981『普通語音学綱要 (修訂本)』. 北京: 商務印書館.



ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか  
—— 『有閑階級の理論』における進化論と文化論<sup>1)</sup> ——

吉 田 量 彦

**Did Thorstein Veblen Keep a Cat?**  
— **Evolution and Culture in *The Theory of the Leisure Class*** —

YOSHIDA, Kazuhiko

Abstract

In his pioneering work *The Theory of the Leisure Class*, Thorstein Veblen researches various aspects of human behavior in modern industrial society and describes its key feature as conspicuous consumption: Modern people, now largely liberated from extreme poverty, are increasingly using various products not only to satisfy their vital needs, but also to simply show other people that they can afford such products. Veblen tries to describe a cultural-historical process in which this behavioral pattern gradually prevailed, calling it “evolution of institutions”.

The present article aims to clarify what Veblen’s concept of the theory of evolution looks like in *The Theory of the Leisure Class* and how it must be interpreted if this work does not contradict his other works. Unlike some interpreters who attempted to understand the theoretical dynamics in *The Theory of the Leisure Class* by supposing two opposite principles, i.e. conspicuous consumption and instinct of workmanship, I take a monistic position and interpret conspicuous consumption as a degenerate variant of the instinct of workmanship.

*Keywords:* evolution; leisure class; Thorstein Veblen; vicarious consumption; workmanship

目 次

0. はじめに—「身代わりの消費者」としてのペットたち
1. 本稿の構成



2. 『有閑階級の理論』における「見せびらかしの消費」と「身代わりの消費」
3. ヴェブレンと進化論, ヴェブレンの進化論
4. 『有閑階級の理論』はどういう意味で「さまざまな制度の進化についての」研究なのか
  - 4.1 「制度」とは何なのか
  - 4.2 「制度の進化」の原動力は何なのか—製作者本能と、そのさまざまな変異
5. おわりに—ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか

## 0. はじめに—「身代わりの消費者」としてのペットたち

日本列島全体で住民の高齢化が進んでおり、それは東京国際大学が2つのキャンパスを構える川越市霞ヶ関地区でも変わらない。筆者は大学から徒歩10分ほどのアパートに住んでいるが、平日休日昼夜を問わず、周囲には高齢者の姿が目立つ。<sup>2)</sup>

人間だけでなく、人間が連れているペットたちにも、高齢化の波が押し寄せている。<sup>3)</sup> 足取りの覚束なくなった飼い主と、足取りの覚束なくなった犬が、お互いを引きずり合うようにして日課の散歩をこなす。そういう光景を大学周辺でもよく目にする。

年を取ったペットには金がかかる。というかそもそも、ペットに金をかける文化が日本社会にここ数十年で急速に浸透したからこそ、ペットたちがその分長生きするようになったのだろう。<sup>4)</sup> 厳密さを要する話題でもないので個人的な記憶に頼るが、筆者が幼少期を過ごした1970～1980年代の北関東の田舎町では、ペットたちはおおむね家庭の残飯で飼われていた。近所のスーパーやホームセンターには、確かにペットフードが売られてはいたものの、品数はせいぜい種類か二種類で、わざわざ金を払って購入する人はあまり見かけなかったと記憶している。医療面でペットに金をかける機会といえば、法的に義務づけられた、保健所での狂犬病の予防接種くらいが関の山であった。それが今では、ごく普通のスーパーにも多種多様なペットフードが置かれるようになって久しく、動物病院も人間の病院に負けないうくらいあちこちに林立している。健康保険制度が整備されている人間と異なり、ペットを病院にかからせる飼い主たちの経済的負担は、決して小さくないものと思われる。

犬や猫が自分で財布を握りしめてスーパーや動物病院に出かけていくわけではないから、こうしたペットたちを厳密な意味の消費者と呼ぶのは問題かもしれない。にもかかわらず、スーパーで売られているペットフードや、動物病院で提供されている医療品および医療サービスを消費しているのは、まぎれもなくこれらの動物である。それに対価を支払っているのは彼らの飼い主だから、ペットたちは主人の経済力を背景にして、いわば主人の身代わりに消費を行っていると言えないこともない。

19世紀後半から20世紀前半のアメリカで数奇な生涯を送り、「経済学者には社会学者と呼ばれ、社会学者には経済学者と呼ばれた」<sup>5)</sup> 異端の経済思想家ヴェブレン (Thorstein Veblen: 1857-1929) が、代表作『有閑階級の理論 The Theory of the Leisure Class』(1899) のなかで、まさしくこうした消費行動(?)を「身代わりの消費」と呼んでいる。身代わりの消費とは、『有閑階級の理論』を一躍有名にした分析ツール「見せびらかしの消費」の一形態であり、消費者本人の経済力ではなく、本人と何らかの意味で縁続きの、他人の経済力を見せびらかすための消費行動のことである。ヴェブレンによれば、「見せびらかしの消費」が「身代わりの消費」という形態をとりうるからこそ、消費行動を通じた見せびらかしの規模も範囲も、個々の消費者という狭い枠を超えて、ほぼ無限に膨らんでいく可能性をもつのである。<sup>6)</sup>



## 1. 本稿の構成

『有閑階級の理論』は、高い知名度を誇り、娯楽読み物的な意味でのリーダビリティも決して低くない割には謎の多い著作である。とりわけ、さりげなく付加されている「さまざまな制度の進化の経済学的研究 An Economic Study in the Evolution of Institutions」という副題（下線部強調吉田）には、一つの謎が隠されている。<sup>7)</sup> この著作の中で提示される「有閑階級」「見せびらかしの消費」「身代わりの消費」といった概念装置は、後ほどその一端を示すように、各論的には、現代産業社会に特徴的な消費行動を分析するのに今日なお有効と思われる。ところがそうした各論的分析から距離をとり、全体の理論構成を俯瞰しようとする、ヴェブレンの「研究」の何がどう進化論的なのか、たちまち判然としなくなる。要するに、一つ一つの議論は面白いのに、全体として何が言いたいのか大変整理しづらい著作なのである。

本稿の狙いは大きく分けて二つある。一つは、『有閑階級の理論』で提示された「身代わりの消費」という概念装置を現代社会のさまざまな消費行動に当てはめることにより、ヴェブレンの着想の射程の広さを再確認することである（第2節）。はじめにも触れた通り、ヴェブレンによれば、経済的余力を見せつけるために行われる「見せびらかしの消費」は、見せびらかしたがついて本人が消費の直接の主体でなくても成立するし、むしろ本人以外の他人が代わって消費することで「見せびらかし」の規模も範囲も飛躍的に拡大する。こうした「身代わりの消費」の西洋社会における伝統的な担い手として、『有閑階級の理論』では使用人（雇い主の経済力を見せびらかす）、女性（実家や夫の経済力を見せびらかす）、聖職者（教会組織の、ひいては神の経済力を見せびらかす）といった存在が例示されているが、他にも子供（親の経済力を見せびらかす）やペット（飼い主の経済力を見せびらかす）、会社員（会社の経済力を見せびらかす）など、現代社会における類例はいくらでも見つけられるだろう。このうちペットについては、ヴェブレン自身が『有閑階級の理論』で詳しい（しかし馬鹿馬鹿しい）考察を行っている事実を鑑み、本稿の締めくくりに独自に節を設けて取り上げてみることにしたい（第5節）。

もう一つの狙いは、『有閑階級の理論』全体の理論構成を、「制度の進化論」というヴェブレン自身が（少なくとも初版刊行時に）与えた規定を尊重しつつ、他の著作との整合性を損なわないように解釈しなおすことであり、こちらの方は数段面倒な試みとなる。順序としては、ヴェブレンが接触・吸収したと思われる同時代の進化学説の特徴を押さえたのち（第3節）、『有閑階級の理論』がどのような意味で進化論的発想に基づいた著作といえるのか批判的に検討する（第4節）。あらかじめ述べておくと、ヴェブレン自身が『有閑階級の理論』で提示しているように見える「製作者本能」と「有閑階級という制度」の二元論は、後者を前者の一変異形態とするある種の一元論へと修正しない限り、その後の著作との整合性を保てなくなるように思われる（第4節2項）。

## 2. 『有閑階級の理論』における「見せびらかしの消費」と「身代わりの消費」

『有閑階級の理論』本文は、次のような一文で始まる。

「有閑階級という制度がその最高の発展を遂げているのは、たとえば封建時代のヨーロッパや封建時代の日本のように、野蛮時代の文化が高度化した段階においてのことである」<sup>8)</sup>

いきなり日本が出てきて驚かされるが、そこはひとまず問題にしない。有閑階級 *leisure class* とは、階級 *class* という言葉が入っている以上、元々は特定の社会階層を示す用語であったはずだが、ヴェブレンはこれを「制度」として分析し、<sup>9)</sup> 人類社会におけるその起源、発達・拡散過程および現状を明らかにしようとする。そうした制度としての有閑階級を象徴的に代表する行動として、さまざまな実例を交えつつ繰り返し取り上げられるのが「見せびらかしの消費」である。

有閑階級の思考に取りつかれた人たちは、「労働の回避を顕示すること」を目指すヴェブレンは言う。<sup>10)</sup> つまり自分たちがひま *leisure* をもてる社会的・経済的境遇にあることを、言いかえればその活動時間すべてを直接的な生産活動にあてなくても暮らしていける境遇にあることを、さまざまな消費行動を通じて周囲に見せびらかそうとするという。これが見せびらかしの消費である。具体的には、彼らは再生産のための必要をはるかに上回るカロリーを摂取して肥満したり、<sup>11)</sup> 自分でやれば無料あるいは安く済むことをわざわざ使用人を雇ってやらせたり、生産活動に不向きな、というかむしろ邪魔な装飾性の高い商品を身につけたり、住居に飾ったりする。

ヴェブレン自身の挙げている例ではないが、たとえば同じ腕時計でも、国産の大量生産品とスイス製の高級品では、きわめて大きな価格差がある。時刻を知る目的なら量産品で済むところを、あえてその数十倍、数百倍の金額を投じて高級腕時計を身につける人がいるのはなぜだろうか。それはローレックスの方がカシオやセイコーより正確に時を刻むから、というわけでは断じてなく、ヴェブレンに言わせるなら、「価値の高い財を見せびらかすように消費することは、有閑紳士が名声を獲得するための手段」だからである。<sup>12)</sup> 材質が貴金属だったり、文字盤に宝石がちりばめられていたり、有名デザイナーがデザインを引き受けていたり、高級腕時計は時計としての機能から見れば無駄な理由で値段が高く、しかも無駄に高いことを誰もが容易に見てとれる。したがって、これを購入して身につけていれば、自分が単なる時刻確認という実用目的以上の商品を買う「余裕」があることを、周囲に効率よく見せびらかすことができるのである。

しかし「手元に富が蓄積されてくると、当人自身の努力だけでは豊かさを十分に証明できなくなってくる」とヴェブレンは言う。<sup>13)</sup> 仮に高級腕時計を何本でも購入できるような「豊かさ」があったとしても、一人の人間が左右の腕にローレックスを10本ずつ巻いて生活することは不可能である（物理的には可能かもしれないがあまりにも不便だし、それ以前に知性と品性を疑われる）。とはいえ「適切な量と質を消費することができなかつたら、それは劣等と汚点の刻印になる」<sup>14)</sup>、つまりケチだと思われて見くびられることになるから、こうした人は自分の財力に見合った見せびらかしの消費を行うため、自分一人で消費しきれない財を、自分の身代わりとしての他人に消費してもらうことになるという。そして後者は、前者の身代わりに消費行動を行うことで、前者から見れば自らの経済力を見せびらかすための手段となる。これが見せびらかしの消費の中でも、特に「身代わりの消費」と呼ばれる消費行動である。ごく原始的な例としては、他人に「高価な贈り物」を贈ったり、他人を「贅を尽くした宴会」に招待したりするといった行動が挙げられているが、<sup>15)</sup> たとえば前段で言及した、他人を臣下や使用人として継続的に雇用するといった行動も、身代わりの消費の一例に転用されている。ひとから羨ましがられるほど完璧な臣下や使用人となると、身なりを上品に整え、複雑怪奇な礼儀作法を習得し、高度な専門性や知識を身につけていなければならないが、そうしたことはおびただしい時間的・金銭的余裕をつぎ込まなければ不可能だからである。<sup>16)</sup> 要するに、まず雇用して一から教育するにせよ、高度な教育を受けた人を後から雇用するにせよ、大変な費用がかかるというのである。

『有閑階級の理論』では、こうした身代わりの消費および消費者の実例として、さらに女性や聖職者に取り上げられる。ヴェブレンによると、欧米社会は女性を「家畜的動産 *chattel*」とみなす

古代の家父長制的伝統の延長線上にあり、<sup>17)</sup> そこでは女性にきらびやかな消費をさせることがその父（未婚女性の場合）や夫（既婚女性の場合）の経済力を見せびらかす格好の手段となる。しかもこうした消費が本人の楽しみのためではなく、あくまで別の誰かの経済力を見せびらかすための身代わりの消費であることを念押しするかのように、明らかに女性本人の楽しみになるような消費行動（たとえば酒・タバコ等の嗜好品の享受）は、欧米社会では長きにわたりタブー視されてきた。<sup>18)</sup> また、きらびやかな法衣や祭具に囲まれた聖職者の生活も、それがあくまで聖職者本人の楽しみのためではなく、神や教会の力を見せびらかすための身代わりの消費であるからこそ、さまざまな禁欲的で不快な戒律や苦行に縛られているという。<sup>19)</sup>

ヴェブレン自身のこの部分の記述がやや取り留めのないものになっていることから分かるように、わたしたちはこうした身代わりの消費・消費者の例を、わたしたち自身の周囲にいくらでも見つけ、いくらでも付け加えていくことができる。例えばヴェブレンは子供を大変な金食い虫と考え、社会の中間層（上層ほどの「余裕」はなく、かといって下層ほどなりふり構わず働かなければならないわけでもない）ほど「恥ずかしくない」生活水準を維持しようとするため子供の数は少なくなるという奇妙な論陣を張るのだが、<sup>20)</sup> 逆に言えば金食い虫である子供は、それぞれの家計の身の丈に応じた消費行動によって、親の経済力を映す鏡となる。つまり子供も立派な身代わりの消費者である。わたしたちが「はじめに」で扱い、第5節で再び取り上げるペットも、この延長線上で身代わりの消費者として位置づけられるだろう。また、ヴェブレン自身は特にそういう視点から論じてはいないが、現代産業社会を特徴づける営利企業なども、身代わりの消費の実例には事欠かない組織と思われる。会社で「きちんとした身なり」を要求されるという理由で、値の張るスーツやジャケットに給料の一部をあてているサラリーマンは、会社の看板を背負った身代わりの消費者といえる。運転手付きの高級車を乗り回す同じ会社の経営者も、見方によっては、会社を動かしている資本の潤沢さを見せびらかすための身代わりの消費者といえるかもしれない。

### 3. ヴェブレンと進化論、ヴェブレンの進化論

『有閑階級の理論』で展開されているこうした分析を、既に述べたように、ヴェブレン自身は「さまざまな制度の進化についての経済学的研究」の実践例と考えていたようである。そもそも彼が出会った「進化論」とは、一体どのような思想だったのだろうか。

ヴェブレンが進化論思想と本格的に接触したのは、大学院時代のこととされている。ノルウェーからの移民の子として、アメリカ合衆国ウィスコンシン州の小さな開拓村で生まれ育ったヴェブレンは、隣接するミネソタ州の大学（カレッジ）で学んだ後、数学教師などを経て、最終的にイエール大学の大学院に移って哲学研究に従事する（1884年に博士号取得）。哲学を専攻した理由はよく分からないが、後年の研究・執筆活動に結実することになるヴェブレンのきわめて多種多様な関心が、当時一般的だった個別科学の専門区分にぴったり納まるようなものではなかったのかもしれない。このイエール大学で、当時新思潮として盛んに議論されていたのが進化論だったという。<sup>21)</sup>

進化論と一口に言ってもその理論構成はさまざまであり、ヴェブレンが接触した進化論が一体誰のどういう進化論だったのか（あるいは、一体誰のどういう進化論に近いものだったのか）、いろいろ言われてはいるものの、完全にこういうものだったと特定するのは難しい。<sup>22)</sup> とりあえず、時代背景その他から確実に言えることが二つある。

一つは、それは今日の進化論生物学が基調としている、「進化の総合理論 synthetic theory of Evolution」が成立する以前の進化論だったことである。進化の総合理論とは、ダーウィン (Charles Darwin: 1809-82) が『種の起源』<sup>23)</sup> (原書初版1859年) で確立した基本構想と、主に20世紀に入ってから大きく進展した遺伝学的知見の「総合」によって成立した理論であり、生物種に遺伝子レベルで生じる突然の変化をうまく説明できるように改良されている。これに対し、こうした総合理論成立以前の元々のダーウィンの進化論は、与えられた環境に生物種が無数の世代交代を経て「ゆっくり」適応していくという発想に基づいて構成されていて、たとえば突然変異のような、生物種が遺伝情報レベルで「いきなり」変わる可能性を理論構成上うまく取り込めていないことが指摘されている。<sup>24)</sup>

この点では、制度の進化を語るヴェブレンの理論構成も、私見では断絶よりも連続的推移を基調とした「ゆっくり進化論」の形をとっているように思われる。少なくとも『有閑階級の理論』を世に問うた時点でのヴェブレンは、かつてある社会階層 (狭義の「有閑階級」) に典型的かつ限定的に見受けられた行動類型が (特に産業革命以降の環大西洋経済圏の成長を受けて) じわじわと欧米社会の大半の階層に拡散・浸透していく様子を、息の長いタイムスパンで巨視的に跡付けようとしている。だからこそ『有閑階級の理論』はさまざまな時代や地域のさまざまな話題に各論的かつ網羅的に言及しなければ論旨を進めていけないような書き方で成り立っており、その結果、あまり穏当でない言い方をあえてするなら、話があちこちに飛んでだらだらと長ったらしいのである。<sup>25)</sup>

もう一つ指摘しておかなければならないのは、ヴェブレンの接した進化論が生物学の領域に限定された理論ではなく、最初から社会科学方面への応用が見込まれる理論と考えられていたことである。この点で、研究者たちも一致して指摘するように、スペンサー (Herbert Spencer: 1820-1903) の影響は見落とせない。スペンサーは今日顧みられることこそほとんどないものの、<sup>26)</sup> 19世紀後半の英語圏では進歩的な社会思想家として大変な名声を博していた人物であり、進化論的な発想に則りつつ (少なくとも本人はそう自称しつつ) 人類社会の生成発展の方向性を大胆に論じたことで知られている。その都度の環境条件に適合した形質をもつ個体が生き残って繁殖する、という進化論の基本思想を簡潔に表現した「適者生存 survival of the fittest」という言い回しは、もともとこのスペンサーが提唱し、ダーウィンがこれを受けて『種の起源』第5版 (1869) に取り込んだものである。<sup>27)</sup>

しかし、こうした指摘が正しいとすると、ヴェブレンの進化論理解はそもそもの初めから重大な問題をはらんでいたことになる。ダーウィン、スペンサー双方がそれに対してどれだけ自覚的であったのかはともかく、実は両者の「進化論」は、理論としての方向性が根本的に異なるからである。<sup>28)</sup> 具体的には、ダーウィンの進化論が進化という概念から規範的意味づけを極力削ぎ落として構成された、生命現象一般についてのかなり純度の高い記述理論 descriptive theory を志向しているのに対し、スペンサーの進化論にはそのような理論的禁欲が見られず、進化=進歩=よいことという、よくも悪くもまっすぐな思い入れに導かれた、社会現象一般についての規範理論 normative theory としての性格が濃厚である。<sup>29)</sup>

スペンサーの発想の起源は、ダーウィンよりもむしろ、ダーウィン以前のラマルク (Jean-Baptiste Lamarck: 1744-1829) が唱えた別系統の進化論に求められる。有名な「キリンの首はなぜあれほど長く進化したのか」という問いかけに対し、ラマルクは『動物哲学』の中で、キリン (の遠い祖先) たちが高い木の上の葉を食べようと努力した結果、頻繁に用いられた首が鍛えられて伸び (用不用説)、その伸び具合が世代から世代へと継承・蓄積されて今の姿になったと答えてみ



せる（獲得形質の遺伝）。<sup>30)</sup> 要するに、生物種はその都度の環境条件上そうなるべき方向に努力して進化を重ねていき、努力が十分なら（あるいは、あるべき進化の方向性に対して適切なら）その環境への適応度を増して生き残り、努力が足りなければ（あるいは、あるべき進化の方向性に対して不適切なら）適応しきれずに絶滅するというのである。生物たちに置かれた環境に適応する努力を要求し、適応の成功・失敗という結果をこうした努力（の有無・十分不十分・適切不適切）に遡及して説明しようとするラマルクの進化論は、今日の水準からすれば生物学的信頼性をほぼ完全に欠いているにもかかわらず、<sup>31)</sup> 大変困ったことに、社会的成功・失敗を当人たちのその都度の社会情勢・経済情勢への適応努力（の有無・十分不十分・適切不適切）の結果として説明しようとする、ある種の自己責任論との親和性が非常に高い。このため今日でも、進化論的言辞を駆使して人間の社会活動・経済活動を語ろうとする場合、そうした語りはややもすると「ラマルク＝スペンサー路線まっしぐら（吉川浩満）」の、粗雑な価値規範を最初から内包した非科学的で独断的な言説に終わりがねないのである。<sup>32)</sup>

こうした視点からヴェブレンの『有閑階級の理論』を見てみると、そこに現れる「さまざまな制度の進化についての」考察には、ダーウィンの進化論に顕著な価値中立的記述主義と、ラマルク＝スペンサー的進化論に顕著な（ただし、ラマルクやスペンサーと比べてきわめて悲観的な）暗黙の価値判断とが、微妙に混在している印象を受ける。次節で見るように、彼は一方では早急な価値判断を極力排除して、「あくまでも現代社会がどのようなものなのかを観察し、解き明かすため」、人類社会が現状に至った文明史的経緯の可能な限り客観的かつ忠実な記述に専念しようとする。<sup>33)</sup> しかし他方、彼はそうした分析的記述の結果として描き出された人類社会の現状、つまり「見せびらかしの消費」というかつて狭義の有閑階級に固有のものであった行動様式が「大衆に受容」されるまでに至った現状に対し、価値中立的な無関心を貫くことがどうしてもできない。むしろそうした「制度の進化」の方向性を「社会の産業効率を引き下げ、現代的な産業生活が要請する事態に対する人間性の適応を遅らせるように作用する」ものとして危険視するヴェブレンは、<sup>34)</sup> あの手この手で、人類を健全な生産的活動に向かわせる原動力としての「製作者本能 instinct of workmanship」の復権を説くに至るのである。

#### 4. 『有閑階級の理論』はどういう意味で「さまざまな制度の進化についての」研究なのか

##### 4.1 「制度」とは何なのか

ここまで特に掘り下げた説明もせずに用いてきたが、そもそも「制度の進化」という表現は誤解を招きやすい。わたしたちが制度 institution という言葉を聞いて真っ先に思い浮かべるのは、英語と日本語とを問わず、普通は社会制度 social institution のことだからである。しかし実際には、ヴェブレンはこの言葉を用いる際、もっとややこしいことを考えている。このことをまず『有閑階級の理論』本文に即して確認していきたい。

ヴェブレン自身の定義によると、『有閑階級の理論』が取り上げようとする制度とは、何よりもまず人間の頭の中に育まれる「思考習慣」のことである。「制度とは、実質的にいえば、個人や社会の特定の関係や特定の機能に関する広く行き渡った思考習慣なのである」と彼は言う。<sup>35)</sup> 人間の行動を縛るさまざまな社会的枠組みも制度（社会制度）と呼ばれるが、それらはみな、個人や社会のあり方に関する多かれ少なかれ社会的に共有された特定の思考習慣が外側に表出され、観察可能な形をとったものでしかないとヴェブレンは考える。つまりわたしたちが日常言語で制度と考えているこうした社会的構築物は、実は原因ではなく結果にすぎないというのである。

このような共有された思考習慣としての制度は、「環境が変化を強制しないかぎり、無限に持続する傾向をもって」おり、<sup>36)</sup> 逆に言えば「変化する環境とともに変わる」。<sup>37)</sup> これがヴェブレンの言う「制度の進化」である。この際くれぐれも注意しなければならないのは、こうした制度＝思考習慣の変化を促す媒体としての「変化する環境」が、それ自体制度の産物であるということである。ひとびとが特定の制度＝思考習慣に基づいて行う活動は、彼らを取り巻く環境を絶えず変化させていく。この意味で、人間にとって環境とは「人間的であると同時に非人間的」なものである。<sup>38)</sup> それは人間の制度＝思考習慣がそれによって規定されていく所与であるというだけでなく、制度＝思考習慣によって絶えず改変されていく対象でもあり、「制度」と「環境」はお互いにフィードバックを重ねつつ双方向的に進化していく関係にある。

この点でヴェブレンの制度の進化論は、生物学理論としての進化論（ここでは科学的裏付けを欠いたラマルクのそれではなく、ダーウィンのそれを念頭に置く）と一線を画すことになる。生物学的進化論の場合、進化とはその都度の所与としての環境に応じた生物種の進化であり、環境とそこに生まれ落ちた生物個体との関係は、双方向的でなく一方向的だからである。つまりダーウィン進化論の別名である自然選択説という名称が（自然を擬人化する危険をはらみながらも）示すように、自然環境が生き残る生物個体を「選ぶ」わけであり、生物個体の方が生き残りやすいように自然環境の側を選択的に改変することもなければ、所与の環境で生き残りやすいように自らの行動を選択的に変えることもない。生物個体は所与として固定された環境に、同じく所与として固定された自らの形質をもって向き合うだけであり、そしてその形質のわずかな変異に応じて、ある個体は生き残って繁殖し、別の個体は繁殖することなく退場していくのである。<sup>39)</sup>

#### 4.2 「制度の進化」の原動力は何なのか－製作者本能と、そのさまざまな変異

『有閑階級の理論』だけを視野に入れていると読み取りづらいが、ヴェブレンはこうした「制度の進化」の原動力として、製作者本能 *instinct of workmanship* なるものを想定している。製作者本能とは「すべての人間に内在する」根本的傾向性であり、それは「他の事情が許すかぎり、生産的な努力や人間が利用しうるものなら何でも好ましい、と思わせるように仕向け」、反対に「人間が物や努力の浪費を非難するように仕向ける」という。<sup>40)</sup> 要するに、ひとは誰でも心の底では、完全に無意味な活動に従事することには及び腰になるというのである。

ひとは確かに、少しでも生活に余裕ができれば、その余裕を無駄な消費行動という形で見せびらかそうとする。しかしだからといって、身の丈に合わないような規模の見せびらかしの消費を続けた挙句、自らの経済的生活基盤を掘り崩して自滅するような人は、皆無というわけではないにせよあまり頻繁には見かけない。それはヴェブレンによれば、製作者本能がいつかどこかでひとびとのうちに「一見して無駄だと分かるものに対して不快の念を抱かせたり審美的な拒否感を抱かせるような、普遍的な感覚」を呼び起こし、程よい歯止めになってくれているからだという。<sup>41)</sup>

『有閑階級の理論』は非製作者的な思考・行動類型の解明を主軸にすえた論考だから、製作者本能については局所的にしか言及していない。したがって『有閑階級の理論』だけを読む限り、製作者本能と「有閑階級という制度」がどういう関係にあるのかは非常に分かりづらい。ある箇所では、製作者本能の働きは「見せびらかしの消費という慣行とは無縁な、しかもある程度それと相反するような、別の作用」として説明されているから、<sup>42)</sup> ここを素直に読むならば、ヴェブレンは「制度の進化」の原動力を（少なくとも）二つ想定していると解される。<sup>43)</sup> その場合制度の進化は、その都度の環境特性に応じて、有閑階級の思考法（見せびらかしの消費を促進する）と製作者本能（見せびらかしの消費を抑制する）のせめぎ合いにより、しかもどちらかがどちらかを完

全に無力化してしまうことなしに進行していくことになる。

國分功一郎（1974-）はこうした二元論的理解に依拠しつつ、仕組まれた予定調和をそこ（＝どんな逆境でも決して無力化されない製作者本能！）に読み取り、製作者本能を削除してヴェブレンの説明図式を一元化するよう提案する。それによると、製作者本能とは、人類に無駄なことをして自滅してほしくないというヴェブレンの願望から「無理をして」ねつ造されたありもしない疑似防衛本能であり、彼の分析の客観性を「破綻」に導く危険を内包しているという。もし有閑階級の思考法に対する原理的歯止めが存在しないなら（そして國分は事実存在しないと考えているわけだが）、人類がそれに際限なくのめり込んで自滅していくような未来も十分ありうるだろう。しかしヴェブレンはそういう可能性を思い浮かべたくなかったからこそ、「有閑階級という制度」がどんなに隆盛を極めようとも完全には沈黙させられることのない「本能」を想定することにこだわったというのである。<sup>44)</sup>

第3節の末尾でも触れたが、ヴェブレンに「有閑階級という制度」を軽蔑する暗黙の価値判断が働いていたという國分の指摘はもっともであり、それが『有閑階級の理論』全体の論調を偏向させているというのも、おおむね妥当な指摘と言えらるだろう。しかし筆者は、製作者本能という発想を『有閑階級の理論』の説明図式から削除することは容易ではないと考える。この用語はヴェブレンの後年の著作でも一貫して用いられ続けており、<sup>45)</sup>もし『有閑階級の理論』単独での内的整合性を念頭に置いて削除してしまうと、今度はそれら他の著作と『有閑階級の理論』の間の整合性が危うくなりかねないからである。

たとえば『有閑階級の理論』から5年後に刊行された『企業の理論』（1904）でも、製作者本能という発想は、相変わらずヴェブレンの基本構想の核心部分を占めているように思われる。あえて簡単にまとめるなら、ヴェブレンがこの第二の単著で描き出してみせるのは、いわばひとつひとつの製作者本能が製作者本能であることを保ったまま、企業活動の中でその現象形態を変質させていく過程である。それは一方では、もともと製作者本能のストレートな発露としての「産業活動 industry」、つまり何らかの意味で有用なものを生産する活動に主眼を置いていた（はずの）企業が、<sup>46)</sup>生産効率の最適化を図るなかで「金もうけの企て business enterprise [= 営利企業]」そのものを自己目的化していく過程であり、また他方では、長期的かつ社会奉仕的な生産計画を製作者本能ののちで展開する「産業の指導者 captain of industry」であった（はずの）経営者が、やはり「金もうけの企て」そのものを自己目的化していくことで、短期的かつ反社会的な営利追求に走る「金もうけの指導者 captain of business」に変質していく過程ということになる。

もちろん、解釈を最終確定させるには、ヴェブレンのその他の著作とも詳細な比較検討を行わなければならない。しかし少なくとも、上述のような『企業の理論』の理論構成と『有閑階級の理論』のそれを統合的に読もうとするならば、筆者はむしろ一元論は一元論でも、國分の提案とは反対方向に一元化された理論を想定した方がうまくいくように思われる。つまり製作者本能を切り捨てて有閑階級の志向一本ですべてを説明し切ろうとする一元論ではなく、逆に有閑階級的志向さえも製作者本能的説明図式の枠内に組み入れた、いわば製作者本能の一元論である。つまり見せびらかしの消費行動に代表的に表現されている「有閑階級という制度」を、製作者本能に対立する別の原理ではなく、製作者本能という根本原理の（たとえどんなに複雑に屈折した形であっても）一変異にすぎないものと位置づける一元論である。

本能という強い言葉を混ぜ込んでいるから奇妙に響くものの、「製作者本能」という言い回しを用いてヴェブレンが主張している内容そのものは、実はそれほど不合理ではない。人間が遺伝情報に厳密にプログラムされた行動パターンをもたず、多かれ少なかれ自立的な思考によって行動

を決めていかなければならない特殊な生物である以上、いかなる点においても実行する意味がないと見なしていることを実行することは、人間には論理的に不可能だからである。逆に言えば、人間の行動には常にそれを正当化する「意味」が伴うし、「意味」のないことを人間は実行したがない（というかそもそも実行できない）。製作者本能という発想の根幹を言語化すれば、おおよそ以上になるだろう。

どのような行動に「意味」を見出すことができるかは、本人の資質に加えて、その都度の環境条件にも左右される。たとえば食料獲得効率の劣悪な社会に暮らす人が、食料獲得に直結しない行動に「意味」を見出すことは困難だが、食料が豊かな社会ならそれほど困難ではない。したがって「製作者本能」も、その都度の環境条件下で誰がどのような行動に「意味」を見出すかに応じて、さまざまな変異を示すようになる。有閑階級的な思考様式も、製作者本能が示すこうしたさまざまな変異の一形態であり、それは生産活動が色々な意味で不安定な前近代社会ではごく限られた上層の人たち（＝社会階層としての狭義の有閑階級）だけに発現するレアな変異形態だったが、人類社会が総体として急速な経済成長を経験した近代以降、好都合な環境条件を受けて急速に拡散するに至った。このように理解するなら、ヴェブレンの処女作『有閑階級の理論』とその後の思索および著作活動は、その理論構成のあり方に大きな矛盾や飛躍を想定しなくても無理なく接続するものと思われる。

## 5. おわりに—ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか

厳密な意味での身代わりの消費者にペットを含めることができるかという、実は少し怪しい。第2節でその一端を示したように、『有閑階級の理論』には身代わりの消費者たちの雑多な例が挙がっているが、書かれた時代が時代だけに、さすがにそこにペットは含まれていないからである。また、ヴェブレンの言説を厳密に解するなら、身代わりの消費はその純度が高くなればなるほど、身代わりを務めている者自身に快楽よりもむしろ苦痛をもたらすようになるという。身代わりはあくまで身代わりであり、彼らが行う消費は「決してめだつほど身代わりの消費者自身の快適さに役立ってはならない」からである。<sup>47)</sup> コルセットでぎちぎちに締め上げられた上から豪華な夜会服を着せられた女性や、身体の動きを著しく制限する豪華な法衣を着せられた聖職者（「聖職者の祭服は高価で装飾的で、しかも不自由inconvenientである」<sup>48)</sup>）などがその典型だが、高級ペットフードや高度な医療サービスを楽しむペットたちがこのような苦痛を味わっているとは思えない。

とはいえ、わたしたちは『有閑階級の理論』より120年近く後の時代にいる。現代の、特に先進産業国では、清々しいまでに実用とかけ離れた側面でペットに金をかける飼い主たちも決して少なくない。たとえばまだ残暑の厳しい時期に、自前の毛皮の上からどう見ても必要とは思えない衣服を重ね着させられている近所の犬や猫をみるたびに、あれは本人（ひとではないが）たちにとってさぞかし苦痛なのではないかと思ってしまう。

犬猫に話が戻ったついでに、ヴェブレンが『有閑階級の理論』のあちこちで行っているトリヴィアの考察の中から、一つを紹介して稿を終えることにしたい。『有閑階級の理論』第6章では「産業的な用途に役立たない飼育動物」つまりペットの代表格として犬と猫を挙げ、どちらが他人に見せびらかすために好都合かという、非常にどうでもいい問題を大真面目に論じている。<sup>49)</sup> 結論から言うと、彼は猫ではなく犬に軍配を上げる。犬がいいというより猫がダメだという主張に力点が置かれているのだが、ダメな理由が大変面白い。



「猫は、あまり浪費的でないがゆえに犬や駿馬よりも名声の点で劣るし、場合によっては有用な目的に役立つことさえある。同時にまた、猫の気性は名誉を与えるという目的には不向きなところがある。猫は人間と同格のものとして生きるのであって、あらゆる価値、名誉および名声に関する区別の古代的な基礎である身分関係にまったく関知せず、結果的に、飼い主やその親しい人々との間で妬みを起こさせるような比較を行う、という用途にまったく役立たない」<sup>50)</sup>

圧縮された文章なので、丁寧に読み解く必要がある。もちろん品種にもよるが、一般に猫は犬や馬よりも少ないエサで済む。ということはエサ代がかさまないから「あまり浪費的でなく、したがって犬や馬と比べて、金のかかる生き物を道楽で飼っているというアピールに使いづらい。「名声の点で劣る」とは、どうやらそういう意味らしい。

おまけに猫は、ネズミやモグラといった身近な害獣を駆除してくれるから、「場合によっては有用な目的に役立つことさえある」。つまりこの点でも、金銭的余裕にまかせて道楽で飼われている無駄な動物とは言いづらいというのである。

さらにヴェブレンは、猫という動物の「気性」そのものがペット自慢には向いていないと言いたいようである。というのも、「猫は人間と同格のものとして生きる」つまり飼い主と自分を同格だと思っているので、そもそも飼い主を敬うようなそぶりを全く示さない。こうした猫と飼い主の関係は「身分関係」つまり飼い主を上位に置く上下の関係になっていないので、ペットとしての猫が、それを傍目に見ている「親しい人々」に「妬みを起こさせる」ことはない。要するに、猫など飼っていても誰にもうらやましがられないというのである。

これに対し、見せびらかすためのペットとしての犬の効能は大いに認められている。ただし、認め方が色々とひどい。<sup>51)</sup>

「犬は、役立たないという点だけでなく、特別に恵まれた気性の点でも〔ペットとしての〕利点をもっている。…この意味するところは、犬が人間の召使いであること、それに、絶対的に服従する能力や、俊敏に主人の機嫌を察知する能力をもち合わせていることである」

「犬は、飼育動物のうちで、それ自体として最も下品なものであり…主人に対する追従的でへつらうような態度や、主人以外の人についても危害や不安を与えることによって、つねに欠点を埋め合わせようとする」

犬が「役立たない」というのは、一見すると奇妙な理屈である。家を守る番犬や狩猟の供としての猟犬は、猫と比べてよほど役に立っているように思われる。しかしヴェブレン的に考えると、番犬などただ門前で吠えているだけで実際の戦力になっていないし、また猟犬については、そもそも狩猟そのものが（少なくとも近代の欧米社会においては）真剣な食糧獲得活動とは縁の切れた遊戯となり果てている。<sup>52)</sup> このような遊戯化した狩猟は、ヴェブレンによれば確かに「賞賛に値する仕事であり、尊敬に値する略奪衝動の表出」だが、<sup>53)</sup> もはや食肉を得るための肉体労働ではなく、むしろ有閑階級がひま（と不毛な闘争心）を見せびらかすために行う無用の営みである。したがって、狩猟という無用なことに役立つよう交配を繰り返された猟犬という存在は、裏を返せば、無用でないことには役立っていないのである。

これに加えて、犬の「気性」は「追従的」であり、いつも飼い主の機嫌を目ざとくうかがってはこれに「絶対的に服従」しようとする。つまり猫と違って、犬は飼い主を常に自分の上位者＝

主人として立ててくれるし、主人に対して時には卑屈なまでに「へつらう」。しかも「主人以外の人」にはいつでも吠えかかって「危害や不安を与える」ことで主人の留飲を下げてくれるから、普段の振舞いが多少卑屈で「下品」でも、その「欠点」は「埋め合わ」されるといふ。

まとめると、犬は

1. 少なくとも猫と同程度か、悪くするとそれ以上に実用上の役に立たない
2. 猫と違い、卑屈なまでに飼い主への従属的態度（と、飼い主でないものへの攻撃的態度）を示す

というこの2点において、周囲に見せびらかすためのペットとして猫よりも適しているというのである。こういう見地からペットとしてのあり方を肯定されることが、犬にとって名誉なことかは疑わしい。

ヴェブレンの文章は明らかに、犬に対する冷淡な軽蔑と、猫に対する屈折した愛情にあふれている。誰がどう見ても、生涯のある一時期、身近なところに猫がいた経験のある人の文章である。それでは、ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたのだろうか。飼っていたとしたら、それは彼の生涯のいつ頃のことだろうか。

結論から言うと、残念なことに、まるで分からない。ヴェブレンにまつわる伝記的事柄を調べようとすれば、ドーフマンの浩瀚な評伝（[Dorfman: 1934]）を参照することが欠かせないが、ヴェブレンの生涯を彩るさまざまな人間関係については膨大な情報を与えてくれるこの古典的評伝も、ヴェブレンと人間でないものとの関係についてはほぼまったく触れることがない。<sup>54)</sup> また、1950年代にヴェブレンの娘アンと個人的に親交のあった宇沢弘文は、<sup>55)</sup> ヴェブレンに関する伝記的情報について独自のソースを有していたはずだが、この人もまた、ヴェブレン家のペット事情については何も書き残していない。

そういうわけでごく常識的な推測になってしまうが、ヴェブレンが生まれ育った北米大陸の開拓農村で、猫が飼われていなかったはずがない。収穫した穀物等を貯蔵するにあたり、収穫物を狙うネズミ等の小動物が出現することはほぼ必然である以上、そうした小動物を狩ってくれる猫の存在もまた必要不可欠であったと思われるからである。家庭ごとに飼うにせよ、村で共有するにせよ、幼少期のヴェブレンは開拓村のあちこちを闊歩する猫の姿を見ていたに違いないし、そうした猫たちが「有用な目的に役立つ」瞬間もやはり一度ならず目撃していたことだろう。猫は自分の仕留めた獲物を、ひとの迷惑を一切顧みず、見せびらかしに来る動物だからである。

大学進学と同時に故郷を後にしたヴェブレンは、大学町から大学町へと意に沿わぬ放浪を繰り返したその後の人生のどこかで、自分をちっとも敬わない猫たちに癒される機会を再び得られたのだろうか。いずれ筆者よりも真面目な誰かが解明してくれることを祈りつつ、この実用上の役に立たない論考を終えることにしたい。

## 注

- 1) 本稿は去る2018年10月3日、2018年度第2回東京国際大学人文・社会学ファカルティセミナー（東京国際大学第1キャンパス）で発表された講演原稿「ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか——現代日本社会における『身代わりの消費』とその担い手たち」に、加筆修正を施したものである。
- 2) もっとも、2018年9月1日現在の高齢化率（全人口に占める65歳以上人口の割合）を川崎市ホームページ（<https://www.city.kawagoe.saitama.jp/>）上のデータに基づいて独自に計算してみたところ、霞ヶ関地区で特に高齢化が進んでいるという結果は得られなかった（市全体で26.26%、霞ヶ関地区で25.25%）。これは推測の域を出ないが、同地区にここ数年で爆発的に増えた留学生等の外国籍の住民が、統計上の高齢化率を一時的に押し下げていると思われる。

- 3) 一般社団法人ペットフード協会 (<http://www.petfood.or.jp/>) が行った平成29年(2017年)全国犬猫飼育実態調査によると、「犬全体の平均寿命は14.19歳, 猫全体の平均寿命は15.33歳」と報告されている。厳密な定点観測的調査になっていないため単純比較はできないものの, 2010年の類似の調査と比べても犬で0.29歳, 猫に至っては0.93歳と, 急速な上昇を続けているのが分かる。また正確なソースが不明なため全面的な信頼は置けないが, 同協会の会長談話の中に「昭和58年 [= 1983年]の独自調査では, 犬の平均寿命は7.5歳」という発言が見られる。仮に本当だとすると, 犬に関してはここ30年余りで倍近くまで寿命が延びたことになる。
- 4) 前注で参照した2017年の統計によると, 犬に関する支出総額が飼育世帯平均で医療費等含めて月額10,818円, 猫の場合7,475円とされている。
- 5) [Taka: 1998] p. 456.
- 6) 以下, 本稿独自の訳語として, それぞれ「見せびらかしの消費 conspicuous consumption」「身代わりの消費 vicarious consumption」を用いることにする。前者はいくつかある『有閑階級の理論』の邦訳では訳語が定まらず, 「顕示的消費(高哲男)」「誇示的消費(宇沢弘文)」「衒示的消費(小原敬士)」などさまざまに訳出されているが, conspicuousの語源となったラテン語 conspicioの原義「みんなで眺める→(受動相) みんなから眺められる」を生かし, 「見せびらかしの消費」とした。これに対し, 後者の邦訳語はおおむね「代行的消費」で一致しているが, 「見せびらかしの消費」と語感をそろえるため「身代わりの消費」とした。
- 7) ただしこの「進化Evolution」という語は1902年5月の増刷分から削除され, 以後の版では単に「さまざまな制度の経済学的研究」となっている。ヴェブレン(高哲男訳)『有閑階級の理論 増補新訂版』講談社学術文庫, 2015年, p. 6を参照。
- 8) [Veblen: 1899] p. 1. (邦訳p. 11)
- 9) この「制度」という言い回しについては, 第4節で改めて取り上げる。
- 10) [Veblen: 1899] p. 38. (邦訳p. 51-52)
- 11) もちろん, 肥満が経済的余裕を見せびらかす表徴たりうるかどうかは, 時代や地域条件に左右される。たとえば, 生活に余裕のない人ほどジャンクフードその他の高カロリー食であつという間に肥満してしまう21世紀の先進産業社会であれば, 逆にカロリー控え目の高級食材を日々摂取し, 高級フィットネスクラブで定期的にカロリー消費に励んで痩身を保つといった生活スタイルこそ「余裕」の象徴になるはずである。
- 12) [Veblen: 1899] p. 75. (邦訳p. 89, ただし訳文を一部変更)
- 13) *Ibid.* (ただし訳文を一部変更)
- 14) *Ibid.* p. 74. (邦訳p. 88)
- 15) *Ibid.* p. 75ff. (邦訳p. 89-90)
- 16) *Ibid.* p. 59ff. (邦訳p. 73ff.)
- 17) *Ibid.* p. 71. (邦訳p. 85ff.)
- 18) *Ibid.* p. 71ff. (邦訳p. 86ff.)
- 19) *Ibid.* p. 119ff. (邦訳p. 136ff.)
- 20) *Ibid.* p. 112ff. (邦訳p. 129ff.)
- 21) 以下, 伝記的事項は特別な断りのない限り [Dorfman: 1934] による。
- 22) ドーフマンを始めとする伝記作者たちは一致して, スペンサー(後述)の北米への紹介者として知られており, 当時イェール大学で教えていたサムナー(William Graham Sumner: 1840-1910)の影響を指摘している。この指摘はきわめて妥当なものではあるのだが, そこで話は終わらない。スペンサー思想の受容も解釈も, 決して一枚岩ではなかったからである。
- 23) 進化論理解の本質にはまったく関わりのないことだが, 邦訳名を『種の起原』(岩波文庫版ほか)とするか『種の起源』(光文社古典新訳文庫版ほか)とするかをめぐり, 翻訳史的に厄介な論争が持ち上がっている。詳細は [Setoguchi / Kijima: 2012] を参照。本稿では, 少しややこしくなるが, 邦訳の参照基準としては原書初版から第6版までの異同が分かりやすい岩波文庫版(つまり『種の起原』)を採用し, 表記としては日常語としてより馴染みのある「種の起源」を採用する。
- 24) たとえば [Illies: 2006] S. 91-93を参照。ただし, これはあくまで後付け的な指摘でしかなく, ダーウィ

- ン自身は自説のこうした難点を特に意識していなかったし、そもそも意識する必要がなかったと思われる。上記の観点からダーウィンの進化論の見直しが図られるようになったのは、ダーウィンの没後、彼が生前見落としていたメンデル (Gregor Mendel: 1822-1884) の業績が3人の生物学者によって再確認され (1900)、さらにそのうちの一人ド・フリース (Hugo Marie de Vries: 1848-1935) によって、突然変異という現象が初めて生物学的な報告・検討の対象として取り上げられてからのことだからである (1901)。
- 25) ヴェブレンの名誉のために付け加えておくと、実は後年のヴェブレンは20世紀遺伝学の成果を自説に取り入れようと努めており、たとえば上述の突然変異のような現象についても、1901年のド・フリースの報告から程ない時期に熱心に調べていた形跡が指摘されている ([Hodgson: 1993] 邦訳p. 189)。こうした作業によってヴェブレンの思考のスタイルが多少なりとも変化した可能性は大いにあるが、筆者は現時点では『有閑階級の理論』後のヴェブレンの著作について網羅的に語れる状態にないため、断言は避けておく。ただし、少なくともはっきり言えるのは、1899年刊行の (つまり必然的に19世紀の「突然変異なき進化論」に依拠せざるをえなかった) 『有閑階級の理論』という著作に、(その機会は十分あったにもかかわらず) ヴェブレンが後年大きな修正を加えることは遂になかったということである。仮に後年のヴェブレンの進化論理解が、19世紀の進化論から20世紀の進化論理解に「進化」していたとすると、1902年5月増刷分の『有閑階級の理論』で副題から「進化」の一語が削られたことにも (第1節注7参照)、実は大きな意味が隠されているのかもしれない。
- 26) ただし近年、スペンサーが「社会進化」の指標として政治的自由だけでなく経済活動の自由の認知・浸透度を重視していたことに着目し、彼を現代北米の法・政治哲学に隠然たる影響力をもつリバタリアニズムLibertarianismの遠祖として再評価しようとする動きが確認されている。詳細は [Morimura: 2017] を参照。
- 27) 『種の起原』岩波文庫版邦訳、上巻p. 445を参照。
- 28) そもそもスペンサーの社会思想は『種の起原』刊行以前からほぼ固まっており、刊行前 ([Yasugi: 1994] p. 207-215) と刊行後 (*Ibid.* p. 221-249) の論考を読み比べてみても、細かな用語が「ダーウィン寄り」に変更されていることを除けば、本質的な点で主張が変化した痕跡は確認できない。
- 29) 20世紀倫理学史にいわゆる「メタ倫理学」の開祖として足跡を残したムーア (George Edward Moore: 1873-1958) は、彼を一躍有名にした「自然主義の誤りnaturalistic fallacy」を犯している典型的思想家の一人として、当時名声を博していたスペンサーを槍玉にあげている ([Illies: 2006] S. 182ff. および [Yoshida: 2008] p. 381ff. を参照)。自然主義の誤りとは、自分があらかじめ有している価値基準に無自覚なあまり、価値中立的・記述的な事実から「自然に」つまり「科学的に」規範的価値を導出できたと錯覚してしまう誤りのことである。
- 30) [Lamarck: 1809] 邦訳p. 141-142を参照。ちなみにラマルクの原文では、キリンは進化の過程で首と前脚が長く伸びたと論じられている。高いところの葉を食べるには、首をのばすだけでなく、始終前脚で背伸びをしている必要があったからだという。
- 31) 獲得形質の遺伝は今日に至るまで立証されていない。
- 32) [Yoshikawa: 2014] p. 169参照。なお、ヴェブレンの進化論理解が具体的にどの程度「ラマルク・スペンサー路線」に即したもののかについては、論者たちの間でも見解が分かれている。たとえば次節(4-2)で取り上げる國分功一郎 ([Kokubun: 2011]) は、『有閑階級の理論』の理論構成の中に、かなり強固な目的論的偏向を読みとろうとする。筆者はこれに対し、同じく次節で示すような解釈に徹するなら、ヴェブレンの「進化論」がもつ目的論的な臭みは最小限に抑えられるのではないかと考えている。
- 33) [Taka: 1998] p. 458.
- 34) [Veblen: 1899] p. 244. (邦訳p. 268-269)
- 35) *Ibid.* p. 190. (邦訳p. 214)
- 36) *Ibid.* p. 191. (邦訳p. 215)
- 37) *Ibid.* p. 190. (邦訳p. 214)
- 38) *Ibid.* p. 189. (邦訳p. 213)
- 39) ビーバーがダムを造って川をせき止めたりするのは自然環境の選択的改変ではないのか、という反論もあるかもしれないが、そもそも生物個体のもつ形質というのは本能的に決まった行動型まで「込み」で



理解される必要がある。ビーバーの場合、「川岸近くの目についた樹木を片端からかじり倒して巣をつくる」という形質は、所与として固定されている。したがって、たとえ川岸の樹木が何らかの事情で減少しても、ビーバーは木をかじって倒すことを止めないし、そもそも止められない。可変的な制度＝思考習慣に基づいて環境を改変することも (ex. 木が減ってきたから川岸に植樹して増やそう!), 環境の変化に応じて制度＝思考習慣を変化させることも (ex. 木が減ってきたから、これからは巣の材料を樹木以外のものでも済ませるようにしよう!), ビーバーにはできないのである。

- 40) *Ibid.* p. 93. (邦訳p. 108)
- 41) *Ibid.* (邦訳p. 109)
- 42) *Ibid.* (邦訳p. 108, 下線部強調吉田)
- 43) 古典的な研究としては、たとえば [Ohara: 1965] がこうした解釈を自覚的に前面に出し (p.53ff.), その後のヴェブレンの著作も「二元論」で読み解こうとしている。
- 44) cf. [Kokubun: 2011] p.107-109. なお、以下で検討する製作者本能捏造疑惑説は、元々アドルノ (Theodor W. Adorno: 1903-1969) のヴェブレン批判の中に登場した論点の一つを、國分が独自に展開したものである (cf. [Adorno: 2003] S. 89ff. (邦訳p. 124)). ナチスの台頭により心ならずも渡米を余儀なくされたアドルノが、高度に発達したアメリカの産業資本主義社会に対する嫌悪を隠そうとしなかったことは有名なが (cf. [Scheible: 1989] S. 94-103), 似たような嫌悪を共有していたヴェブレンに対しては「文化の弁証法的両義性を理解していない」という理由で近親憎悪的な攻撃に終始している。
- 45) 後年のヴェブレンには、そのものずばり『製作者本能、およびさまざまな産業技術の現状 The Instinct of Workmanship, and the State of Industrial Arts』(New York, 1914) という論集もあるが、未検討のため言及は控えることとする。ただしこの論集も「人間本来の基本的性向としての製作者気質の本能 [= 製作者本能] が、近代産業社会の中で歪められ…逆に極めて反人間的な帰結をもたらしていること」を強調していると言われるため ([Uzawa: 2000] p. 102), これがもし正しいとすると、筆者が本節で提示する「製作者本能の一元論」という解釈を裏づけてくれるものと思われる。
- 46) [Veblen: 1904] p. 41ff. (邦訳p. 35ff.)
- 47) [Veblen: 1899] p. 120-121. (邦訳p. 138, ただし訳文を一部変更)
- 48) *Ibid.* p. 121. (邦訳p. 139)
- 49) *Ibid.* p. 140ff. (邦訳p. 159ff.) なお、ヴェブレンは正確には犬と猫と馬を比較しているのだが、馬については紙幅の都合上割愛する。
- 50) *Ibid.* p. 140-141. (邦訳p. 159-160)
- 51) *Ibid.* p. 141. (邦訳p. 160)
- 52) *Ibid.* p. 40-41. (邦訳p. 52-53)
- 53) *Ibid.* p. 141. (邦訳p. 161)
- 54) そもそも、索引に猫 cat という項目が存在しない (ちなみに犬 dog も存在しない)。
- 55) cf. [Uzawa: 2000] p. 2-6.

## 引用・参考文献

- Adorno, Theodor W.: *Veblens Angriff auf die Kultur*. In: *Theodor W. Adorno. Gesammelte Schriften. Bd.10.I*. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 2003. S. 72-96. [Adorno: 2003]  
 (アドルノ「ヴェブレンの文化攻撃」『プリズメン』ちくま学芸文庫, 1996年, p. 99-135)
- Darwin, Charles: *The Origin of Species by Means of Natural Selection or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*. London (John Murray), 1872 (6.ed.). [Darwin: 1872]  
 (ダーウィン『種の起原』岩波文庫, 全2巻, 1990年)
- Dorfman, Joseph: *Thorstein Veblen and His America*. New York (The Viking Press), 1934. [Dorfman: 1934]  
 (ドーフマン『ヴェブレン: その人と時代』ホルト・サウンダース・ジャパン, 1985年)
- Hodgson, Geoffrey M.: *Economics and Evolution. Bringing Life Back into Economics*. Oxford (Blackwell), 1993. [Hodgson: 1993]  
 (ホジソン『進化と経済学』東洋経済新報社, 2003年)

- Illies, Christian: *Philosophische Anthropologie im biologischen Zeitalter. Zur Konvergenz von Moral und Natur*. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 2006. [Illies: 2006]
- 國分功一郎『暇と退屈の倫理学』朝日出版社, 2011年. [Kokubun: 2011]
- Lamarck, Jean-Baptiste: *Philosophie Zoologique*. Paris, 1809. [Lamarck: 1809]  
(ラマルク『動物哲学』朝日出版社, 1988年)
- 森村 進「訳者解説 なぜ今スペンサーを読むのか」森村 進(編訳)『ハーバート・スペンサーコレクション』ちくま学芸文庫, 2017年, p. 427-459. [Morimura: 2017]
- 小原敬士『ヴェブレン』勁草書房, 1965年. [Ohara: 1965]
- Scheible, Hartmut: *Theodor W. Adorno*. Reinbek (Rowohlt), 1989. [Scheible: 1989]
- 瀬戸口烈司, 木島泰三「『種の起原』か, 『種の起源』か——On the Origin of Speciesの日本語タイトル」『深田地質研究所年報』第13号(2012年), p. 1-11. [Setoguchi / Kijima: 2012]
- 高 哲男「訳者解説」ヴェブレン(高 哲男訳)『有閑階級の理論』ちくま学芸文庫, 1998年, p. 435-460. [Taka: 1998]
- 宇沢弘文『ヴェブレン』岩波書店, 2000年. [Uzawa: 2000]
- Veblen, Thorstein: *The Theory of the Leisure Class. An Economic Study in the Evolution of Institutions*. New York (Macmillan), 1899. [Veblen: 1899]  
(ヴェブレン『有閑階級の理論』ちくま学芸文庫, 1998年)
- Veblen, Thorstein: *The Theory of Business Enterprise*. New York (Charles Scribner's Sons), 1904. [Veblen: 1904]  
(ヴェブレン『企業の理論』勁草書房, 1965年)
- 八杉龍一(編訳)『ダーウィニズム論集』岩波文庫, 1994年. [Yasugi: 1994]
- 吉田量彦「理性の倫理は生き残れるか」慶應義塾大学日吉紀要『人文科学』第23号(2008年), p. 379-386. [Yoshida: 2008]
- 吉川浩満『理不尽な進化 遺伝子と運のあいだ』朝日出版社, 2014年. [Yoshikawa: 2014]

研究ノート

## 18-19 世紀のポーランド・ユダヤ人における アイデンティティの分裂 (1)

川 名 隆 史

### **The Split of Jewish Identity in 18-19th Century Poland (1)**

KAWANA, Takashi

#### Abstract

The split of identity in Polish Jewry began in the second half of the 18th century. Jewish people in the Polish-Lithuanian state, boasting the largest Jewish population in the world, enjoyed wide-ranging autonomy. But their political and economic status decayed along with the decline of the Polish state in the 18th century. Simultaneously, mystical-religious movements such as Frankism or Hasidism appeared and spread all over Poland. These new movements shook the order of the Jewish communities controlled by traditional, orthodox authorities, and cracked the national-religious identity of Polish Jewry.

This paper is an attempt to describe the process of this identity-splitting in the second half of 18th century Poland from the viewpoints of its ideology and movement. Afterwards, in the 19th century, a new sect of reformatory Judaism came into being under the influence of the Jewish enlightenment movement “Haskalah.” This new third trend of Judaism will be discussed in future editions of this journal.

*Keywords:* ポーランド, ユダヤ人, アイデンティティ, フランキズム, ハシディズム

## 目 次

- はじめに
- I. 神秘主義の広がりとはサバタイ・ツヴィの運動
  - II. ポーランド国家のユダヤ人社会
  - III. ポーランド国家における神秘主義的運動の展開
  - IV. フランキズムまたはサバタイズムの再現
  - V. ハシディズムの出現：ポーランド国家のユダヤ人社会の変貌
- おわりに

## はじめに

厳密な意味で「ユダヤ人とは何か」という議論はさておいて、現代アメリカ社会におけるユダヤ人社会は、おおよそ保守派 (nurt konserwatywny)、改革派 (nurt reformowany)、正統派 (nurt ortodoksyjny)、ハシディズム諸派 (grupy chasydzkie)、超正統派 (haredim, ultra-ortodoksja) など、様々な集団、流派に分かれている。それぞれの流派は、それぞれの発生の経緯、歴史、伝統に基づく独自の政治意識を有しており、それがイスラエル社会にも反映し、世界のユダヤ人社会内部に縦横の亀裂を生んでもいる。

ここではひとまずアメリカを例に挙げたが、ユダヤ人社会が内部対立を起こしつつ、これほど多様化したことの原点を探て行くと、18世紀のポーランド王国・リトアニア大公国連合国家<sup>1)</sup> およびドイツ地域のユダヤ人社会に辿り着くことになる。<sup>2)</sup> 近世ヨーロッパのユダヤ人社会は、15世紀末のイベリア半島のレコンキスタによるセファラディーム系ユダヤ人の拡散、16-17世紀のポーランド・リトアニア連合国家でのユダヤ人社会の繁栄、17世紀のサバタイ・ツヴィ (Sabataj Cwi) のメシア主義運動、18世紀からの啓蒙主義思想の影響などの要因が様々に関係し合って近代へと進んで行った。この過程の中で、現代の状況に直接影響を与えた思想的要因を探るならば、ひとつはメシア到来への期待を生むことになったユダヤ神秘主義と呼ばれる思想、もうひとつが近代化へと進歩しつつあったヨーロッパ社会の中で、それに適応して将来のユダヤ人社会のありかたを展望したユダヤ啓蒙いわゆるハスカーラー (haskala) の思想を挙げることができる。前者は主に、18世紀末の「ポーランド分割」以前のポーランド国家において発展し、最終的にはハシディズムの運動となってそれまでの支配的なユダイズムの制度を揺るがした。後者のユダヤ啓蒙の思想は、ドイツ地域で生まれ、やがて改革派の名で西ヨーロッパ地域、アメリカへと広がりを見せた。

本稿は、冒頭に挙げたユダヤ人社会の多様化の原点として挙げられる、このふたつの思想潮流を柱として、その発生、広がり、経緯を歴史的に跡付けることを目的とする。今回はそのうちの前半部分すなわち神秘主義的な傾向について論じる。<sup>3)</sup> ユダヤ人社会は、19世紀末に至るとシオニズムや社会主義といった新たな状況に対応した新たな思想に直面して、更に複雑な展開を遂げて行く。しかし本稿では、それらが本格的に展開を始める以前の、18世紀から19世紀中葉という時期に限定して考察を進め、それ以後の問題については、今後の課題としておく。



## 1. 神秘主義の広がり と サバタイ・ツヴィの運動

ユダヤ神秘主義の代名詞ともいえるカバラ（kabala）の研究は、12世紀のドイツ地域で隆盛を迎え、その後研究の中心がイベリア半島に移る。15世紀末のレコンキスタに伴い、追放されたセファラディーム系ユダヤ人が東西ヨーロッパ、中東地域へと広く拡散し、それに連動してカバラ研究も、秘教的な性格を脱してその内容が広範に知れ渡ることになった。やがてガリラヤ地方が研究の新たな中心地となり、16世紀にルーリア（Luria Icchak ben Szlomo）によって、メシア主義的色彩の強い新たな教えとして体系化された。このルーリアのカバラが、オスマン帝国の中東地域からポーランド国家南東部にかけて広まり、その影響下に様々なメシア主義運動を生むこととなった。

この後、オスマン帝国領内はじめ各地のユダヤ人社会の中に、メシアを自称する様々な人間が現われ消えて行ったが、そのうちでも歴史上重要な位置を占め、その後の時代に大きな影響を残したのが、サバタイ・ツヴィである。1626年に現在のトルコのスマルナ（現イズミル）に生まれたツヴィは、ルーリアのカバラに心酔し、パレスティナ、エジプトで活動した後、1665年には預言者を自称していたガザのナタン（Natan z Gazy; Abraham Natan ben Elisza Chaim Aszkenazi）によってメシアであると宣伝され、本人もそう自覚した。ツヴィは拠点であったイェルサレムの共同体からは追放されたが、故郷のスマルナでは多くの支持者を得た。ツヴィは支持者とともにオスマン帝国の帝位を奪おうとイスタンブルに向かうが、イスタンブル上陸と同時に拘束された。ツヴィのメシア宣言は、ヨーロッパのユダヤ人社会に「東方にメシア現る」として知れ渡ったが、同時にツヴィが本当のメシアであるかという教義上の問題も生じた。このためポーランド国家のユダヤ人の全国組織である「四国会議」<sup>4)</sup>から代表が送られ、ツヴィとの問答を通じてツヴィのメシアとして正当性が検討された。代表はツヴィをメシアとは認めず、それをオスマン帝国政府に報告した。その結果、ツヴィは処刑か、イスラムへの改宗かの選択を迫られた。ツヴィは1666年9月にイスラムに改宗し、アジズ・メフメット・エッフエンディ（Asis Mehmed Effendi）と名乗った。だが改宗後もツヴィはユダヤ人共同体との関係を維持していたため、改宗の真意に疑いがかけられ、1672年に逮捕されてアルバニア方面に追放され、数年後に死去した。<sup>5)</sup>

一見すると狂信的な宗教指導者が、政治的圧迫に屈して変節し改宗してしまうという、不名誉な歴史のエピソードと捉えられるような出来事ではある。しかしサバタイ・ツヴィの思想、行動を後世の歴史の展開のコンテキストの中で捉え返すと、ある別の顔が浮かび上がってくる。後述するフランキズム（frankizm）にも共通する問題であるが、「改宗」というものの意味が、ここでは強制される受動的なものではなく、むしろ救済に向かって積極的に行なうべきものとして設定されている。それはメシアによる救済を、トーラーに基づく伝統的なユダイズムの枠内で構想し待望するのではなく、その枠を脱し、より広範な宗教世界、具体的には同じ旧約聖書に基づくイスラムの中にもその可能性を見る志向である。イスラムへの改宗はイスラムへの帰依ではなく、それまでのユダイズムの狭隘さを克服して、メシア信仰のより高い位置に達するための秘儀であり、サバタイ・ツヴィはそれを改宗者にのみ伝えたとも言われている。その秘儀の内容、カバラ神秘主義におけるその秘儀の位置づけについてまで、ここでは言及出来ないが、この秘儀が様々な形でポーランド国家の、特に南東部に伝えられ、18世紀のユダヤ人社会に変動をもたらすことになったことは確かである。

## II. ポーランド国家のユダヤ人社会

西部地域を除く現在のポーランド、および現在のウクライナ西部、ベラルーシ、リトアニアを含むかつてのポーランド国家の領域に、ユダヤ人は遅くとも12世紀には姿を現している。13世紀から14世紀にかけて、ポーランド国家が拡大するにつれてその居住領域は広がり、1264年のカリシュ特権<sup>6)</sup>を皮切りに、様々な特権に依拠して、その地位を固めていった。ユダヤ人社会にとって大きな転機となったのは、リトアニア大公国と合体して広大な国家領域を持つに到ったポーランド国家において、ユダヤ人は人頭税徴収を自主的に遂行する業務を請け負ったのを皮切りに、独自の裁判権を始め、様々な領域で自治的権能を強化し、歴史叙述においてユダヤ人自治と称された、他に類をみない広範な自治体制を作り上げたことである。人頭税徴収の調整機関として設置された全国組織四国会議Waadは、個々の共同体の代表から成る4つの広域的な議会の代表から成り、ユダヤ人の国会のような様相を呈した。そしてその国会で選ばれて設置される常設の執行機関は、あたかもユダヤ人の政府として、ポーランド国家の政府と密接に関係した。

この自治体制を制度的に運営していたのは、ディアスポラのユダヤ人社会に一般的に見られる、ラビンおよび有力な長老からなる指導機関であった。歴史的には長老会 (seniorat) が、トーラー、タルムードに関する知識に長け、人望に優れた師ラフ (rav) に拠り、その支援を得ながら共同体を運営していたが、やがてラフは共同体に雇われる有給の役人ラビン (rabin)<sup>7)</sup> となり、共同体の宗教、行政全般の指導者として権威と権力を強めて行った。このようなユダヤ人社会のあり方は、通常 (定訳はないが) 「ラビ主義ユダイズム」 (Rabbinisches Judentum, judaizm rabiniczny, rabbinic judaism etc.) と表現され、18世紀まではディアスポラのユダヤ人社会の大半がこの体制のもとにあった。その後に出現した様々な流派、潮流と区別される中で、この制度の中のユダヤ人は「正統派」 (ortodoksja)<sup>8)</sup> という名称で一般的に表現されることになる。

18世紀中葉以後、ポーランド国家のユダヤ人社会では、この伝統的な正統派による支配の正当性を揺るがすような大きなうねりが発生した。国際関係の悪化に伴い、ポーランド国家が17世紀から徐々に衰退し始めたのと連動するように、ユダヤ人社会でも同様に自治体制にほころびが見えてきた。この変化の要因のひとつは、国家による対ユダヤ人政策の変化である。ポーランド国家は衰退の一因でもある国家財政の悪化から、ユダヤ人への人頭税の増収を計ろうとし、これまでユダヤ人社会に一任していた徴税システムに介入してきた。ユダヤ人自治の根幹である制度に、国家が切り込んで来たことになる。国家の狙いは国制改革の一環としてユダヤ人からの税収増にあったが、その政策はそれを超えて、ユダヤ人に限らず国内にいるあらゆる民族的少数派を改革し近代化する、すなわちかれらを国家の中でどのように位置づけるかという問題に直面する。ポーランド人のいわゆる「国民国家」に、内部の民族的少数派をいかに取り込むか、言い換えればかれらをいかにして「国民」にするかという問題が生じていたのである。特権の下で伝統的に支配的地位を確保していた、いわゆる正統派の指導者層は、国家の政策の変化を十分に理解できず、有効な対応策を見出せなかった。かれらはむしろ近代化しようとしているポーランド国家の中で、旧来の特権を維持しようとする道を探ろうとした。

しかしこの正統派指導層の支配的地位は、ユダヤ人社会内部に生じた要因によって脅かされていた。16-17世紀には、潤沢な資金で金融業や様々な請負業 (arendă) を営み繁栄していたユダヤ人社会には、有力なキリスト教徒の側 (貴族、教会、修道院など) からも投資がなされていた。しかし継続する戦争や国内の混乱などのため、また正統派指導層の専横で有害な財政運営のため、

徐々にユダヤ人共同体の財政が悪化した。人頭税の滞納、債務の増加などによって破産状態に陥ったため、指導層はそれを貧しい層への課税強化によって乗り切ろうとしたが手遅れであった。ユダヤ人社会内部で裕福な指導層と貧困化する一般住民との間の亀裂は深まり、一般住民の指導層への不信感は増した。人頭税徴収が国家の側に掌握されたことで四国会議を頂点とするユダヤ人自治は1764年に解体されたが、宗教的権威に基づき正統派が指導層を形成する、ユダヤ人社会内部の階層構造は温存されたままであった。

### III. ポーランド国家における神秘主義的運動の展開

このような変動期にあった、18世紀中葉のポーランド国家のユダヤ人社会の中で、神秘主義的要素を帯びたふたつの運動が発生し、やがて国内のユダヤ人社会を事実上分裂させる事態に到らしめた。17世紀半ばにウクライナ地方で発生したフミェルニツキ率いるコサックの対ポーランド反乱は、ユダヤ人にも攻撃を加えた。ウクライナ地方のユダヤ人の多くが殺され、あるいは逃亡を余儀なくされた。この知らせはポーランド国家を越えてヨーロッパ全域、更にその他の世界にも伝わり、ユダヤ人に強い厭世の気分、またメシアの到来による救済への願望の気運が生じた。まさにそのような時期にサバタイ・ツヴィが現れたため、かれの行動はより一層の現実味を持って、多くのユダヤ人に受け入れられたのである。

サバタイ・ツヴィはイスラムへの改宗後、数年して死去したが、かれの思想はサバタイズムとして生き残った。サバタイ・ツヴィの死後、支持者サバタイストは、おおよそ2派に分かれた。穏健派は救済がユダイズムの中で満たされるのを待望し、現実においては伝統的な正統派の体制の中に落ち着いた。一方、急進派はメシアとしてサバタイ・ツヴィを信奉し、ユダイズムを捨てることでその秘儀に預かることが出来ると信じた。かれらは、「モーセの律法に基づく制度を、悪魔的な力でイスラエル（すなわちユダヤ人）に与えられたもの」と断じ、神の啓示は「旧約聖書に依拠するあらゆる宗教（すなわちイスラム、キリスト教にも）に隠されているとした」。こうしてかれらには改宗への垣根は取り払われ、ユダヤ教の可能な道としてイスラムやキリスト教への改宗の道が開かれたと言える。この思想、方針が純粋に理論的に編み出されたものか、あるいは正統派による支配に対抗する現実政治的な意図によるものなのかは定かではない。ただその影響を受け、支持者となった層に、現実政治的な思惑があったことは否めないであろう。

サバタイズムの思想は、フミェルニツキの反乱で壊滅的な被害を受け、閉塞感とメシア待望感に浸っていたポーランド国家の南東部、特にポドレ（Podole）地方のユダヤ人社会に少なからぬインパクトを与え、多くの支持者を獲得した。こうして形成された土壌の上に、新たな神秘主義的要素を備えた二つの運動が発生した。フランキズムとハシディズムである。

### IV. フランキズムまたはサバタイズムの再現

ポーランド国家の南東部ポドレ地方を中心に、所々でサバタイストが活動していた。かれらは巡回説教師として村や町を回って、時には拠点を築いて支持者を集めていた。中にはメシアを自称する者もいたが、すぐに偽メシアとして追放された。こうしてサバタイズムの新たな担い手（場合によってはメシア）が待ち望まれていた。そこに強烈な個性を持ったヤクブ・フランク（Jakub Lejbowicz Frank）という人物が、新たなメシアとして現れたのである。ポーランド国家南東部のポドレ地方は、オスマン帝国と国境を接し、17世紀には断続的にポーランド国家とオスマン帝国

の間で戦争が起きていた。オスマン帝国は一時的に戦争に勝ってポドレ地方を手に入れたとき、当地のユダヤ人をイスタンブルやエディルネに移住させた。アシュケナジームのポドレ地方出身のユダヤ人は、オスマン帝国でセファラディーム・ユダヤ人と接触し、かれらの間に広まっていたカバラー研究に触れ、一定の影響を受けた。戦況の変化でポドレ地方に帰還したユダヤ人は、セファラディーム文化の要素、特にカバラーの神秘主義を持ち帰った。ポーランド国家のユダヤ人社会が基本的にアシュケナジームから成り、正統派指導層による支配構造が一般的であったのに対し、南東部のポドレ地方は、このような事情からユダヤ人社会の性格も他の地域とは異なり、国家権力を後ろ盾とする正統派の支配もそれほど強力ではなく、気運としてカバラー神秘主義を受け入れるに適した土壌となっていた。

1726年にポドレ地方のコロルフカという村に生まれたヤクブ・フランクは、父がサバタイストとして訴えられたため、生後まもなくブコヴィナ、モルダヴィアを経てオスマン帝国領内に移った。成人してスミルナでカバラーを学び、当地のサバタイストの娘と結婚した後、サロニカに移って自身の学校を開いた。このようにフランクは一貫してサバタイズムの環境で育ち、サロニカ時代にすでに自身をメシアと自覚するようになっていたようである。それがポドレ地方にも伝わり、1755年にポドレ地方からサバタイ派の使者が現れメシアとしての伝導を促されて、12月にフランクはポーランド国家に移動した。年が明けて間もなく、ランツコルニという町で支持者と遭遇し、密儀の集会(=宴会)を開いた。ドアも窓も閉ざした部屋で集会を開き、全裸で歌い踊って陶酔状態に、そしてある種の性的放縦に到るという儀式であり、かれらはこれを宗教的熱情の条件としていた。だがこの集会が非倫理的だとされて、フランクは支持者ともども正統派により逮捕された。フランク自身は、オスマン帝国臣民ということでオスマン帝国へ追放された。フランクはその後まもなくイスラムに改宗し、オスマン帝国からポドレ地方と接するホチム地方に所領を得た。フランク自身は国外に逃れたが、かれの支持者は国内での活動を活発化させていた。

ランツコルニの事件を契機に、正統派指導層はサバタイストすなわちフランク支持者(フランクキスト)に対して行動を起こし、1756年6月13日にサタヌフのラビン法廷は、サバタイ・ツヴィを信奉するすべての者に破門(klatwa)を宣告した。ユダヤ人自治の中心機関である四国会議がこの裁定を有効と承認し、ポドレ地方全体のユダヤ人共同体に回状を發して、異端サバタイズムの信仰を抱く者をすべて投獄するよう求めた。ユダヤ人社会内のこの動きは、ポドレ地方の中心都市カミエニェツ・ポドルスキの司教デンボフスキ(Mikołaj Dembowski)の関心を引いた。ユダヤ人の正統派指導層は、サバタイストすなわちフランクキスト<sup>9)</sup>の思想、行状がユダヤ人社会にとってのみならず、キリスト教徒にとっても極めて有害であるため、キリスト教会自体が懲罰すべきであると訴えた。ユダヤ人がキリスト教会に訴えを出すことは異例である。一方のサバタイ派の側は、自分たちはタルムードに反対する者であり、古代以来の文献研究、カバラー研究を通じて独自に三位一体の教義に達したのであり、ユダヤ人正統派は、サバタイ派の教義がキリスト教の教義と似通っているが故にサバタイ派を弾圧しようとしているのだと主張した。教義上、サバタイ派とカトリック教会の間に、もはやほとんど違いは見出せない。司教側はユダヤ人の双方に、教会裁判所の場での公開問答で決着をつけるよう命じ、1757年7月にカミエニェツ・ポドルスキでサバタイ派の代表19名と正統派ラビン40名が参加して実施された。フランク自身は国外にいたため、この公開問答にどのように関わったかは不明である。

9月17日に教会裁判所の裁定が出された。サバタイ派の側が上記のような主張をする限り、サバタイ派に有利に決着することは目に見えていた。教会裁判所は、サバタイ派の主張を認めてタルムード文書の焼却を命じ、司教が出したサバタイ派への保護状を有効として、在地の支配者であ



る貴族に要請した。公開問答はサバタイ派の勝利に終わったが、後ろ盾のデンボフスキがその後まもなく死去したため、正統派によるサバタイ派への攻撃が再開された。苦境に立ったサバタイ派は、翌年夏、ルヴフの教会裁判所に、再度公開問答の開催を請願した。今度は自分たちは洗礼を受ける用意があるが、その前に再度正統派との間で、教義上の決着をつけたいという意向であった。1759年7月～9月に公開問答は実施されたが、今度は教会側は教義論争そのものにはほとんど関心を持たず、むしろサバタイ派の洗礼を進めることに意義を見ていた。裁判所は基本的にサバタイ派のほとんどの主張を正当と認めた。<sup>10)</sup> フランクは前年1758年の半ばに、ポーランド国王アウグスト三世から通行許可を得てポーランド国家領内に入っていたが、このルヴフの公開問答に直接関わった形跡はない。サバタイ派は予告された通り、続々とキリスト教へ改宗し、ルヴフ、ルブリン、ワルシャワで総勢3,000人が改宗したとされる。改宗したサバタイ派はポーランド国家の法に基づいて、貴族身分に迎えられた。フランク自身もルヴフで洗礼を受けて、洗礼名ユゼフを得た。そして続いて首都ワルシャワで二度目の洗礼を受けた。その時の名親は知事のプラトコフスキ、国王アウグスト三世の名代であった。この間のフランクとカトリック教会、そして国王つまりポーランド国家の間にもどのような関係があったか、そしてそれがどのような意味を持っていたのかを解くことはここでは出来ない。この時期のユダヤ人の問題が、かくも不可思議な現象を引き起こしていたことを指摘するに留めたい。

サバタイストおよびフランキスト、そして何よりもフランク自身が、ここから数奇の運命を辿った。フランクの不可解な行動は支持者からも不審の目で見られたようで、洗礼の数ヶ月後に密告によって逮捕された。ワルシャワの教会裁判でフランクは、チェンストホーヴァのヤスナ・ゲーラ修道院へ無期限の幽閉の判決を受けて、収容された。幽閉は13年間続くが、まさにその間にフランクは自らの救世主としての教義を完成させ、ヤスナ・ゲーラ修道院に安置されているマリア像 (obraz Matki Boskiej Częstochowskiej) に封じ込められている神の栄光を解放することが、メシアとしての自らの使命であるとした。ポーランド国家のシンボルとして信仰の対象となったヤスナ・ゲーラ修道院のマリア像<sup>11)</sup> に、このような意味を与えたことは、フランクの思想において、すでにユダヤ人の救済という使命を越えて、ポーランド国家つまり現世の救済という思考様式が出来上がってきていることが見て取れる。政治的には自らを未来のポーランド国王に擬したとも考えられる。これはフランクが後に支持者を軍隊的に組織し、軍事訓練を続けていたこととも符合する。

フランクは1773年に、当時ヤスナ・ゲーラ修道院を拠点としたバール連盟軍をロシア軍が駆逐したことで、13年ぶりに解放された。しかしロシア軍による解放は法的には無効で、ポーランド国家の国法においては無期限幽閉とした教会裁判の判決は有効であった。このためフランクはオーストリア皇帝マリア・テレジアの庇護を受けて、モラヴィアのブルノに移った。だがマリア・テレジアの死後、次の皇帝ヨーゼフ2世からは嫌われ、オーストリア領内からの退去を求められた。1786年にフランクは、フランクフルト (Frankfurt am Main) の近郊のオフエンバハ (Offenbach) へ移り、然る貴族から館を借り受け、新たな拠点とした。定住400名の支持者を抱えたフランクは、1791年に死去するまでこの地で軍事教練とカバラー研究に勤しんだという。教団は3人の子が引き継いだが、1800年と予定されたメシアの出現が起きず、借金がかさんで財政的に苦しくなるうちに徐々に支持者は去り、娘のエヴァが1816年に死去したことで、ほぼ教団は存在をやめた。

サバタイ・ツヴィと同様に、フランクの活動の経過は荒唐無稽といった印象である。しかしながら一見すると無節操に見える改宗の繰り返しや、ほとんどキリスト教と見まがうばかりの教義

などには、独特の解放観すなわち救済の可能性を示す指針が読み取れないでもない。サバタイ・ツヴィの運動がオスマン帝国領内に限定され、ポーランド国家にはその意義だけが伝えられたのに対し、フランクは実際に世界最大のユダヤ人集積地であるポーランド国家に姿を現わして強烈な印象を与えたことで、国内のユダヤ人社会のみならず、ポーランド国家およびカトリック教会の関心を引いた。すなわちユダヤ人社会とキリスト教社会の双方に、当時の時代に要請されていた歴史的課題の存在を浮かび上がらせたのではないかと推測できる。もちろんフランクが意識的にそれを示したわけではない。しかしユダヤ、イスラム、キリスト教の相違を越えて、いずれの立場においてもメシアの到来は可能とするような議論は、宗派の違いを超えた救済の道を提示したとも言える。<sup>12)</sup> 個々の世俗の宗教の狭隘性を越えて、大げさではあるが普遍的救済（すなわち人間の解放）へ向かう道筋を示したと言えようか。そこには宗教を相対化する啓蒙主義との近縁性を、またそれをユダヤ教的コンテクストに限定すれば、ほぼ同時代に生きてユダヤ啓蒙ハスカーラーの思想を展開させたモーゼス・メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn）との近縁性も見出すことが出来るかも知れない。<sup>13)</sup> フランクの名はオッフエンバハ時代、そしてその死後もドイツ地域の啓蒙主義的知識人の関心を引き続けた。<sup>14)</sup>

## V. ハシディズムの出現：ポーランド国家のユダヤ人社会の変貌

サバタイズムの影響が色濃く残り、それをフランクが増幅させたポーランド国家の南東部のポドレ地方で、18世紀半ばから、同じ神秘主義的傾向を持つが、メシア待望論とは一線を画す新たな運動が生まれ、急速に成長していた。ハシディズム（chasydyzm, Chassidismus, hasidism）である。サバタイズムやフランキズムは改宗を制度化し、それを救済の条件とすることで、実質上ユダイズムの彼岸に理想を構築した。それに対しハシディズムは、既存のユダイズムの制度は所与のものとして認め、その中に新たな教えの道を探ろうとした。すでに述べたように、ポーランド国家の南東部では、フミェルニツキの反乱のあった17世紀半ばから、カバラーに基づく神秘主義の思想が広まっていた。奇跡を起こすと称する者や、メシアを自称する者などが国中を徘徊し、程度の違いはあれ様々な神秘主義の言辞を振りまいていた。サバタイズムやフランキズムはそのような気運の中で、メシア主義的色彩の強い部分を刺激して、多くの支持者を得た。そのメシア主義は、単にメシア到来を待ち望むのではなく、カバラー研究を深め精神的禁欲の中でより高い次元の認識領域に到達しようとする、知的あるいは理論的な意志に基づいていた。したがってフランキズムに惹かれたのは、ユダヤ人社会の中の比較的知的で豊かな人たちであったと言える。これに対しハシディズムはむしろ、民衆の言葉で様々な教えを伝える遍歴する説教師のようなレベルでの教えとして、幅広い層に広まりを見せる。ハシディズムは、カバラーの様々な要素、テーゼを理論的ではなく、生活実践の中で実現しようとした。いわゆる理論的カバラーの高尚な意志の意義を、個人的あるいは共同体での生活の中に調和的に深化させようとしたと言えよう。ハシディズムでは、宗教的实践は礼拝と日常の生活行動において実行され、それは目的意識から導かれる緊張した意志ではなく、深い本質的存在に根差す感覚的生命の中に浮かび上がる意志から発した時に、意味と祝福を受けるものとされた。神は、苦悩や禁欲を経てではなく、賢明で喜ばしい生活の享受を通して賛美されるとされた。喜ばしき陶醉、狂喜の状態へと導くエクスタティックな礼拝こそが神との合体へ導くのであり、歌と踊りによる神の賛美、あるいは神秘的瞑想が特に重要な意味を持つ。ハシディズムは、発生後まもなく様々な集団に分化し、それぞれが指導者であるツァディク（cadyk）<sup>15)</sup>の下に結束し、独自の教団として発展して行った。当然、

その教えも指導者ツァディクの個性によってニュアンスを変えて行くが、基本的にはおおよそ上述のような要素を共通なものとしていた。

ハシディズム運動の発生のプロセスに関しては幾つかの説があるが、一般的にはその創始者としてバアル・シュム・トヴ (Izrael ben Eliezer Baal Szem Tow: 通称ベシュト BeSzT) の名が最も知られている。1700年頃にポドレ地方に生まれたベシュトは、当時ポドレ地方に蔓延していた様々な神秘主義的運動のうち、禁欲主義的傾向に対抗する、恍惚の陶醉を重視するグループの指導者として名をはせた。ベシュトのもとには信奉者が集まり、その思想はポドレ地方からポーランド国家の各地域へと広がった。ポーランドのハシディズムの思想と運動のすべてがベシュト個人に集約されるわけではないが、その権威は確かに確立されており、後にハシディズム運動が指導者の家系に分化して行く際に、ベシュトの子孫の家系の権威は維持された。

ハシディズムがポーランド国家の全域に拡大した1760～70年代は、ポーランド国家が存亡をかけて改革を進めつつも、1772年に第一次分割に直面した時代である。ポーランド国家のユダヤ人共同体自体も財政難から衰退過程にあった。ユダヤ教育機関イエシヴァも往時の権威を失い、タルムード教育の水準も低下し、有能なラビンはより良い条件を求めて西欧に流出した。正統派の権威を象徴するイエシヴァの衰退は、そのまま正統派指導層による支配の構造に影を落とす。さらに1764年に四国会議が解体されて、ユダヤ人自治の実質的な基礎が失われ、更には第一次分割によって国土のかなりの部分が、ポーランド国家から各分割国による統治へと移行した。各分割国の、新たに統治対象になったユダヤ人に対する政策はすぐには整わず、ほとんど旧来のままであったとはいえ、統治者の変更はある空白の時間を生んだと言える。ハシディズムにとっては、この状況は好都合と言えた。ユダヤ人が政治的に解放されない限り、ユダヤ人は統治者の下で許された法的枠組の中で生きるしかない。ひとつの町にはひとつの共同体、ひとつのシナゴーク、墓地が原則であり、ハシドが多数となっても、ハシド独自の共同体を作ることは許されない。当然、共同体の指導権をめぐる争いが激化する。ハシドは、それまで正統派が独占してきた長老会、ラビンのポストを要求するようになる。

サバタイズムやフランキズムと異なり、ハシディズムはタルムードの権威を否定しない。したがってタルムードに立脚する正統派の支配構造を否定することはなく、伝統的な共同体の中に正式の、同等のメンバーとしてハシドの位置を確保すればよいのである。ハシディズム指導者のツァディクがラビンのポストに就くかどうかは、あるいはラビンの地位に就かずとも、共同体内でツァディクと正統派のラビンという二つの権威が調和的に機能しうるかは、それぞれの共同体の事情によって左右される。

やがてツァディクはディナスティア (dynastia, Dynastie, hasidic dynasty) という名の宗家、一門を形成するようになる。ツァディクの地位は世襲となり、ツァディクの邸宅は信者の聖域となる。ユダヤ人共同体が国家によって管理されている間は、通常複数のシナゴークは持てないが、ハシドは多くのところで自前の礼拝施設 (自宅の場合もある) や学校を持つようになっていた。このようなハシディズムの拡大、強化に対し、正統派の抵抗が起きる。18世紀末に始まる両者の抗争は、徐々に激しさを増した。当初は共同体内部で平和的に機能していたツァディクと、正統派ラビンも対立を始めた。ハシディズムが優勢な南部地方では、ハシディズムが共同体を掌握、あるいは優勢なもとで正統派と共存することが出来た。ハシディズムに対して最も非妥協的に敵対したのは、リトアニア大公国の正統派であった。リトアニア大公国のユダヤ人共同体は、高名なヴィルノのガオン (Gaon z Wilna - Elijah ben Szlomo Zalman) を頂点に、理論的にもまた実質的にも強力な正統派支配の構造を有しており、当初はハシディズムの入り込む余地は無いと思わ

れていた。しかし1770年代にはハシディズムの影響はリトアニア大公国にも及び始めた。それが発覚すると同時に正統派指導層は即座に反応し、1772年春にハシドへの破門、体刑、追放令が相次ぎ、ハシディズム文書の焼却が命じられた。1781年にリトアニアのラビン会議は、ハシディズム追放の1772年の決定を再認し、ポーランド国家全体の共同体に向けてハシディズム排除を呼びかけた。当然のことながら、ハシドの側も相応の反撃を開始し、両派の抗争が続いた。第3次分割によって、リトアニア大公国の大部分とポドレ地方、ウクライナ地方の大部分がロシア領となった。ポーランド国家が滅亡した後も、正統派とハシドの争いは継続し、両者ともがロシア当局に訴えを出し、また買収合戦を繰り返した。結果的にはロシア当局はこの訴訟合戦からは手を引いてしまい、最後はロシア政府が1804年に、ハシドを独自の信仰集団と認め、自身の指導者つまりラビンを選出する権利を認めたことにより、法的地位の面での争いは終結した。<sup>16)</sup> これにより、正統派とハシディズムは法的に同等となり、敵対しながらも共存する体制が出来上がった。すなわち基本的には相容れない二つのユダイズムが並立することになったのである。

## おわりに

このような一連の動きの結果、分割前のポーランド国家のユダヤ人社会は概ね、正統派とハシディズムに分かれ、それぞれが独自のユダヤ・アイデンティティを有して共存することとなった。16世紀のルリアのカバラー神秘主義に影響されて起こったサバタイ・ツヴィのメシア運動や、その再現とも言えるフランクの運動は、改宗を救済の条件としたことであたかもユダイズムに離反したように見えるが、他の宗派を受け入れてもそこにユダヤ人としての可能性を見出す、まったく新たな思考の枠組みを提供したものとも考えられる。ハシディズムは、サバタイズムやフランキズムと同じような地域、精神的環境の中で同じ神秘主義の要素を中心に据えながらも、政治的には伝統的な正統派支配の構造を認めつつ、独自の救済あるいは精神的解放の道筋を示し、強力な勢力を築き上げた。

分割前のポーランド国家のユダヤ人社会が、抗争の果てに正統派とハシディズムに色分けされたのと時を同じくして、第三のユダイズムが発生する。ユダヤ啓蒙として知られるハスカーラーの影響の拡大である。周囲のキリスト教社会に文化的に同化することにより、新たな時代に適應することの意義を強調するハスカーラーの方向は、生存の型式全体を包み込むユダヤ教の意味を大きく変えることになる。ユダヤ人が、キリスト教社会の中の異質な民であることを止め、ユダヤ教を維持しつつ国家の同等の一員として、一市民として新たなアイデンティティを持つことを志向したのである。宗教の意味を相対化して、周囲の社会へ同化するという概念は多様な意味を持ちうる。場合によってはフランキズムの思想と重なり合うことも考えられる。後に「改革派」の名で新たなユダイズムの世界を生み出したこの思想運動は、18世紀末にドイツ地域の啓蒙主義知識人によって喧伝され、ポーランド地域に広まるとともに、西ヨーロッパ、アメリカにも広まって行く。かつてのポーランド国家領域に関しては、ポーランド分割によって政治的条件が激変し、また各地域の社会、経済の変化によって、各国のユダヤ人社会で激しい階層分化が生じ、それがユダヤ人アイデンティティの変遷に影響を及ぼすことになる。ポーランド分割後の歴史、改革派の進展については、稿を改めることとする。



## 付 記

本稿は、2017-2019年度科学研究費補助金（基盤研究C「レリギオとレギオの狭間：セファラディーム・アシュケナジーム・ミズラヒーム」）の成果の一部である。

## 注

- 1) 18世紀末のポーランド分割まで存続したポーランド王国とリトアニア大公国の連合国家（Rzeczpospolita）。表記上の煩雑さを避けるため、特にリトアニア大公国を強調する必要がある場合を除いて、本稿では以後この国家を便宜上「ポーランド国家」と表記する。また本文中で、人名その他の用語に原語を追記する場合には、ポーランド語で表記することを原則とする（基本的には *Polski słownik judaistyczny* の表記に準じた）。それは大部分の対象がポーランド国家のユダヤ人に関わることであり、またヘブライ語のトランスクリプションにおける混乱を避けるためである。
- 2) ホロコーストとその後のイスラエルの建国によって、世界のユダヤ人社会の重心がアメリカとイスラエルに移動したため、第二次大戦前のヨーロッパのユダヤ人世界、とりわけ世界最大のユダヤ人集積地であったかつてのポーランド国家のユダヤ人世界の記憶が薄れつつある。本稿は現代のユダヤ人のアイデンティティを考えるうえで、この国家および第二次大戦前のポーランド共和国に存在したユダヤ人共同体の営みがいかに大きな意味を持っていたかを思い起こすきっかけとなることも目指している。
- 3) 本稿の叙述の大半を占める歴史的出来事の叙述は、以下に挙げる辞典、百科事典を参照した。これらはそれぞれユダヤ史研究において一定の評価を得ているものばかりだが、着目点や解釈について、様々な箇所而异同がないわけではない。だがここではこれまでの研究史において、おおよそ妥当とされている記述内容に沿うことを原則とし、特に必要な場合を除いて個別の歴史的的事象に関する叙述に注記はしない。 *Jüdisches Lexikon. Ein enzyklopädisches Handbuch des jüdischen Wissens in vier Bänden*. Berlin 1927; *Encyclopedia Judaica*. New York 1971-1972; *The YIVO Encyclopedia of Jews in Eastern Europe*. Vol. 1-2. New Haven & London 2008; *Neues Lexikon des Judentums*. Gütersloh-München 1992（ポーランド語訳：*Nowy leksykon judaistyczny*. Warszawa 2007. 日本語訳：『ユダヤ小百科』水声社、2012年）； *Polski słownik judaistyczny. Dzieje - kultura - religia - ludzie*. Tom 1-2. Warszawa 2003.
- 4) 16世紀に人头税徴収業務に関連して設置されたポーランド国家のユダヤ人の全国組織。詳しくは次章の記述、および拙稿「分割前ポーランドにおけるユダヤ人の自治——全国会議 Waad Arba Aracot の構造と機能——」『東京国際大学経済学論叢』第20号（1999年3月）を参照。
- 5) サバタイ・ツヴィについては、ゲルシヨム・ショーレム『サバタイ・ツヴィ伝——神秘のメシア』（石丸昭二訳）法政大学出版局、2009年を参照。
- 6) Statut kaliski. ヴィエルコポルスカ（Wielkopolska）公ボレスワフ・ポボジヌイ（Bolesław Pobożny）によってポーランドのユダヤ人に初めて与えられた特権で、後の様々な特権の原型をなす。カリシュ特権の形成への過程、その影響については拙稿「ポーランド・ユダヤ人の「一般特権」について」『東京国際大学経済学論叢』第33号（2005年9月）を参照。
- 7) ラビ（rabi, rabbi）という名でよく文献に登場するが、その場合上述のラフと混用されることが多く、歴史的に多義的である。ここではポーランド語で共同体の公的な指導者としてラビンと記述するケースが多いので、それを踏襲する（ドイツ語では Rabbiner）。このラビンを議長とする統治組織がラビナート（rabinat）である。この間の事情については、 *Rav, Rabbi, Rebbe. Rabbis in Poland*. Warszawa 2012 を参照。
- 8) 正統派という名称は、後の時代に新たに発生した他の潮流と区別するために使われた歴史的用語であって、本稿が扱う18世紀頃に使用されていたわけではない。現在では明確に意味付けられて、正式名称となっている。
- 9) この時期についてはサバタイ派、フランク支持者の区別は意味がないので、しばらくはサバタイ派あるいはサバタイストと表記する。
- 10) 唯一「タルムードはユダヤ人はキリスト（教徒）の血を必要とすると教えている、したがってタルムードを信ずる者はその使用を義務づけられている」という点のみ、裁定がヴァチカンに委ねられたとある。 *zob. Polski słownik judaistyczny*.

- 11) 1655-1660年のスウェーデンとの戦争 (Potop szwecki) の折り、ヤスナ・グーラ修道院の攻防戦がスウェーデン軍の侵攻を食い止め反攻の契機となったことから、その修道院のシンボルであるマリア像への崇拝が生じ、後に国家ひいては民族を救うものとして信仰の対象となり、現在も続いている。
- 12) フランクの思考には、イベリア半島の改宗ユダヤ人マラーノとの心的類縁性を見ることが出来るかもしれない。
- 13) メンデルスゾーンはフランクがオッフェンバハに移った年に死去しているため、両者が直接個人的につながりを持った形跡はない。
- 14) Vgl. Davidowicz Klaus S., *Zwischen Prophetie und Häresie. Jakob Franks Leben und Lehren*, Wien-Köln-Weimar 2004.
- 15) ハシディズムの諸集団の長。単に後述の宗家 (dynastia) の指導者としてではなく、信者からは神に近い存在、神の言葉を伝える預言者的な存在として崇拝された。ハシドの間では、レベ (rebbe) という名で呼ばれた。
- 16) オーストリア領となったガリツィアでは、1789年の寛容令で同様のことが認められた。プロイセン領では、改革派という新たなユダイズムの発生と関連し、他の分割領とは異なる経過を辿った。

## Investigative Research

# History of Sweet Potato Ice Cream in the United States: A Brief Survey

DUELL, Barry

### Abstract

Nancy Johnson's ice cream maker's 1843 patenting in the United States resulted in ice cream becoming widely available throughout the country, whether through making ice cream at home, or through the use of her technology for ice cream manufacturing for retail sales. However, even though enabled with Johnson's innovative technology, no matter how many times over more than a century sweet potato growers and processors, dairy experts, ice cream manufacturers, marketers, and other experts, along with average citizens, attempted to popularize sweet potato ice cream, it seems to have never taken root even locally for any length of time in spite of the enthusiasm of creators. Nonetheless, temporary successes seem to have come primarily from niche uses of such ice cream at state sweet potato growers' or processors' gatherings, at sweet potato festivals, or as a specialty item during the Thanksgiving season at local restaurants or ice cream shops as a novelty. The United States sweet potato ice cream situation is briefly compared to the case of such ice cream having taken root in 1984 in Kawagoe, Japan, an area traditionally associated with sweet potatoes.

*Keywords:* ice cream, Nancy Johnson, sweet potato, United States, Japan, Kawagoe

### Contents

- I. Introduction
- II. The Author's Childhood Images of Ice Cream
- III. Invention of the Hand-Cranked Ice Cream Freezer
- IV. Beginnings of Sweet Potato Ice Cream
- V. East Texas Yamboree Sweet Potato Festival
- VI. Sweet Potato Ice Cream and the Louisiana Yambilee Sweet Potato Festival
- VII. Maryland Sweet Potato Ice Cream from 1960s
- VIII. Mississippi Sweet Potato Ice Cream from 2006
- IX. Current State of Sweet Potato Ice Cream Manufacturing
- X. Conclusion
- XI. Epilogue
- XII. Acknowledgement

## I. Introduction

Häagen-Dazs Japan, Inc. introduced a limited edition, seasonal Purple Sweet Potato ice cream to the Japanese market in 2016.<sup>1)</sup> Other Häagen-Dazs seasonal sweet potato ice creams have followed annually: Anno Sweet Potato ice cream in 2017, Purple Sweet Potato Cream Brulee ice cream in 2018, and a Purple Sweet Potato Ice Cream Crispy Sandwich in 2019.<sup>2),3),4)</sup> Perhaps this is one result of a sweet potato renaissance that began in Kawagoe City, Saitama Prefecture, Japan in 1981 which brought together people of a wide variety of interests and specialties that helped raise the image of sweet potatoes, resulted in many new sweet potato products, helped restore pride in Kawagoe's flagging, historic sweet potato image, and more. Among many other sweet potato products, frozen sweet potato desserts of various types have also been created and successfully marketed in Kawagoe by small and middle-sized businesses.<sup>5)</sup>

This paper looks back at the author's country of origin, investigating more than a century of sweet potato ice cream history in the United States through the eyes of press archives, and other references including personal communications, to give a general overview of the situation.

## II. The Author's Childhood Images of Ice Cream

The author, a post-WWII baby boomer, grew up in a family of 6. With a tight family budget as a child, the only time we ate real ice cream was when we made it ourselves in summer. Normally we ate inexpensive imitations of ice cream using little or no butterfat. In the 1950s and even into the 1960s, at stores in my hometown, Salem, Oregon, ice cream or its cheaper imitations normally came in only one of 3 flavors, vanilla, chocolate and strawberry.

In summer, especially when guests visited, we hand-cranked ice cream in our backyard. There were sometimes other hand-cranked ice cream centered community gatherings whether as part of a picnic in a park, or at church ice cream socials, etc. Vanilla was a standard flavor pleasing to all, but fine toppings were also made including those based on local strawberries, peaches, vine berries, and other local fruits in season. Made using cream, all greatly enjoyed freshly churned ice cream. Children enjoyed challenging the cranking along with adults. Ice cream making and eating brought people together.

When Baskin-Robbins 31 Ice Cream opened in Salem in August 1967, we suddenly had many more choices of ice cream flavors to choose from compared to the traditional three standard flavors.<sup>6)</sup>

## III. Invention of the Hand-Cranked Ice Cream Freezer

Nancy M. Johnson was only the 24th woman to be granted a US patent when she received one in 1843 for her invention of a hand-cranked ice cream freezer, a labor saving device that led to expanded consumption of ice cream. In that her patent number was 3,254, it becomes quickly apparent that the ratio of women receiving patents from the 1790 first issuance to a man till Johnson's 1843 patent was quite small, a situation that subsequently improved.<sup>7)</sup> Johnson's invention

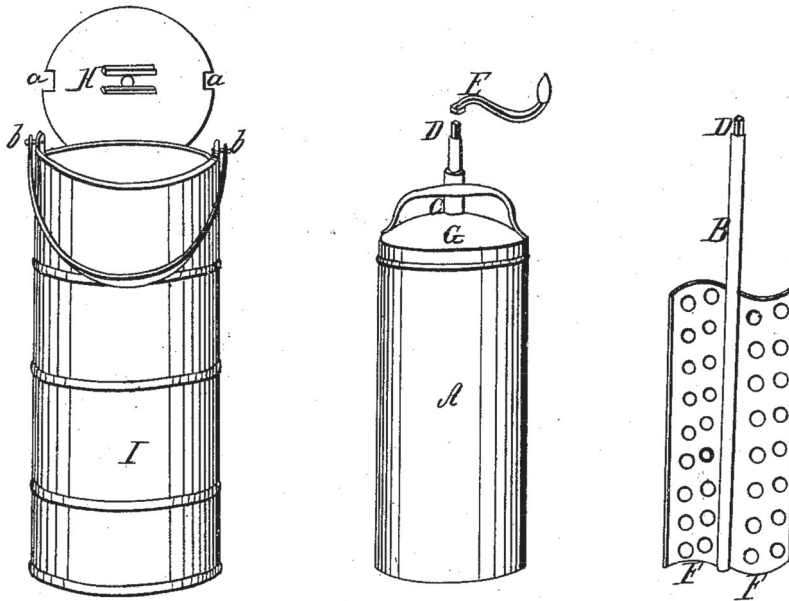


Fig 1 Diagram of the components of Nancy M. Johnson's "Artificial Freezer" for which her US Patent No 3254 was issued September 9, 1843.<sup>10</sup> The dasher (right) is placed in the metal container (middle) containing the ice cream mixture. The container is then placed in the bucket (left), and crushed ice and rock salt are packed around the container. The container's crank is then rotated by hand until a firm, smooth ice cream is formed.

"democratized ice cream since it allowed even those who lacked servants and helpers to make it." "By the 20th century, ice cream was an everyday treat enjoyed by all."<sup>8</sup>) Johnson's invention was so well designed that it varies little from what one might purchase today for home use, though invented nearly 180 years ago (Fig 1).<sup>9</sup> A much later major addition was a motor for doing the churning.

#### IV. Beginnings of Sweet Potato Ice Cream

One of the earliest accounts of sweet potato ice cream to appear in the United States was printed in a 1918 local Hawaiian newspaper. The recipe for sweet potato ice cream is based on a pudding recipe introduced in the same article.<sup>11</sup> The article's purpose was to introduce the making of homemade sweet potato flour as a partial substitute for wheat flour, part of a national campaign for citizens to aid the WWI war effort by cutting back on wheat flour, red meat, sugar, and animal fats which were being sent to Europe for assuaging the war-caused food shortages there, and by May 1918 for also feeding the more than 1 million US troops stationed in France. The US government was also encouraging the drying of foods to reduce food waste, and to extend the storage life of food.<sup>12</sup>

In a June 1927 Turlock, California, local newspaper, A. F. Spawn is introduced as a dehydrated food expert due to speak at a Chamber of Commerce luncheon at which a number of

menu items were to be made from dehydrated sweet potato, including sweet potato ice cream.<sup>13)</sup>

In the midst of the Great Depression a January 1936 recipe column in an Orangeburg, South Carolina, local newspaper introduces a number of recipes utilizing sweet potatoes, described as being one of the most typically Southern foods versatile not only as a vegetable, but also as a dessert ingredient. A recipe for sweet potato ice cream is given, described as an unusual dessert, but well worth trying. One can understand from this that in that area sweet potato ice cream was rare. The proportion of dairy products to sweet potato is 2 parts cream to 1 part cooked strained sweet potato, likely a rich dessert.<sup>14)</sup>

Five months later, the same recipe, both the ingredients and their quantities, as well as the preparation description, was introduced by a reader of a local paper in Rochester, New York, describing the sweet potato ice cream as unusual, but delicious. Such ice cream seems to have not been familiar in the Rochester area either. The puzzle remains as to how that recipe might have travelled nearly 1,300 km to New York.<sup>15)</sup>

## V. East Texas Yamboree Sweet Potato Festival

Texas estimated sweet potato production in 1935 was about 160,000 metric tons, less than 8 percent of US estimated production.<sup>16)</sup> By the early 1930s, East Texas sweet potato income ranked seventh among Texas crops. The sweet potato weevil had been largely eliminated in the East Texas sweet potato growing area. Curing plants were becoming widespread for lengthening the storage life of sweet potatoes which then helped lengthen the availability of that crop in the marketplace, and enabled shipment to more distant markets.<sup>17)</sup>

Gilmer, the county seat in Upshur County, one of East Texas' major sweet potato growing areas, took the initiative to hold the first East Texas Yamboree in October 1935 as a celebration of sweet potato becoming a major crop again following elimination of the sweet potato weevil.<sup>18)</sup> Upshur County finances had increased considerably due to county property evaluations having increased substantially due to increased oil production in the county which may have contributed to county willingness to be involved in the Yamboree.<sup>19)</sup> At least by the next year, all 40 sweet potato growing counties in East Texas were included in the festival. To urge these counties to be part of this festival, a 25 car caravan that included the Gilmer High School band drove among the sweet potato growing population centers for 2 days publicizing the upcoming Yamboree.<sup>20)</sup> Such publicity caravans continued till at least the 1950s.<sup>21)</sup> Gilmer's population was about 2,000 when the Yamboree was created in 1935. Its 2018 population is estimated to be about 5,000.<sup>22)</sup> The Yamboree continues to this day even though Texas sweet production is currently estimated to be less than 1 percent of US total.<sup>23)</sup> Festival events include the crowning of a Yamboree Queen, as well as announcing sweet potato pie contest winners, holding parades, and more.<sup>24)</sup>

Sweet potato ice cream appeared at the October 1936 Yamboree's Yam Products Booth among the more than 50 products whose recipes were created by and product preparation done by the Upshur County Home Demonstration Clubs. The ice cream was to be frozen using a hand-cranked ice cream freezer. Since the recipe calls for 16 parts milk and 4 parts cream but only 1 part cooked, strained sweet potato, the taste of sweet potato must have been considerably subdued.<sup>25)</sup>

Nonetheless, by offering recipe books of these 50 plus sweet potato products at the Yam Products Booth, and by including selected recipes in area newspaper write-ups about the Yamboree, a major effort was being made to not only celebrate East Texas' sweet potato growing, but also to develop pride in eating more of that area's famous product at home in a variety of creative new ways. This was hopefully a successful outreach by the County Extension Service sponsored Home Demonstration Clubs.<sup>26)</sup>

A few months after the October 1936 Yamboree sweet potato ice cream was introduced in the local East Texas press, a local Women's Club event was introduced in the Palm Beach, Florida, local newspaper with sweet potato ice cream as one menu item introduced to the public at its annual Cooking School fund raising event in February 1937. The proportion of dairy ingredients to cooked, strained sweet potato was 1 part cream to 1 part sweet potato, a rich ice cream.<sup>27)</sup>

In the November 1940 Emporia, Kansas, local paper, the same sweet potato ice cream recipe introduced at the February 1937 Palm Beach, Florida, cooking event is introduced.<sup>28)</sup> In an era when people received their news from their community's local newspaper or radio station, it is curious how the Palm Beach recipe was transported nearly 2,300 km to Emporia. Since the presenter at the Palm Beach event was the home service director for the Consolidated Electric and Gas Company, and since the Emporia article was written by the Home Economist of Kansas Electric Power Company, one might speculate that perhaps information was exchanged at a public utilities conference, or through a public utilities trade journal.

## **VI. Sweet Potato Ice Cream and the Louisiana Yambilee Sweet Potato Festival**

As early as November 1937, a sweet potato ice cream recipe appeared in the Louisiana press in the 2nd Annual Cook Book of Southern Recipes, a special pre-Thanksgiving section of Shreveport's local newspaper. The amount of sweet potato specified in the recipe is particularly scant, one part boiled, mashed, strained sweet potato to 20 parts milk and cream.<sup>29)</sup> The recipe is identical to the one introduced above for making the Yamboree sweet potato ice cream first described in the October 1936 Paris News (Texas).<sup>30)</sup>

The 1946 Louisiana Sweet Potato Association annual meeting was held on March 13, 1946. Several thousand members, including sweet potato growers and processors, discussed how to increase production and usage. One of many projects discussed was sweet potato ice cream mix production. It appears that dried sweet potatoes, something that Louisiana growers contracted with the federal government to produce large quantities of during WWII, and which allows use of otherwise low value cull sweet potatoes, seem to have been ground into a flour for making sweet potato ice cream mix among other products. About 1,500 liters of sweet potato ice cream were prepared for the Association's luncheon, served along with a number of other sweet potato products.<sup>31)</sup> 1946 is also the year Louisiana harvested about 280,000 metric tons of sweet potatoes, more than any other state.<sup>32)</sup>

The next month, April, in Opelousas, LA, it was announced that a sweet potato festival organizing committee had been formed, and that the new festival, which would be called Yambilee, would be held in October 1946. Yambilee's purpose was as much to boost consumption of Louisiana sweet potatoes both in state and out of state, with the Opelousas area being a major production area,

as to boost civic pride.<sup>33)</sup>

Sweet potato ice cream, as related to the Yambilee, appeared as early as September 1946 a month before the new festival opened. Fifteen sixth grade students prepared a poster featuring each boy's favorite sweet potato recipe that included one for sweet potato ice cream submitted by the class president. How these recipes were ever utilized is not clear, but the students' poster, presented to the Yambilee organizers, was hung on the wall of the festival headquarters.<sup>34)</sup>

Events held at the 1947 festival included the crowning of a Yambilee Queen, as well as distribution of sweet potato pie to Yambilee visitors. Each year's queen thenceforth became an ambassador for popularizing the area crop for a year. Parade floats were also important during the Yambilee for publicizing different aspects of Louisiana's sweet potatoes, and other state crops and industries. Sweet potato ice cream appeared in the October 1947 Yambilee as the theme of one of the floats in a flotilla promoting different uses of sweet potato. In addition to this flotilla were other floats sponsored by area municipalities, businesses, individuals, and out of state produce distributors, all in some way promoting Louisiana-grown sweet potatoes, and making up the annual Yambilee Grand Parade which had at least 39 floats and more than a dozen bands in 1947.<sup>35)</sup>

The first all-Louisiana sweet potato cooking contest ran in conjunction with the 1952 Yambilee festival. Some thousands of high school girls enrolled in Home Economics classes throughout Louisiana joined annually from 1952. The four levels of competition began first with competing at ones high school. Each high school winner then competed at the parish (county) level. Each parish winner next competed at the regional level. The several regions then each sent their winners to the state competition in Opelousas. This contest would be more accurately described as a home economics skills competition with a sweet potato theme since meal planning, table setting, and other skills were also judged. However, in addition, contestants' appearance, personality, communication skills, etc. were judged since the winner would represent Louisiana sweet potatoes at out of state marketing conventions, make stage appearances, appear on TV, on radio, etc. for cooking up her prize winning recipe or others using sweet potatoes. The contest winner would be part of a marketing entourage of the Yambilee Queen, Yambilee organizers, representative Louisiana sweet potato growers and processors, researchers, etc. The winning sweet potato recipe in 1957 was for sweet potato ice cream, so that product got exposure throughout Louisiana and beyond.<sup>36)</sup> With thousands of high school home economics students participating in the annual sweet potato focused cooking contest, this was hoped to encourage Louisiana families to consume more sweet potato, and it seemed to be hoped that if these girls later married and raised families, that the amount of Louisiana sweet potato consumption in their future homes would also be increased as a result of having participated in one of these annual cooking contests.

In 1963, a recipe for "Yambilee ice cream pie," which features sweet potato ice cream, appeared in at least 20 out of state newspapers in 15 states, mostly in March, but also in April and July. It is described as being a new recipe that has emerged from Louisiana's Yambilee festival, but it is not clear whether it was prize winning.<sup>37)</sup>

In 1967, a high school girl district winner of the Golden Yam Contest (what the Yam Cooking Contest came to be called) at the Yambilee prepared "Yambilee Ice Cream Pie" whose recipe varies only slightly from the version publicized nationwide 4 years earlier. She did not win the statewide



Golden Yam Contest, however.<sup>38)</sup>

But, also in 1967, another high school girl had placed first at the Louisiana State level with her “Yambilee Ice Cream Pie” in a 4-H cooking competition, earning her the right to compete at the National Junior Horticultural Association competition in New York City in December. There, she placed eighth at the national level. It is not clear how similar her recipe was to the one publicized in the national press in 1963.<sup>39)</sup>

In 1972 at a district level Golden Yam Contest, in one district, “Frozen Yam Orange Delight” finished second, with “Golden Yam Ice Cream” placing third. Details of the two frozen dessert recipes are not available.<sup>40)</sup>

The 1973 Golden Yam Contest winner’s recipe was for sweet potato ice cream served on meringue shells.<sup>41)</sup> The 1974 Contest was opened up to allow both girls and boys taking home economics in high school to join.<sup>42)</sup>

Apparently the last appearance of sweet potato ice cream in the Golden Yam Contest was a recipe for Sweet Potato Praline Freeze that won the 1981 Contest.<sup>43)</sup> It was this recipe that later inspired the author to create a Japanese sweet potato ice cream as described below.

The Yambilee finally faded away in the 2010s from lack of public interest and support after nearly 70 years of celebrating Louisiana sweet potatoes.<sup>44)</sup> The Golden Yam Contest appears to have similarly met its demise. A harbinger of the Yambilee’s demise was the decline of sweet potato’s role in St. Landry Parish (County) where Opelousas is the largest city. In the late 1940s, about the time the Yambilee began, more than 19,000 ha of sweet potato were farmed in the parish which also attracted shippers and processors to set up business. By 2007, only about 140 ha of sweet potato fields remained, with shippers and processors having likewise declined.<sup>45)</sup>

## VII. Maryland Sweet Potato Ice Cream from 1960s

Maryland is estimated to have harvested about 20,000 metric tons of sweet potatoes in 1963, about tenth place nationwide and an estimated three percent of national production. The Maryland harvest declined to less than 1,000 metric tons as estimated for the 1994 crop after which the USDA discontinued production estimates for Maryland.<sup>46)</sup>

It was in 1963 that local Maryland newspapers began reporting that two wives of farmer members of the Maryland Sweet Potato Association (MSPA) were working to perfect a sweet potato ice cream recipe. At a September 1963 agricultural fair in Salisbury, about 190 liters of sweet potato ice cream samples were devoured by attendees with good reaction.<sup>47)</sup> In time for November 1963 Thanksgiving food preparations, a University of Maryland food economist promoted local sweet potatoes with a sweet potato themed recipe column in a Maryland newspaper that included sweet potato ice cream. This recipe is nearly identical to the MSPA women’s version that surfaced in the news decades later. Both recipes contain about 20 percent mashed sweet potato.<sup>48)</sup>

The Maryland Governor’s wife, Helen Tawes, who was an avid promoter of Maryland cuisine created using the state’s agricultural and fisheries products, decided that MSPA sweet potato ice cream should be introduced at the Maryland Pavilion opening at the 1964-1965 New York World’s Fair, and delivered a batch of it herself. The ice cream was orange, indicating its having been made

from a high carotene sweet potato cultivar, and it had a lemon tang. A news article described that “its flavor is so delicate most people can’t place the taste.”<sup>49)</sup>

Also deeply involved in the sweet potato ice cream development and commercialization project was the University of Maryland Dairy Department, in particular Dr. Wendell Arbuckle, a world authority on ice cream matters. Dr. Joseph Mattick, Arbuckle’s colleague, said later of the ice cream, “You couldn’t tell it was sweet potato, but it was very good.”<sup>50)</sup>

In November 1964, an executive of the local branch of Borden Co., also involved in commercially developing the ice cream, presented a pack of sweet potato ice cream to the Maryland Governor in the presence of representatives from the MSPA, and the Maryland State Department of Markets which also contributed to the product development and marketing.<sup>51)</sup>

The sweet potato ice cream was also sold at the University of Maryland’s dairy sales room for some time before disappearing.<sup>52)</sup> Arbuckle commented 12 years after Maryland’s sweet potato ice cream’s 1964 commercialization, “It never caught on.”<sup>53)</sup> Nonetheless, Arbuckle included a commercial version of University of Maryland’s sweet potato ice cream recipe in his 1966 tome “Ice Cream.”<sup>54)</sup> The 2013 7th edition of “Ice Cream” revised and published 26 years after Arbuckle’s death also contains a commercial recipe for sweet potato ice cream.<sup>55)</sup>

Borden was not the only major ice cream company to attempt the marketing of sweet potato ice cream in the United States. Ben & Jerry’s had put Miz Jelena’s Sweet Potato Pie ice cream on the market in 1992, but it disappeared the next year.<sup>56)</sup> Häagen-Dazs has no plans to introduce sweet potato ice cream in the United States, though Häagen-Dazs Japan has annually introduced a limited edition sweet potato ice cream in Japan since 2016.<sup>57)</sup>

### **VIII. Mississippi Sweet Potato Ice Cream from 2006**

Mississippi is estimated to have harvested more than 110,000 metric tons of sweet potatoes in 2006, third largest in the United States and about 15 percent of the US harvest.<sup>58)</sup> In 2006, a sweet potato ice cream containing toasted pecans and marshmallows was to have been added to the ice cream menu at the Mississippi State University’s (MSU) Cheese Store. This was born from research funded by the Mississippi Sweet Potato Council to create new value added products especially those utilizing Mississippi sweet potatoes of non-standard size or shape, etc., which cannot be sold on the premium priced fresh market.<sup>59)</sup>

Sweet potato ice cream was still on the menu at MSU in spring 2007, but it seems to have subsequently disappeared. In an April 2014 MSU Extension Service news release it was announced that a new sweet potato ice cream was being created through collaboration between Sweet Potato Sweets bakery/pastry shop and Mississippi State University. However, in a 2018 query to the MSU Cheese Store, the manager replied that sweet potato ice cream had not been carried for several years.<sup>60)</sup>

### **IX. Current State of Sweet Potato Ice Cream Manufacturing**

There are small businesses in the United States offering various versions of sweet potato ice

cream around Thanksgiving, even though offerings seem to change, appear, and disappear, year by year. Some examples include:

Salt & Straw is a premium ice cream company that started as a food cart in 2011 in Portland, Oregon, and now has shops in Portland, and other West Coast areas. During the 2013 Thanksgiving season, a Thanksgiving Gift Pack was offered that was shipped nationwide, containing turkey, cranberry, and sweet potato-based ice creams. Other variations of its sweet potato ice cream have subsequently appeared around Thanksgiving.<sup>61)</sup>

The Elements Cafe in Haddon Heights, NJ, served a variety of sweet potato dishes, including ice cream, at Thanksgiving in 2008. It is not certain how regularly this menu is offered at Thanksgiving since then.<sup>62)</sup>

Weckerly's, a maker of ice cream sandwiches in Philadelphia, Pennsylvania, offered a sweet potato version at least one Thanksgiving (2014).<sup>63)</sup>

Neither related to a small business, nor connected with Thanksgiving, a small Sweet Potato Festival which began in 2006, has been held at least eight times since then, August 17, 2019 being the latest as of this writing, at Payne Chapel African Methodist Episcopal Church in Duquesne, Pennsylvania. It is a church fundraiser, as well as a community outreach event. What began as a September event evolved into an August one, though still serving various sweet potato and other dishes, including sweet potato ice cream, each sweet potato dish made by a different church committee.<sup>64)</sup>

## X. Conclusion

Nancy Johnson's ice cream maker's 1843 patenting resulted in ice cream becoming widely available in the United States, whether for making it at home, or using her technology for ice cream manufacturing. Even though enabled with Johnson's innovative technology, no matter how many times over more than a century sweet potato growers and processors, dairy experts, ice cream manufacturers, marketers, and other experts, along with average citizens, attempted to popularize sweet potato ice cream, it seems to have never taken root even locally for any length of time in spite of the enthusiasm of creators. Nonetheless, temporary successes seem to have come primarily from niche uses of such ice cream at state sweet potato growers' or processors' gatherings, at sweet potato festivals, or as a specialty item during the Thanksgiving season at local restaurants or ice cream shops as a novelty.

## XI. Epilogue

Three concurrences may have resulted in sweet potato ice cream taking root in Kawagoe, Japan. 1) The author had received a 1981 sweet potato ice cream recipe from the Opelousas Yambilee as part of research into United States sweet potato festivals.<sup>65)</sup> 2) In June 1983, the Donvier ice cream maker created by Nippon Light Metal Holdings Co., Ltd. had just been released in the Japanese market (Photo 1), (Photo 2). Instead of using crushed ice and rock salt to freeze an ice cream mixture, an aluminum vessel containing refrigerant within its double-walls was first frozen



Photo 1 Components of a Donvier frozen vessel home-use ice cream maker model for making about 500 ml of ice cream. Front L to R: dasher, lid, crank handle. Back L to R: aluminum vessel containing refrigerant within its double walls, outer vessel. Duell photo.



Photo 2 Assembled components of Donvier frozen vessel home-use ice cream maker. After pouring in ice cream mixture and closing lid, dasher is hand-cranked occasionally for about 15 minutes to yield about 500 ml of ice cream. Duell photo.

at least 7 hours, ice cream mix was poured in, the dasher and crank attached, then with about 15 minutes of occasional cranking, one had a small batch of ice cream. This equipment allowed for easy experimenting with sweet potato ice cream making.<sup>66)</sup> 3) A sweet potato renaissance movement had begun in Kawagoe in 1981.<sup>67)</sup>

The author was inspired in 1983 to experiment with creating a Japanese version of sweet potato ice cream using a Donvier ice cream maker after receiving an Opelousas, Louisiana, Yambilee ice cream recipe. A Foley Food Mill worked very well for pureeing cooked sweet potatoes while also removing stringy fiber. In January and March 1984, the author shared this ice cream with the growing circle of Kawagoe, Saitama, Japan, and other sweet potato aficionados but few found sweet potato ice cream desirable, saying, for example, that good ice cream should not be made with starchy ingredients.<sup>68)</sup> Such negative or incredulous reactions to sweet potato ice cream seem to echo that which was recorded over the decades from time to time in the American press as shown with some examples below.

A 1952 article devoted entirely to the writer's skepticism about using sweet potato in ice cream making declared:

"Growers of sweet potatoes, like other farmers, have a respected place in our society. New ways of preparing the product they raise are a boon to them and generally to the consumer as well. But the dignity both of ice cream and of sweet potatoes might suffer if they are mixed."<sup>69)</sup>

A 1965 newspaper asks, "Whoever heard of sweet potato ice cream?"<sup>70)</sup>

Sweet potato ice cream is described as a "far out flavor" in a 1972 article.<sup>71)</sup>

A 2005 April Fools day article "No Kidding" includes sweet potato ice cream among "Selected Ice Cream Flavors Found in Japan" such as whale meat, eel, soft-shelled turtle, and so on, all likely to sound bizarre to American readers.<sup>72)</sup>

Nonetheless, one of the earliest examples of a sweet potato dessert taking root in Kawagoe is the Sorbet au Patato recipe French Restaurant Yoshitora's Chef Hideo Yoshizaki included in a sweet potato cookbook published in July 1984 by Kawagoe Friends of Sweet Potato.<sup>73)</sup> As of this writing, the sorbet remains on Yoshitora's menu 35 years later. That several kinds of sweet potato ice cream successfully took root in Kawagoe inspired the author to look back at the United States expecting to find similar successes. No such long-term successes were found in this brief study. Kawagoe's historically strong sweet potato image, as well as a pool of devoted small business entrepreneurs, appear to have played an important role in the local success of sweet potato ice cream and many other sweet potato products in the Kawagoe area.<sup>74)</sup>

## **XII. Acknowledgement**

This paper is based upon a Japanese version written by the author titled "Amerika no satsumaimo aisu kuriimu shi (1)" in the *Japan Sweetpotato & Potato Quarterly*, No. 135, pp 48-51, April 2018, and continued in "Amerika no satsumaimo aisu kuriimu shi (2)" in the *Japan Sweetpotato & Potato Quarterly*, No. 136, pp 41-4, July 2018, published by the Japan Root and Tuber Crops Development Association Inc. Foundation, Tokyo.



All newspaper articles referred to in this paper were retrieved from the Newspaper.com newspaper database.

## Notes

- 1) Anon., “Purple sweet potato ice cream’ August 30, 2016 release note,” Häagen-Dazs Japan, Inc., Tokyo, July 2016. Retrieved September 3, 2019 from [https://www.haagen-dazs.co.jp/company/newsrelease/2016/\\_830.html](https://www.haagen-dazs.co.jp/company/newsrelease/2016/_830.html)
- 2) Anon., “Anno sweet potato ice cream’ October 3, 2017 release note,” Häagen-Dazs Japan, Inc., Tokyo, August 2017. Retrieved September 3, 2019 from [https://www.haagen-dazs.co.jp/company/newsrelease/2017/\\_103.html](https://www.haagen-dazs.co.jp/company/newsrelease/2017/_103.html)
- 3) Anon., “Purple sweet potato cream brulee ice cream’ November 6, 2018 release note,” Häagen-Dazs Japan, Inc., Tokyo. Retrieved September 3, 2019 from <https://www.haagen-dazs.co.jp/products/others/myseeet-murasakiimo.html>
- 4) Anon., “Purple sweet potato ice cream crispy sandwich’ August 20, 2019 release note,” Häagen-Dazs Japan, Inc., Tokyo. Retrieved December 16, 2019 from [https://www.haagen-dazs.co.jp/company/newsrelease/2019/\\_0711.html](https://www.haagen-dazs.co.jp/company/newsrelease/2019/_0711.html)
- 5) Barry Duell, “The role of the Kawagoe Friends of Sweetpotato [sic] in popularizing the crop in Japan,” *Acta Horticulturae*, No. 703, S.L. Tan (ed.), Leuven, Belgium, Int’l Soc. for Hort. Sci., 2006, pp 47–54. Retrieved September 3, 2019 from [https://www.actahort.org/books/703/703\\_4.htm](https://www.actahort.org/books/703/703_4.htm)
- 6) Anon., “Baskin-Robbins 31 Ice Cream Stores, ‘Grand Opening’ advertisement,” *Statesman Journal*, Salem, OR, August 3, 1967, p 2.
- 7) United States Patent Office, *Women inventors to whom patents have been granted by the United States government, 1790 to July 1, 1888 : also included Appendix 1, July 1, 1888-Oct. 1, 1892; Appendix 2, Oct. 1, 1892-Mar. 1, 1895*, Washington, D.C., Government Printing Office, 1888–1895, p 3. Retrieved September 3, 2019 at <https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=osu.32435074866591&view=1up&seq=10>
- 8) Jeri Quinzio, “Ice cream makers,” Andrew F. Smith, ed. in chief, *Oxford Encyclopedia of Food and Drink in America*, 2nd ed., Vol. 2, Oxford, UK, Oxford University Press, 2013, p 316.
- 9) Maneesha S. Mohan, Jonathan Hopkinson, and Federico Harte, “Chapter 17 milk and ice cream processing,” in *Food Processing/ Principles and Applications*, edited by Stephanie Clark, Stephanie Jung, and Buddhi Lamsal, 2nd ed., Hoboken, NJ, John Wiley & Sons, Ltd., 2014, p 398.
- 10) Nancy M. Johnson, “N.M. Johnson, artificial freezer, No. 3254, patented September 9, 1843,” United States Patent and Trademark Office, Washington, D.C., September 9, 1843. Retrieved September 3, 2019 from <http://pdfpiw.uspto.gov/piw?PageNum=0&docid=00003254&IDKey=944C8B1A8844%0D%0A&HomeUrl=http%3A%2F%2Fpatft.uspto.gov%2Fnetacgi%2Fnph-Parser%3FSect1%3DPTO1%2526Sect2%3DHITOFF%2526d%3DPALL%2526p%3D1%2526u%3D%25252Fnetahtml%25252FPPTO%25252Fsrchnum.htm%2526r%3D1%2526f%3DG%2526i%3D50%2526s%3D0003254.PN.%2526OS%3DPN%2F0003254%2526RS%3DPN%2F0003254>
- 11) Anon., “Sweet potato flour is good substitute,” *Mauui News*, Wailuku, HI, May 17, 1918, p 6.
- 12) a. Robert Shafer, “Rationing (USA),” in *International Encyclopedia of the First World War*. September 3, 2019. Retrieved at [https://encyclopedia.1914-1918-online.net/article/rationing\\_usa](https://encyclopedia.1914-1918-online.net/article/rationing_usa)  
b. Anon., WWI 1914–1918, US Army Europe Fact Sheet, Our History, in Mission & History, *US Army Europe*. September 3, 2019. Retrieved at <https://www.eur.army.mil/Mission-History/>
- 13) Anon., “Dehydration to be subject of Chamber forum, sweet potato bread, ice cream and cup cakes will be served on menu,” *Modesto News-Herald*, Modesto, CA, June 12, 1927, p 15.
- 14) Anon., “Sara Ann’s cooking class,” *Times and Democrat*, Orangeburg, SC, January 2, 1936, p 5.
- 15) Lillian M’Murtrie, “Sweet potato ice cream,” *Democrat and Chronicle*, Rochester, NY, June 12, 1936, p 33.
- 16) Anon., “Table 2, sweet potatoes, production by state 1900 to 2010,” National Agricultural Statistics Service,

- ERA-USDA, US SP Statistics, June 1, 2011. Retrieved September 3, 2019 at <https://usda.library.cornell.edu/concern/publications/dv13zt216?locale=en>
- 17) a. Anon., “East Texas is center of state’s thriving sweet potato industry,” *Times*, Shreveport, LA, June 19, 1932, p 8.  
 b. Anon., “Gilmer, seat of prosperous county, is growing town,” *Longview News-Journal*, Longview, TX, May 31, 1936, p 229.  
 c. (Curing refers to a process that helps prevent harvested sweet potatoes from succumbing to diseases that would otherwise render them valueless. Sweet potatoes should be cured immediately after harvest by storing them at 30 degrees C at 95% humidity for 3 to 5 days. This will “heal” wounds incurred by sweet potatoes when harvested thereby reducing waste caused by disease.) C.A. Clark, G.J. Holmes, D.M. Ferrin, “Chapter 7 major fungal and bacterial diseases,” in Gad Loebenstein, George Thottappilly (eds.), *The Sweetpotato [sic]*, New York, Springer Science+Business Media B.V., 2009, p 98.
  - 18) a. Mary Laschinger Kirby, *Gilmer, images of America*, Charleston, SC, Arcadia, 2009, pp 68-72.  
 b. Yamboree = Yam + Jamboree. Though botanically incorrect, yam in the United States refers especially to orange-meated sweet potatoes (high in carotene)
  - 19) Anon., “Upshur is one of four counties of ETex oil field,” *Longview News-Journal*, Longview, Longview, TX, May 31, 1936, p 229.
  - 20) Anon., “Gilmer group to advertise yam festival, two day goodwill trip by 25 car caravan is underway,” *Marshall News Messenger*, Marshall, TX, October 7, 1936, p 8.
  - 21) Anon., “Gilmer Yamboree part of ETexas (East Texas) culture, tradition,” *Longview News-Journal*, Longview, TX, October 11, 1987, pp 45, 49.
  - 22) Anon., “Gilmer, Texas” in *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, Inc., September 26, 2019. Retrieved September 29, 2019 at [https://en.wikipedia.org/wiki/Gilmer,\\_Texas](https://en.wikipedia.org/wiki/Gilmer,_Texas)
  - 23) a. Anon., “Sweet potatoes - 2015 Texas production measured in cwt,” in *Quick Stats*, NASS-USDA. Retrieved September 5, 2019 at [quickstats.nass.usda.gov/results/E3CE912B-27DD-31FB-BF6C-A61F2BCD1204](https://quickstats.nass.usda.gov/results/E3CE912B-27DD-31FB-BF6C-A61F2BCD1204)  
 b. Anon., “Sweet Potatoes - 2018 US production measured in cwt,” in *Quick Stats*, NASS-USDA. Retrieved September 5, 2019 at [quickstats.nass.usda.gov/results/37FCC637-99CC-3484-B7A0-910AC0680F02](https://quickstats.nass.usda.gov/results/37FCC637-99CC-3484-B7A0-910AC0680F02)  
 c. cwt = hundredweight = about 45.4 kg
  - 24) Anon., “82nd East Texas Yamboree,” 2019, Gilmer Area Chamber of Commerce. Retrieved September 5, 2019 at <https://www.yamboree.com/1720/>
  - 25) a. Anon., “Gilmer group to advertise yam festival, two day goodwill trip by 25 car caravan is underway” *op. cit.*  
 b. Anon., “Delectable yam can be used to make many dishes,” *Paris News*, Paris, TX, October 30, 1936, p 7.
  - 26) Anon., “Appropriate recipes suggested as state ‘Yam Week’ noted,” *Paris News*, Paris, TX, October 22, 1937, p 2.
  - 27) Anon., “Capacity crowd attends cooking school being held by woman’s club building at Lake Worth,” *The Palm Beach Post*, Palm Beach, FL, February 17, 1937, p 9.
  - 28) Mildred Peterson, “Kitchen notes,” *Emporia Gazette*, Emporia, KS, November 14, 1940, p 4.
  - 29) Anon., ‘Yam ice cream,’ in “2nd annual cook book of southern recipes,” *Times*, Shreveport, LA, November 20, 1937, p 31 (in 12 page recipe section).
  - 30) Anon., “Delectable yam can be used to make many dishes,” *loc. cit.*
  - 31) a. Anon., “Sweet potato growers will meet March 13,” *Times*, Shreveport, LA, March 3, 1946, p 12.  
 b. Anon., “Travel south to learn about sweet potatoes,” *Nashville Graphic*, Nashville, NC, April 11, 1946, p 1.
  - 32) Anon., “Table 2, sweet potatoes, production by state 1900 to 2010,” *loc. cit.*
  - 33) a. Anon., “‘Yambilee’ is festival name,” *Daily World*, Opelousas LA, April 16, 1946, p 1.  
 b. Yambilee = Yam + Jubilee. Though botanically incorrect, yam in the United States normally refers to orange-meated sweet potatoes (i.e., high carotene content).

- 34) Anon., "AIC youngsters know their yam cooking; give Yambilee recipes," *Daily World*, Opelousas LA, September 19, 1946, pp 1, 3, 10.
- 35) a. Anon., "Yambilee!," *Daily World*, Opelousas, LA, October 9, 1947, p 1.  
b. Anon., "Official program," *Ibid.*, p 3.  
c. Anon., "Yam pies, yummy!," *Ibid.*, p 17.  
d. Anon., "Yambilee parades," *Ibid.*, p 25.  
e. Anon., "Editorial, and a Yambilee was born," *Ibid.*, p 26.
- 36) a. Anon., "Yam cooking contest starts in schools," *Crowley Post-Signal*, Crowley, LA, November 6, 1954, p 8.  
b. Anon., "TV audience sees how to whip up yam ice cream," *Daily World*, Opelousas, LA, October 17, 1957, p 30.  
c. Anon., "Teenage yam cooks to DC," *Crowley Post-Signal*, Crowley, LA, July 24, 1958, p 10.
- 37) a. Anon., "Search for 'Yambilee ice cream pie' in 1963," Newspapers.com. Retrieved September 19, 2019 at [https://www.newspapers.com/search/#dr\\_year=1963-1963&query=%22Yambilee+ice+cream+pie%22](https://www.newspapers.com/search/#dr_year=1963-1963&query=%22Yambilee+ice+cream+pie%22)  
b. Anon., "Food news, yummy yam recipes come from Louisiana country," *Santa Cruz Sentinel*, Santa Cruz, CA, March 20, 1963, p 27.
- 38) a. Anon., "Susan Tate vies for yam title at Yambilee," *Mamou Acadian Press*, Mamou LA, October 26, 1967, p 7.  
b. Anon., "Royalty reigned," *Daily World*, Opelousas LA, October 31, 1967, p 19.
- 39) a. Anon., "Contestant," *Eunice News*, Eunice, LA, December 5, 1967, p 4.  
b. Anon., "Parish 4-Hers win honors in National NJHA," *Ville Platte Gazette*, Ville Platte, LA, January 11, 1968, p 10.
- 40) Anon., "District yam contest winners are declared," *Daily World*, Opelousas, LA, February 6, 1972, p 2.
- 41) Anon., "On visit here, young cooking expert prepares 'yummy tarts'," *Daily World*, Opelousas, LA, July 1, 1973, pp 1, 12.
- 42) Anon., "District winners, six will compete for yam cook title," *Daily World*, Opelousas, LA, March 13, 1974, p 9.
- 43) Anon., "Comeaux student wins state contest," *Daily Advertiser*, Lafayette, LA, May 15, 1981, p 10.
- 44) a. Anon., "Yambilee," *Daily World*, Opelousas, LA, December 30, 2012, p 3.  
b. Cheryl Devall, "Restart Yambilee festival?," *Daily World*, Opelousas, LA, April 20, 2015, pp A1, A3.
- 45) William Johnson, "Yams aren't king any more," *Daily World*, Opelousas, LA, October 26, 2007, pp 26, 28.
- 46) a. Anon., "Table 11, sweet potatoes, Maryland production 1960 to 1994," National Agricultural Statistics Service, ERA-USDA, June 1, 2011. Retrieved September 3, 2019 at <https://usda.library.cornell.edu/concern/publications/dv13zt216?locale=en>  
b. Anon., "Table 2, sweet potatoes, production by state 1900 to 2010," *loc. cit.*
- 47) Anon., "To award top trophies tonight," *Daily Times*, Salisbury, MD, September 14, 1963, p 1.
- 48) a. Anon., "Marvagolds brighten your holiday meal," *Daily Times*, Salisbury, MD, November 21, 1963, p 20.  
b. Tracy Sahler, "Home plate," *Daily Times*, Salisbury, MD, November 22, 2000, p 7.
- 49) a. Anon., "Sweet potato growers to honor Mrs. Tawes," *Evening Sun*, Hanover, PA, September 18, 1964, p 26.  
b. Anon., "Sweet potato new ice cream flavor," *Herald-News*, Passaic, NJ, September 2, 1965, p 46.
- 50) Anon., "Who invented major ice cream flavors?," *Daily Times*, Salisbury, MD, July 25, 1988, p 28.
- 51) a. Anon., "You can buy sweet potato ice cream, thanks to growers here," *Daily Times*, Salisbury, MD, November 10, 1964, p 17.  
b. Anon., "Gets his ice cream," *Daily Times*, Salisbury, MD, November 10, 1964, p 19.  
c. Anon., "Kommalan, 62, retired executive, dies," *Baltimore Sun*, Baltimore, MD, April, 12, 1978, p 12.
- 52) Anon., "Homemade ice cream boom in the making," *News*, Frederick, MD, May 3, 1972, p 30.
- 53) Lawrence Feinberg, "Call him doctor ice cream," *Poughkeepsie Journal*, Poughkeepsie, NY, August 4, 1976, p 35.



- 54) Wendell S. Arbuckle, *Ice Cream*, Westport, CT, AVI Publishing, 1966, p 41.
- 55) H. Douglas Goff & Richard W. Hartel, *Ice Cream*, 7th ed., NYC, Springer Science+Business Media B.V., 2013, p 103.
- 56) a. S.P. Nimt, “Small Bites,” *Rutland Daily Herald*, Rutland, VT, January 25, 1993, p 7.  
 b. Anon., “Here’s the scoop, ice cream war dishes up batch of tempting flavors,” *Battle Creek Enquirer*, Battle Creek, MI, June 18, 1993, p 10.  
 c. Anon., “Miz Jelena’s sweet potato pie, ginger ice cream with a fudge swirl, 1992-1993,” in *Flavor Graveyard*, Ben & Jerry’s. Retrieved September 5, 2019 at: <https://www.benjerry.com/flavors/flavor-graveyard/miz-jelenas-sweet-potato-pie>
- 57) a. Winter Silva, Häagen-Dazs Brand Ambassador, personal communication, August 29, 2019.  
 b. Anon., “‘Purple sweet potato ice cream’ August 30, 2016 release note,” Häagen-Dazs Japan, Inc., July 2016, *loc. cit.*  
 c. Anon., “‘Anno sweet potato ice cream’ October 3, 2017 release note,” Häagen-Dazs Japan, Inc., August 2017, *loc. cit.*  
 d. Anon., “‘Purple sweet potato cream brulee ice cream’ November 6, 2018 release note,” Häagen-Dazs Japan, Inc., *loc. cit.*  
 e. Anon., “‘Purple sweet potato ice cream crispy sandwich’ August 20, 2019 release note,” Häagen-Dazs Japan, Inc., *loc. cit.*
- 58) Anon., “Table 2, sweet potatoes, production by state 1900 to 2010,” *loc. cit.*
- 59) a. Bob Ratliff, “MSU introduces ‘sweet’ new ice cream flavor,” in *Mississippi Landmarks* Vol 2, No 2, Research, Education & Outreach in the Division of Agriculture, Forestry & Veterinary Medicine, Starkville, MS, 2006 Spring, p 25.  
 b. Bob Ratliff, “MSU unveils ‘sweet’ new ice cream,” *Yazoo Herald*, Yazoo, MS, July 19, 2006, p 2.  
 c. Bonnie Coblentz, “Sweet potato crop perseveres,” *Yazoo Herald*, Yazoo, MS, October 25, 2006, p 8.
- 60) a. Anon., “MAFES sales store offers peanut products,” in *Mississippi Farm Country* Vol 83, No 2, Mississippi Farm Bureau Federation, Jackson, MS, March/April 2007, p 12.  
 b. Brittnie Burton, “Sweet potatoes add healthy twist to meals,” Mississippi State University Extension Service, Starkville, MS, April 1, 2014. Retrieved September 23, 2019 from <http://extension.msstate.edu/news/feature-story/2014/sweet-potatoes-add-healthy-twist-meals>  
 c. Troy Weaver, Mississippi State University Cheese Store manager, personal communication, January 12, 2018.
- 61) a. Steve Dolinsky, “The city’s fat cats of ice cream,” *Chicago Tribune*, Chicago, IL, September 30, 2012, p 6.  
 b. Anon., “Get it while you can...,” *Daily News*, NYC, NY, November 20, 2013, p 51.  
 c. Alison Spiegel, “Salt & Straw’s Thanksgiving ice cream will blow your mind,” *HuffPost*, November 7, 2014. Retrieved September 5, 2019 from [https://www.huffpost.com/entry/salt-straw-thanksgiving\\_n\\_6109734?guccounter=1](https://www.huffpost.com/entry/salt-straw-thanksgiving_n_6109734?guccounter=1)
- 62) Tara Nurin, “Sweet on sweet potatoes,” *Daily Times*, Salisbury, MD, November 19, 2008, p 18.
- 63) Samantha Melamed, “Market basket,” *Philadelphia Inquirer*, Philadelphia, PA, October 30, 2014, p F03.
- 64) a. Monica Haynes, “Sweet potatoes galore at food fest,” *Pittsburgh Post-Gazette*, Pittsburgh, PA, September 13, 2007, p 52.  
 b. Anon., “Oh, so sweet potato pie,” *Pittsburgh Post-Gazette*, Pittsburgh, PA, September 18, 2008, p 36.  
 c. Anon., “Church circuit,” *New Pittsburgh Courier*, September 8, 2010. Retrieved August 29, 2019 from <https://newpittsburghcourier.com/2010/09/08/church-circuit-sp-83211525/>  
 d. James A. Beatty, “6. Payne Chapel AME Church celebrates 5th annual Sweet Potato Festival,” *The Christian Recorder Online*, August 9, 2013. Retrieved August 29, 2019 from [http://tcr-online.blogspot.com/2013\\_08\\_04\\_archive.html](http://tcr-online.blogspot.com/2013_08_04_archive.html)  
 e. Anon., “Sweet Potato Festival is tomorrow!,” Payne Chapel AME Church, *Facebook*, August 14, 2015. Retrieved August 29, 2019 from [www.facebook.com/NewPayneChapelAME/posts/sweet-potato-festival-is-](http://www.facebook.com/NewPayneChapelAME/posts/sweet-potato-festival-is-)

- tomorrow-601-priscilla-avenue-duquesne-pa-15110august-1/689493631185803/  
f. Cornell J. Brownfield, “Sweet Potato Festival Saturday,” Payne Chapel AME Church, *Facebook*, August 19, 2016. Retrieved August 29, 2019 from [www.facebook.com/NewPayneChapelAME/posts/sweet-potato-festival-is-tomorrow-601-priscilla-avenue-duquesne-pa-15110august-1/689493631185803/](http://www.facebook.com/NewPayneChapelAME/posts/sweet-potato-festival-is-tomorrow-601-priscilla-avenue-duquesne-pa-15110august-1/689493631185803/)  
g. Anon., “Sweet Potato Festival and fish fry and fun events,” Payne Chapel A.M.E. Church, 2017. Retrieved September 9, 2019 from [paynechapelduquesne.org/8/2-TRUE-2.htm](http://paynechapelduquesne.org/8/2-TRUE-2.htm)  
h. Anon., “Sweet Potato Festival,” Payne Chapel AME Church, *Facebook*, July 30, 2019. Retrieved September 9, 2019 from [www.facebook.com/NewPayneChapelAME/photos/a.559608650840969/1619781531490337/?type=3&theater](http://www.facebook.com/NewPayneChapelAME/photos/a.559608650840969/1619781531490337/?type=3&theater)
- 65) L. J. Duplechain, Louisiana Sweet Potato Commission, Executive Director, Louisiana Yambilee Inc. Board of Directors, Opelousas, LA, personal communication, August 12, 1982.
- 66) a. Japan Patent Office, “1984 Donvier (Nikkeikin) aisukuriimu seizouki hitto (in Japanese),” in *Dai 3 bu ishousuido 120 nenshi nenpyou*, Design no henshen (kokunai), revised, Tokyo, p 357. Retrieved September 17, 2019 from [https://www.jpo.go.jp/system/design/gaiyo/seidogaiyo/isyou\\_seido\\_ayumi.html](https://www.jpo.go.jp/system/design/gaiyo/seidogaiyo/isyou_seido_ayumi.html)  
b. Anon., *Donvier ice cream maker recipe and instruction booklet*, Browne & Co, Ontario, Canada, February 2, 2000. Retrieved September 9, 2019 from <http://ep.yimg.com/ty/cdn/sendicecream/donvier.pdf>  
c. Fuminori Yokoo, Product Safety and Quality Control, Nippon Light Metal Company, Ltd, personal communication, February 27, 2017.
- 67) Barry Duell, “Role of the Kawagoe Friends of Sweetpotato [sic] in popularizing the crop in Japan,” *loc. cit.*
- 68) Barry Duell, “Notes on sharing sweet potato ice cream with Kawagoe and other sweet potato aficionados,” *1984 appointment book*, January 4, 10, 14, 28, March 3, 1984.
- 69) Anon., “A matter of taste,” *Newark Advocate*, Newark, OH, February 19, 1952, p 4.
- 70) Anon., “Whoever heard of sweet potato ice cream?,” *Maryville Daily Forum*, Maryville, MO, June 8, 1965, p 5.
- 71) Anon., “Homemade ice cream boom in the making,” *loc. cit.*
- 72) Anon., “No Kidding,” *News-Press*, Fort Myers, FL, April 1, 2005, p 54.
- 73) Hideo Yoshizaki, “Sorbet au patato,” in *Showa Imo Hyakuchin*, edited by Kawagoe Friends of Sweet Potato, Kawagoe, published Tanakaya Shuppan, Japan, July 1, 1984, p 78.
- 74) a. Barry Duell, “Sweetpotato [sic] product innovations by small businesses in Kawagoe, Japan,” in *Sweetpotato [sic] Technology for the 21st Century*, W.A. Hill, C.K. Bonsi, and P.A. Loretan, eds., Tuskegee, AL, Tuskegee University, 1992, pp 381-388.  
b. Barry Duell, “Recent changes in the cultural position of sweetpotato [sic] in Kawagoe, Saitama, Japan,” in *Proceedings of International Workshop on Sweetpotato [sic] Production Systems toward the 21st Century*, Don R. LaBonte M. Yamashita, H. Mochida (eds.), Miyakonojo, Miyazaki, Japan, Dept. of Upland Farming, Kyushu National Agricultural Experiment Station, 1998, pp 335-346.

## 執筆 者 紹 介 (掲 載 順)

水 野 厚 志	言語コミュニケーション学部	准 教 授	中国思想・哲学, 中国語教育
緒 方 哲 也	言語コミュニケーション学部	専 任 講 師	中 国 語 学
吉 田 量 彦	商 学 部	教 授	哲学, 倫理学, 思想史
川 名 隆 史	経 済 学 部	教 授	社会思想史, 社会史
DUELL, Barry		名 誉 教 授	歴史人類学・地域研究

## 編 集 後 記

『人文・社会学研究』第5号が発行されました。今号には比較的多くの投稿があり、3本の学术论文および研究ノート、調査研究各1本が掲載されております。ご多忙のなか、査読審査にあたってくださった方々には深く感謝いたします。次号の締め切りは9月30日です。今号にもまして多くの投稿があることを期待します。

(編集担当)

---

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第5号 2020(令和2)年3月20日発行  
[非売品]

編 集 者	東京国際大学人文・社会学研究論叢編集委員
発 行 者	塩 澤 修 平
発 行 所	〒350-1197 埼玉県川越市の場北1-13-1 TEL (049) 232-1111 FAX (049) 232-4829
印 刷 所	株式会社 東 京 プ レ ス 〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-18 3F

---

# THE JOURNAL OF TOKYO INTERNATIONAL UNIVERSITY

Humanities and Sociology

**No. 5**

---

## **Articles**

The Dialogue Narratives in the *Zhuangzi*: An Examination and Comparison  
of Zhuangzi and Huizi and Zhuangzi and Zhuangzi's Disciples ..... MIZUNO, Atsushi

A Study on Teaching the Labiodental [f] to Japanese Learners of Chinese  
..... OGATA, Tetsuya

Did Thorstein Veblen Keep a Cat?  
— Evolution and Culture in *The Theory of the Leisure Class* — ... YOSHIDA, Kazuhiko

---

## **Research Note**

The Split of Jewish Identity in 18-19th Century Poland (1) ..... KAWANA, Takashi

---

## **Investigative Research**

History of Sweet Potato Ice Cream in the United States:  
A Brief Survey ..... DUELL, Barry

---

2 0 2 0